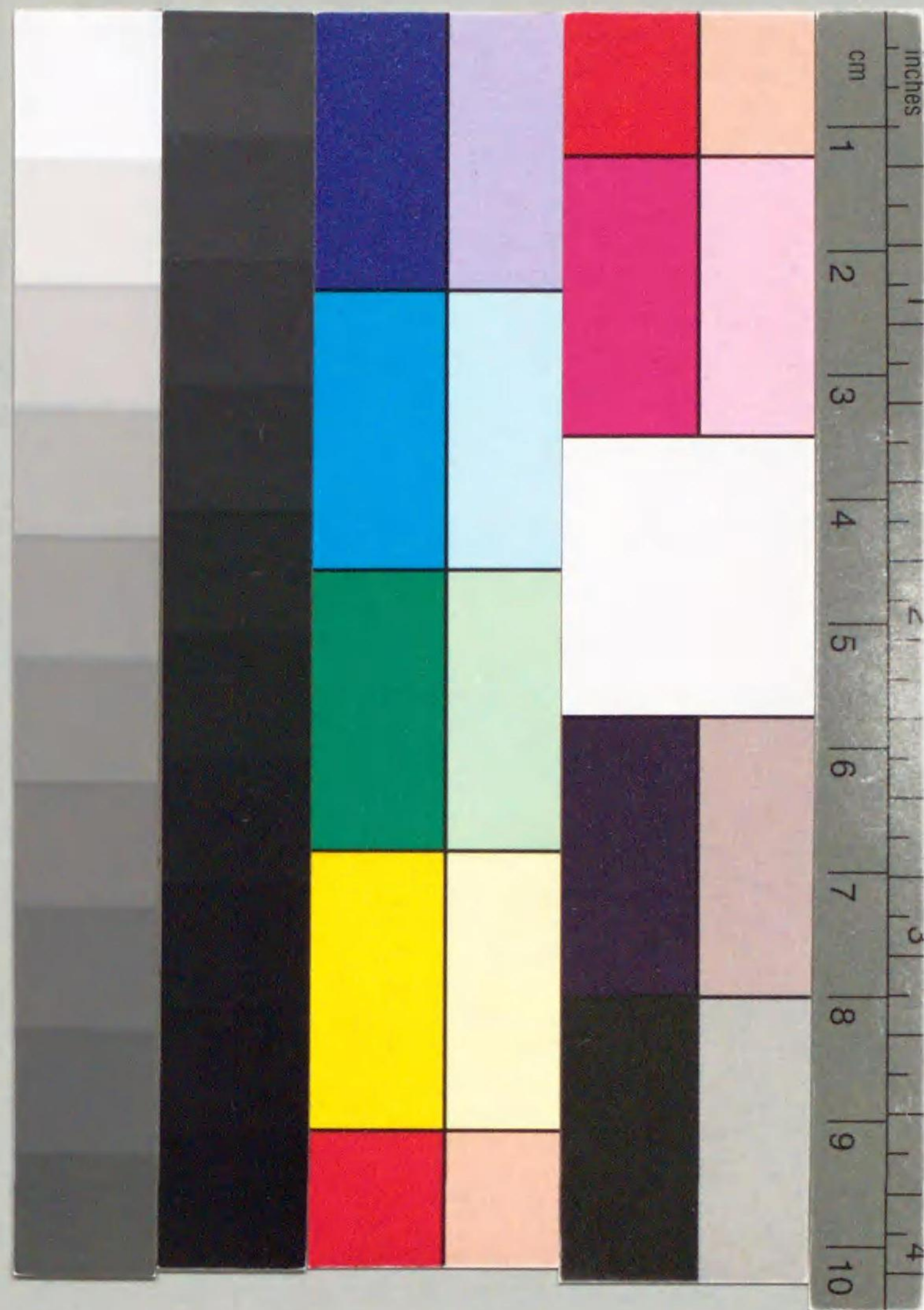


918.6
Ta977k



00298625



一般資料

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

卷 三 第

編 二 外 畏 ・ 花 三 殘 ・ 雨 春 ・ 髮

會 行 刊 集 全 袋 花

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

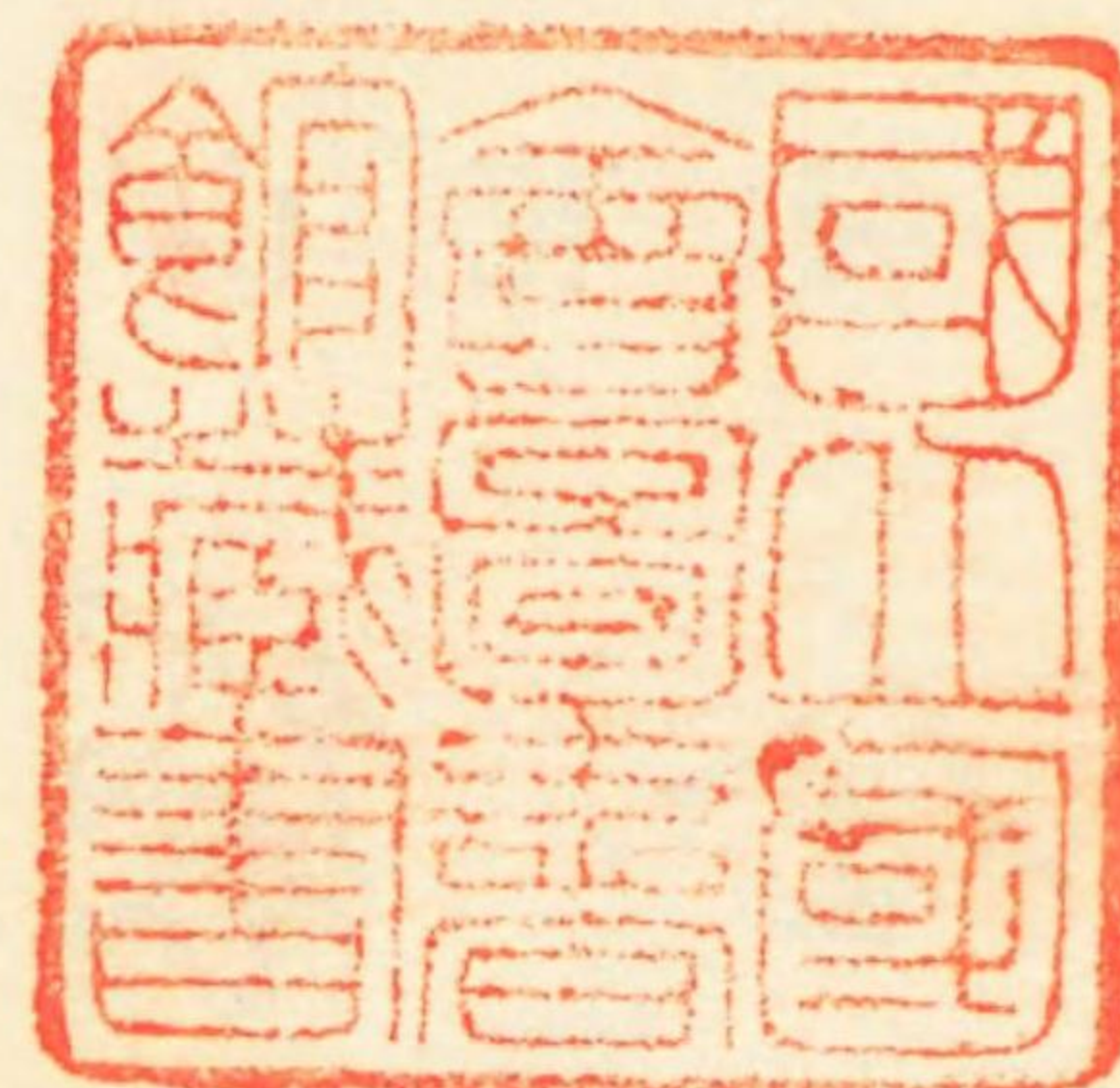
卷 三 第

編二外毘・花る殘・雨春・髮

會 行 刊 集 全 袋 花



著者 (明治二十四年)



298625

田山花袋氏の想ひ出

西村 眞次

私がまだ早稲田へ入らなかつた前、しばらく博文館の編輯局にゐて、雑誌『太平洋』の編輯の手傳をした。其頃田山花袋氏も編輯にゐて、何かの雑誌に關係して居つたが、『文章世界』の主筆になつた時は、私はもう早稲田へ入つてゐた。

田山氏の住居は喜久井町の静かな處、今の硝子研究所の裏の方にあつて、野梅が白い花をつけてゐた。私は度々訪問して、色々文學上の話を聞いた。

田舎漢臭い、どこか頑丈な、しかし無闇に人なつかしい素朴な人柄で、朴訥な切つて投げ捨てるやうな言葉が私を吸引した。奥さんは太田玉茗氏の令妹で、私達青年をよくあしらつてくれたので、私達はせつせと通ひつめた。別に御馳走があるわけではないが、無駄話の中に示唆に富んだところがあつた。其頃はロシヤ小説などを読んでゐる人が少かつたので、氏のいふところは、私達には一々新らしく、肉をつけてくれる滋養分のやうに思はれた。

『重右衛門の最後』を新聲社から出して、一躍文名を馳せ、それからは常に文壇の尖端を歩いてゐられた。『蒲團』を書いた頃が、氏の最も得意時代であつたかも知れない。自然主義的傾向

が次第に烈しくなつてから、理想主義文學觀を有つやうになつた私は、あまり氏を訪ねなくなつた。

それでも代々木へ移つてからも、三四度は訪問した。私の書くつまらぬものでもちやんと読んでゐて、一々缺點を指摘し、文藝の眞髓がどこにあるかを強調した。私はもう其頃文藝觀が大分變つてゐて、氏の親切は感謝しながら、氏の言説からは段々懸け離れて、自分自身の道を濶歩することを心がけてゐた。

しかし、何といつても、田山氏のなつかしい人柄は、私にまで永久のよい想出である。

小説を棄て、歴史研究に入つてゆく私を、實の山から地獄の谷へ降りてゆくやうにいつたこともあるけれど、時には独自の

表徴を歴史の世界に發揮することも悪くないといつたこともあつた。田山氏の輪廓は相當大きく、其線は可成に太かつた。文學者としては稀に見る素朴、剛強な人格の持主であつた。今、全集を讀み直して見ると、まだ生きてゐて、何か私に話しかけて來るやうに思はれる。

花袋全集 第三卷 目次

序 文 (西村眞次)

髪	三
春 雨	一〇九
残る花	一四七
毘	一五七
庖 丁	一六四
死	二一〇

解 說 (加能作次郎)……………七二七

髮



これから避暑客がほつほつ来ようとする頃、かなり大きな鞆を携へた三七八の紳士風の男が、町から中禪寺の旅館へと送られて来て、湖に面した八疊の間に通されると、いきなり手を鳴らして番頭を呼んだ。

『何處か此處らに静かな別荘の間の空いたのはないだらうか。少し長く居たいと思ふんだが……』
『へ、へ。』

番頭は客の瘦せた蒼い興奮した顔をじろじろと見ながら揉手をして、『手前共の持つて居ります別荘がいくらか御座りますので、……へ、へ。別に一軒離れた家も御座います。夏分混雑致します時には、お客様に願ひして一組二組一緒に入れて戴くことも御座りますが、當節では滅多にさういふことは御座いません。へ、へ。どうかごゆつくりと……。』

かう言つて行掛けたが、鳥渡立留つて、

『何れおつれ様が御座りまするので？』

『イヤ、一人だ。』

かう言つた客の顔は俄かに曇つたやうに見えた。

湖の畔には、別荘風に建てた家屋が幾軒もあつた。西洋人を相手にするやうな大きな家では、チャンと戸が明け放されて、岐阜提燈などが軒に吊されて、籐椅子が置いてあつた。何の間からも湖水が見えるやうな家のつくり方で、深く生茂つた山毛櫨の林には、前に展げられた湖水が靜かな光を反射させた。

男のバナマ帽と番頭の肥つた姿とは、少時して其湖畔の路に見えた。男は黙つて番頭の後に跟いて歩いた。番頭のいろいろに説明するのをフムフムと言つて聞くばかりで、別に何も言はなかつた。見て廻つた二三軒の別荘には、氣に入つた間がないらしかつた。『もつと狭くつても好いから、靜かなところ。』かう言つてはつまらなさうな顔をして出て來た。中宮祠の前では、何か思ひだしたやうに、立留つて、先に番頭のグングン行くのも知らずに、ぢつと湖水を見詰めて居た。

湖は今鏡のやうに澄んで、午後の鮮かな日影が其の半面を照して居た。空氣の加減か、それとも水の深淺の加減か、濃い碧と深い藍とがくつきりと線を引くやうに限られてあつて、白堊や赤い煉瓦を點綴した對岸は、丁度明るい水彩畫のやうな色彩を見せた。

然しその明るい風景が男の氣に入つたとは見えなかつた。かれはやがて同じ調子で番頭の後に跟いて歩き出した。番頭は杉の木蔭に立つてそれを待つて居た。

湖を縁どつた路は屈曲して、若い灌木の林やら草藪やら熊笹の繁みやらが續いた。山毛櫨や楡の大木が深い涼しい蔭をつくつてゐる間には、塀を廻らした閉ぢられた大きな別荘があつたりなどした。一とこゝろ湖水の見える汀には新しいペンキの匂ひのするボートが一隻繋がれて、ブロードの綺麗な娘とハイカラな青年とが權を握つたまゝ、涼しい風に吹かれてゐた。

『此處は手前の所有ではありませんが、靜かなことは極く靜かです。』番頭はかう言つて、其の向うにある林の中の小さな別荘に入つて行つた。

涼しい綠蔭とさびしい位靜かな四邊のさまとは、客の希望を満足させるに十分であつた。かれは其の縁側に備へてある籐椅子に體を横へたまゝ、再び身を起さうともしなかつた。其處からは低い草藪を隔てて湖水が一とこゝろ狭く仕切つて見られた。おしろい草や九連草が暗い庭を鮮かに彩つて咲いて居た。

『では、お荷物を運んで参りますから。』

かう言つて番頭は歸つて行つた。

『一人——やうやく一人になつた。』呻くやうに言つた言葉は靜かな四邊の空氣に反響してそれがまた

元の静かさに戻つた。男の蒼白い顔には、日影を帯びた林の影がチラチラと動いてゐた。

湖水の方からは、賑やかな笑聲と水を櫂で叩く様な音とが絶えず聞えて來た。汀に居た二人は、樹蔭の涼しいのと人氣のないのと湖水の眺めの好いのとに周圍の世界を忘れて、容易に其處を去らうともしなかつた。

涼しさうなリンネルの服と水淺黄の艶な服と白いペンキ塗のボートとが、籐椅子の客の眼の前を掠めるやうにして通つて行つた。

笑聲は猶ほ聞えて來た。

客はやゝ暫く籐椅子に身も心も埋めて居たが、その笑聲に心を惹きつけられたといふやうに、やがて身を起して、駒下駄を突かけて、其方へと出懸けて行つた。

其處では娘は背を此方に向いて、何か頻りに饒舌つて居た。櫂を手にした青年は此方に向いた顔に笑を見せながら、水に浮いたボートの軽い動搖の調子を取るやうにして居る。岸には小石が綺麗な水の中に透徹るやうに見えて、漣が刻むやうに微かな緩やかな音を立てた。蔽ふやうに冠さつた深緑からは、明るい光線が處々に縞を作つて水に落ちて見えた。

繪のやうな光景に、容は少時われを忘れて立つて居た。これをそれとなく見て取つた青年は、俄かに同伴者を促し立てるやうな態度をして、急いで出發の準備に取かゝつた。やがて岸を離れたボートは、

翼のやうな二本の櫂を揺かして、軽く水の上を滑つて行つた。

少時行つた處で、二人は櫂を留めて、此方を見て何か話をして居た。けれどこれも長い間ではなかつた。金を湧かせた夕日の波に、再び二本の櫂は光つて、いつか遠く遠くなつて了つた。

番頭と女中とが小僧に車を挽かせて、鞆やら寢道具やらを運んで來た時にも、客は矢張籐椅子に體を横へて居た。火鉢や、鐵瓶や、茶道具や、さうしたものはすべて女中が壁に傍つた扉の中から出して綺麗に掃除して、順序よく並べ立てた。勝手元へは樋を渡しさへすれば、綺麗な水が山からいくらでも來るやうになつて居た。

若い肥つた女中は、手拭を被つて、彼方此方と拂塵をかけたたり拭き掃除をしたりした。庭の古葉を掃いたり草を除つたりすると、あたりは見違へるやうに綺麗な瀟洒さうほうした家になつた。

『此處で暫く落付いたら好いだらう。』

客は四邊を眺しながらかう思つた。

鞆を明けると、中から書籍やら衣服やらが出た。手帳だの、半紙だの、手紙だのが順序もなくゴタゴタと入つて居た。旅に出ようとして慌て、これを詰めた時の心持がすぐ思ひ出された。

殆ど遁るゝやうにして、かれは其處から上野の停車場へ急いだ。それから此處まで來る長い間、かれ

は唯後腦を汽車の窓に寄せかけて居た。汽車を下りてからも車夫の言ふなりに、晝飯を食つたり旅店に休んだりして遣つて來た。

廣い野中の百姓家や、杉並木や、烈しく泡立つた溪流や、ぞろぞろ通る遊覽者の群や、さういふものは、唯現象としてかれの眼の前を通つて行つたばかりであつた。頭腦はガランとして居た。

『まア、暫くじつとして居よう、此處にかうして居たら、自己に打克つことが出来るかも知れない。』かれはまたかう思つて見た。

その打克つべき自己、それが今は自己ではなくて、恐るべき他の人間か何ぞのやうに思はれ出したのは、もうかなり長い前のことであつた。自分で自分を何うすることも出来ないやうな境遇にいつかかれは其身を置いて居た。

靴の中に束になつた手紙がはいつて居た。ふとそれがかれの眼に留つた。見馴れた封筒に見馴れた筆蹟、腹立しいやうな懐しいやうな氣がしたが、それでもそれを手に取つて見ぬ譯には行かなかつた。

……これも皆貴郎のお蔭と心から喜んで居ります……

……此頃は久しく御目に懸りませんが、御機嫌は……

……私の心

チラチラと眼を掠めて通つて行くさうした文句、平凡なこの文句にも針でさゝれるやうな烈しい刺戟

を感じて、かれは急いで、それを揉み集めて奥の方に押込んで了つた。

『もう何も彼も忘れて仕舞はなければならぬ。』かれはかう口に出して言つた。

雑誌を読みかけても、意味が十分に頭腦に入つて來なかつた。で、かれは立上つて小さい庭を彼方此方と歩き始めた。女中は一人残つて頻りに庭を掃除して居た。紅入メリンスの帯はその若い娘姿を一層無邪氣にして見せた。客はぢつとそれを見た。何かやさしい言葉をかけてやりたいと思つた。しかしさうした氣分にはなれなかつた。

『何か御用は御座いませんか。』

かう言つて聽て女中は歸つて行つた。

其姿が草藪の蔭の路にかくれて見えなくなるのを見送つて居た客は、一種譬へ難いさびしさの烈しく胸を衝いて來るのを覺えた。一人！ 唯一人！

自から好んで遣つて來たとは言ひながら、このさびしい世離れた林の中に、かうして一人住まねばならぬことを考へると、かれは堪らなく悲しくなつて來た。

今更にかれはまたも籐椅子の上に身を横へてぢつとしてゐるより他に爲方がなかつた。

前の路をそれでもをりをり人は通つて行つた。奥の温泉場に米味噌を運ぶ女馬の群だの、赤い蒲團に客を載せた山駕籠だの、尻端折をして歩いて行く都の旅客などが通つた。湖水は今燃えるやうに夕日に

輝いて居た。

『思ひ切りさへすれば好いんだ。』

かれはこれまでも幾度となくかう心に向つて言つた。そして其獨語はいつも跳ねかへつた鞠のやうに強くかれの胸に戻つて來た。『賣女！ 無節操！ 虚偽の塊！』かう極端に女を罵つて見ることもあつた。時にはまた其の鋭い判断の斧を自己に向けて、『馬鹿な奴だ！ 意氣地のない奴だ！ これだけのことが思ひ切れないのか？』かう強ひて自己を冷笑して見ることもあつた。

けれど自分ながら不思議に思はれるほど、その罵倒や冷笑には力がなかつた。女に對する心がいつもすぐ傍からそれを裏切つて行つた。『今頃は何うして居るだらう？ 何と思つて居るだらう？ あゝ思つたのは自分の無理ではないか。誤解ではないか……。』かう思ふと、自分で自分が自由にならないのが腹立しくなると同時に、いくら深く觸れて行つても、遂にその核心に達することが出来ない性の相違が呪はれて來た。

『何うせ女は女、男は男だ。男の心持が女に解りやう筈がないやうに、男にも女の心持は解らないのだ。』

こんなことまでも思つて見た。男の心持の解らないといふことが第一に心外で堪らないといふ氣がした。と、悔恨の念よりも一種忿怒に近い情が烈しく胸をついて起つて來た。

『賣女！』またかう罵つた。

それは波のやうに颯つたり沈んだりする苦悶であつた。また何處から來て何處へ向つて去つて行くのか解らないやうな苦悶であつた。腹が立てば腹が立つでそれで好い。あさましかればあさましいでそれで好い。尠くとも忘れて了ふことが出来るやうな餘地さへあれば好い。それさへあれば、何もこんな山の中まで遣つて來なくつても好いのだ。かれは其處まで行くと、いつもハタと突當つた。

かれは忘れる工夫をした。考へない工夫もして見た。しかし手にした書籍が、いつか其方除にされて、頭が逸早く逆戻りをして居るのに氣が附いては、いつも失望しない譯には行かなかつた。

追憶の数々——中でもフィジカル・レコレクションが殊にかれの全身を動搖させた。『何うでも好い。』

男があらうが——男が幾人あらうが、そんなことは何うでも好い。十にも百にも分け得られる心と肉體、その一部さへ確たる自己の占有物であれば、それで好いぢやないか。無節操でも、虚偽の塊でも、自分に對して居る利那さへ自分のものでありさへすればそれで好いぢやアないか。』時にはこんなことを考へさせるほどその追憶は強い生々した力を持つて居た。

夕飯は若い女中が運んで來た。茶をつぐまで其處に坐つて給仕をしてゐるが、聽て洗つた膳や椀を開扉の中に入れて、『お休みになる時分にはまた參りますから。』と言つて出て行つた。

湖水は今暮れようとして居た。明るい夕雲に照された水の面は次第に錆びた暗い色を帯びて来た。此時、彼の眼の前には、都會の町の灯と、電燈の輝いた一間と、なつかしい眼と、はなやかな姿とが歴々と見えて通つた。かれの心は動搖せずには居られなかつた。女は今宵も媚を賣つて居る！

二

ふとかれは眼を覺ました。洋燈は机の上に薄く點いて居た。讀みながら寢入つた書籍は開かれたまゝ、其處に放り出されてあつた。

絶えず魔はれた苦しい夢、それは裸體の男が裸體の女を追廻したり、可愛い白い乳の下に鋭利な短劍を突き刺したりするといふやうな種類のものであつた。譬へやうもないほど重苦しい心から覺めて、彼は更に一層の暗さと佗しさを覺えた。

かれはぢつとして天井を見詰めた。大きく見開いた眼は、こんがらかつた頭を統一しようとするやうに、暫しの間瞬きもせずに、夜の靜かな空氣の中に際立つて見えて居た。夜はしんとして居た。

苦しきやうな遣瀨ないやうな長大息がやがて聞えた。

かれは床の上に起上つた。それと同時に大きな半身像は後の障子に黒くほんやりと映つて見えた。かれはそのまゝ、暗くなり懸けた洋燈の心をねぢつて見た。しかし油がもう残り少なくなつてゐると見えて、

ヂヂと厭な音がするばかりで、室はすぐ元の暗さに戻つて行つた。

時計は一時三十分の處を指して居る。樹の梢を渡る風の音が微かに聞える。汀に寄せる湖水の波の音もそれと手に取るやうに聞える。ガサガサと草藪の靡く音もする。

今までもかうしたことがないではなかつた。夜中に眼が覺めて困つたことは幾度もあつた。自分で自分の淺猿しさ意氣地なさを痛切に考へたのは、殊にかうした時に多かつた。床の上に起上つたかれの姿は、久しい間身揺きもせずにぢつとして居た。

ふと氣が附くと、かれは矢張女のことを考へて居た。男から男へと移つて行く女、その移つて行く状態をかれば深く考へない譯にはゆかなかつた。其度毎に男の嘗めなければならぬ苦い經驗の一つ一つ、それをいつでも鮮かに頭腦に上げることが出来るほど、かれの心は赤く佗しく爛れて居た。

第一に、一人の男から他の男へと移つて行つて、それがいつも痕跡を留めないやうな女の巧みな態度が、羨しくもあり腹立しくもあつた。で此處まで來ると、かれの胸は俄かに曠恚の情に燃えて來た。韁を切つたやうにさまざまの記憶や煩悶や懊惱が一緒になつて凄じい波を揚げた。

かれは堪らなくなつたやうに、再び身を床の上に横へた。此處に來てまで、かうした思ひに悩まされやうとは思はなかつた。かくれ家——人の居ないかくれ家に行つたなら、尠くとも自己の力で自己を押へることが出来る。一步を譲つてそれが出来ないにしても、自己で自己を判斷することが出来る。かう

思つて遣つて來た。それであるのに……洋燈は急にヂヂと音を立て、段々暗くなつて行つた。やがて乾いた心が口金の處でポツと赤く燃えたと思ふと、黒い油煙が漲るやうにホヤから出た。かれは慌て、ランプを吹き消した。

闇……無限の闇……その中に唇——紅い唇が見えた。

三

夜の明けるを待兼ねるやうにして、かれはステッキを持つて戸外に出た。朝の霧が薄く湖の上にあつた。湖に沿つた道は、梅や山毛櫨の白い幹の並んで立つた林の中へとかれを導いて行つた。

矢張其女が頭を離れなかつた。此夏、一緒に此處に來る約束をして居た。一緒に伴れ立つて靜かな湖畔の朝を散歩する筈であつた。中形に鶉の夏羽織、意氣な丸髷に長い白い襟足、それを此處に置いて考へたことも一度や二度ではなかつた。しかし今はもう忘れなければならぬ、長い間馴れて來た笑顔も眼の表情も何も彼も忘れて了はなければならぬ。……むしろそれを忘れる爲め、その傷痕を醫す爲めに、かれは態々此處に遣つて來たのだ。

路は屈曲して續いて行つた。湖水が見えたり隠れたりした。處々に出て居る木の根や、石塊、それに躓いて、かれは幾度か前に踏らうとした。それほどかれはそのことに心を奪はれて居た。『馬鹿な奴だ！』

意氣地のない奴だ！』かれはまたかう口に出して言つて見た。

何故？ 何故かれはかうした心の状態に到達したのか。かうまで離れることの出来ないやうに精神と肉體とをその女の手につまはられたか。かれはさうなつて行つた順序を考へて見ない譯に行かなかつた。普通の女として、さうした社會によく見る女として、唯の美しい眉、唯の表情に富んだ眼、唯の愛嬌ある、才ある動作を持つた女としてより以上に、別に深い魅力をそれから受けることなしに、長い間淡い關係をつゞけて來て居た。確かに淡い關係であつた。女の持つた弱點はいかやうにも分析することが出来るやうな餘裕を持つて居た。それがいつの間にか何うして、その髪の毛の濃いか薄いか、その姿の美しいか美しくないか、その形の整つてゐるか整つてゐないかを判断するに苦むやうな境にまで引張られて行つたか？ またいつの間に、聰明な分析の斧を全く失つて、心と體とをすべてその女に打込むやうになつて行つたか？ かれは平生尠くとも物に熱することの出来ない冷たい性質を持つて居ることを自認して居た男であつた。事業に死身になることの出来ないのも、中年になつて、親の残した財産を頼りに、文學に美術に政治に多大の趣味と理解とを有して居りながら、何一つ眞面目なことをすることの出来ないのも、皆なその冷たい性質がある爲めだとばかり思つて居た。中心からかれを動かすものなどが、この世の中にあらうとは夢にも思つて居なかつた。

今更に女の巧妙な力といふことが繰返して考へられた。眞實のやうで眞實でない、虚偽のやうで虚偽

でない、手管のやうで手管でない其力は、疑つたり悶えたり不安を感じたりして居る間に巧にその獲物を確實に行つた。女に騙されるといふことはない、女に騙される位ならば、屹度男も女を騙して居る。こんなことを思ふやうになつた時は、もう其の分析の斧が十分に働かなくなつた時であるのを知らなかつたのであつた。かれの頭には、あの時ある處で二人の間に起つたあるシーンが今もはつきりと印象されて残つて居た。女は其時エクスタシーに陥つた様に男の體に取附いて泣いた。眼からは涙が瀧のやうに流れて落ちた。『こんな商賣をして居るものだから、貴郎は信用して下さらない——もう明日からはやめて了ひます。やめますとも。』かう言つて、また歎歎けた。其時庭には月が晝のやうに明るく照つて居た。

其言葉は信ぜられないにしても、其涙——止度なく落ちた涙、それも虚偽であつたらうか。今でもかれはさう思ふことが出来なかつた。

女の自由の總てを占有するといふことは、戀する者の満足である。しかし戀するものに取つては、その満足は、餘りに貴重なものではなかつた。飽満——其處から戀はいつも滑つて遁けて行つた。

男を満足させることの出来ないやうな境遇に身を置かれた女、寧ろさうした境遇から——フィックルな第二の天性を形ちづくるやうになつた女、それが彼をかう強く引張つて行くについて尠なからぬ力を持つて居たことは争はれない事實であつた。庇髪に紫紺の袴、戀をすればすぐ結婚を急ぐやうな普通な

女であつたなら、かれはさうした深い處まで入つて行かなかつたに相違ない。底が見え透いて興味が覺めて、すぐ其處から引返して行つたに相違ない。

幸か不幸か、其女はかれには解らない謎であつた。逢へば必ず新しい好奇心を惹起させるに足りるやうな複雑した心のスタイルを持つて居た。虚偽と眞實と、眞實と虚偽と、それが網のやうに深く織り込まれて、其處に一種名状せられない微妙な空氣を醸して居た。

その空氣の中に咲いた微かな花のほひ、それがかれを捉へて行つた。

インスタントから起つた苦悶、それを醫すことの容易でないのを、彼は歩き乍らつくづくと思ひ知つた。忘れようとすればするほど、其女は益々かれに近寄つて來た。其影は益々濃くなつて來た。

前に展けられた明媚な湖水、平生ならば、それが何んなに眼を樂しませ、心を悦ばせたか知れなかつた。朝霧の薄くかゝつた鏡のやうな滑かな水の面、捺したやうに靜かに映つて居る山の影、をり／＼軽い翼で其上を破つて行く水鳥の群、ことにかれの辿つて行く路の頭の上には、子規が鈴を鳴したやうに冴えた高音を張つて啼いて居た。しかしかれはそれに慰められもしなかつた。心は矢張忘れなければならぬ女の傍へ行つて居た。『しかし時が経つたら……ある時日を経過したなら、いつかこの重荷が一つ一つ卸されて行く事だらう！ 時！ 時より他に、今は自分の味方になつて呉れるものはない。』ふと氣が附くと、かれはこんなことを考へて居た。

『それにしても、何うしてるだらう？ 何と思つて居るだらう。あの手紙は何ういふ反應を女に起させたらう？』

すぐ續いてかう思つたかれは、手紙を見た時の女の顔と心持とを痛切に知り度いと思つた。しかしそれは決して知ることの出来ない願ひであつた。

かれは唯歩いて行つた。何處までも何處迄も同じやうな屈曲した路が續いた。霧は段々深くなつて來た。白い輕いのがいつか灰色の重々しいものと變つた。見て居る中に湖水の上にもそれが這ふやうに早く早く靡いて行つた。少時すると林も草藪も全くそれに包まれて了つて、あたりはすべて灰色の天地となつた。かれは唯先へ先へと歩いて行つた。丁度その灰色の霧の中にその苦悶のかくれ家を求める人のやうに。

四

……久しく御目に懸りません。なんだか氣になつて氣になつて爲方がないんです。今日も餘り氣がクサクサ致しますので、お座敷は皆なことわつて、ぐづぐづ致して居ります。それでも時々は自分で自分の氣がわからないことがあるほど、お酒を飲んで、はしやぐことがあるんですよ。おととひの晩、それは酔つて了つて、箱屋の政どんにやつと車に乗せて貰つて歸つて來て、明日起きて見ると、二階

にちやんと寢て居るぢや御座いませんか。政どんは、ゆふべは姐さんは大變酔つて居ましたねと笑つて居るんですもの、わたしはきまりがわるくなつてしまひました。

何うしてあんな氣になるんでせう。わたしのおなかの中には、屹度わるい虫か何か居るんぢやないかとふつと思ふことなどがあります。自分で自分の譯が分らなくなるんですもの。

近い中に屹度來て頂戴、いろいろ面白いお話がありますから。

十月五日

——より

——様

……此間は留守にして申譯がありません。實はお断りして行かうと思つたんですけど、急なものでしたから、その間がなかつたんです。〇〇に大變叱られて了ひました。何うか悪く思はないで頂戴。實は可哀相なんですから。

二月七日

——より

——様

……あれから、町の通りをぶらぶら歩いて歸りました。好い月でしたのね。角の勸工場で買物をして、家に歸つて來ると、二階に月が一杯にさし込んで居て、好い心持でした。關屋さんが丁度其處へお座敷から歸つて來て、それから二人でいろいろな話をして、泣いたり笑つたりして、遅くまで寢られま

髪

せんでした。關屋さんは可哀相な人だと思ひました。

八月十三日

——様

——より

……明日は屹度来て下さい。そんなことを仰しやたつて、それはうそなんですから。貴郎もそんなことを御しんようなさるとは思ひませんでした。

辛い、悲しい。いつかも言つた通り、どうせわたくしは人並な死にかたが出来ない星なんですから。お淘宮の先生もちやんとそれは言つて居るんですから。いゝえ男なんぞ何うせ頼りにはならないといふことはちやんと存じて居ります。貴郎だつて私の元のこととはよく御存じの癖に……男らしくもない。此間、電車で木山さんに逢ひました。可愛い坊ちやんを連れてお出ででした。私が車掌の居る處からズツと入つて行くと其處に木山さんがゐらつしやるぢやありませんか。私ははつとしましたけれど、御挨拶をすると、『達者かね』ツと仰しやるんでせう。私は悲しくなつて了ひました。坊ちやんが怪我をして、それで東京に出てゐらしたんださうです。もう大變によくおんなすつたんですつて、それでも坊ちやんは繻帶をしてゐらつしやいました。可愛い坊ちやん、私もあんな坊ちやんがほしい。貴郎は私が木山さんのことを言つたつて怒りはしませんね。木山さんは私の初めの好きな好きな人ですもの。私がこんなになつたのも、貴郎にも愛想をつかされるやうなわるい人間になつたのも、木山

さんの爲めですもの。昔がこひしい。罪がなかつた昔がこひしい。——本當に明日は来て下さいますね。

十月十日

——様

——より

數通の手紙の殻は、秋が来て逸早く萎み去つた枯葉のやうにそこらに散らばつて風に吹かれて居た。庭では女中が庭を掃いて居た。綠葉を漉した明るい日の光は、籐椅子の人の着物の上に線をなして落ちた。

五

脚絆を着けて、齒を黒く涅めて、無造作に髪を束ねた女が、亭主らしい男と一緒に、睦しさうに馬を引いて行くのに邂逅でっくわすることなどもあつた。

『今日は。』

其女は挨拶をしてすれ違つた。

かれはその姿の林の中に見えなくなるまで見送つて立つて居た。その單純な無邪氣な生活が彼には羨しかつた。さういふ女を妻にして一生を送つて行く男と、疑惑と不安とに心も身も勞らして了つた自己

とを引較べてかれは黯然とした。

湖に沿つた路はいろいろな人が通つて行つた。目も覺めるやうな紅い撫子を山駕籠の上に結びつけて行く娘もあれば、快活な草鞋がけで、採取網を肩にかけて、をりをり立留つて、蝶などを捉へて行く學生らしい少年もあつた。中には瓢箪などを下けて面白さうに笑つて話して行く老人達もあつた。睦しさを手に手を組合せて歩いて行く西洋人の群は、殊にこの林の中に際立つて鮮かに見えた。

時には肥つた女の西洋人が、高い臺の上に幅をして乗つて通つて行くことなどもある。それを擔いだ四人の男の額からは、汗がダクダク流れた。

若い女中は、町のもので、家では穀屋をして居て、夏場だけ、親類の旅籠屋に頼まれて手傳ひに来て居た。『お時さんつて言ふんだね、君は？』ある時、かれはこんな調子で話しかけた。

給仕をする間も、何處となくオドオドしたやうな處が見えた。丸顔の、肌の白い、眼の綺麗な女であつた。何か言はれると、すぐ顔を赧くした。

『戀などをさうした社會の女に求めるのは、愚かなことだ。かれ等は自覺しないまでも、自覺に近い分析と判断とを持つて居る。經驗が生んだ偏つた觀察を持つて居る。本當の戀の出来るやうな女は、無邪氣な田舎娘か、感情に餓ゑた若い女學生にきまつて居る。』

何うした聯想か、かれは一年ほど前にある友人と灯の明るい都會の通りを歩きながら、かうした話をしたことを思ひ出した。其時かれは、『戀の出来ない女、戀を玩弄物にするやうな女、さういふ女が面白いんだ。其處に何うかすると洗練された心持が発見されることがある。』こんなことを言つたのを覚えて居る。其時と今との心の推移の甚しいのをかれは考へた。

籐椅子の上からは、若い女中の姿が常に見えて居た。いかにも苦勞のなささうな無邪氣な顔をして、赤い襷を十文字に綾取つて、甲斐々々しく立働いて居るさまは、尠くとも今のかれの眼には一種の色彩と快感とを與へるに十分であつた。綠葉の薄暗い庭に際立つて明るく見えるおしろい草に對して、こゝみ加減に草箒を持つてあたりを掃除してゐる色白の頬やら、新しい手拭の下から黒い房々した髪を見せて、バケツに汲んで來た綺麗な水に雑巾を浸して居る白い手やら、寛の水のちよろちよろと落ちる傍で、無心に膳や椀を洗つて居るさまなどが、自分とは丸で關係のない繪の中の人物のやうにかれには思はれた。

『午飯には、何か肴でない旨い野菜を煮るやうに言つて下さい。』
笑ひながら、こんなことを言ふと、

『野菜——かしこまりました。』
何處か嬌羞を帯びた女中の顔をかれはちつと見た。

『あの西洋の婦人はあれは何者です？』

ある日かれは若い女中にかう訊ねた。

『何で御座いますか……よく存じませんけれど……。』

知つて居りながら言ふを憚るといふ様な風が其態度やら言葉やらに見えた。今日に限らずその西洋の婦人はよく別荘の前を往つたり來たりした。林の中でもこれまでに尠くとも三四度は邂逅した。

いつも小さい可愛い犬を伴れて居た。明髪ブロンドの、鼻の高い、色の白い、小づくりな若い女で、眉と眼との間に言ふに言はれない美しい表情があつた。小さな靴に長い服の裾を蹴つて歩いて行くさまは、人を惱殺させずには置かないといふやうな嬌態を持つて居た。

いつも一人で歩いて居るといふことが第一にかれの好奇心を惹いた。湖水に對つて物思はしげに黙つて立つて居ることもあれば、口笛を鳴らして道草を食つてゐる犬を呼んで居ることもあつた。昨日逢つたのは夕暮であつた。薄暗い林の中にくつきりとその派手なつくりを際立たせて、いつものやうに靜かなしなをして歩いて來た。摺れ違はうとする時、その美しい眼はぢつと此方を見た。

そこは林の間から湖水の開けて見える處であつた。汀の石には漣がさゝやかな音を立てゝ居た。婦人は其處に立留つたまゝ、久しく暮れてゆく湖水を見て居た。

ある日の散歩に、かれは今までよりも遠い處へと思立つて行つた。振り拂つても振り拂つても女の幻

影はかれを離れなかつた。散歩でもしてそれをまぎらすより他に爲方がないやうな日が幾日か續いた。

かれは何うかするとそれでも賑やかな町の方へと出かけて行つて、球などついて見ることもあるが、大抵は人の居ない靜かな林の方へと足を向けた。

湖水を縁取つた路は長く長く續いた。それは何處迄行つたら盡きるかと思はれるやうな路であつた。藪と、熊笹と、樺の木立と、をり／＼見える湖水と、それより他には何もなかつた。別荘らしい家屋ももう此處等には見當らなかつた。

思ひもかけず湖水の一角が俄かにその前に開けた。と、其處に一軒漁師の家らしい簷の低い板葺の家屋がほつねんとして湖水に面して立つて居た。前には大きな網が日に向つて干してあつて、井戸の向うには汚い狭い勝手が覗いて見られた。渚には舟やらボートやらが繋がれてあつた。

湖に面した一間、其處にはハンモックが吊つてあつたり、籐椅子が置いてあつたり、卓が据ゑてあつたりした。卓の上には紅い白い花が大きな花瓶に生けてあつた。

例の夏場だけ西洋人に間貸をしたものと見える。かう思つたかれは、ふと傍に見馴れた可愛いその小犬の蹲つて居るのを發見して尠なからず驚かされた。犬の主人は、其處に、奥の籐椅子に身を横へて小説らしい本を熱心に讀んで居た。

『はゝア、こんな處に居るのか。』

かういふ處に同伴者もなく、かうして間借をして居る若い美しい女といふことは、かれの好奇心を惹くに十分であつた。あとから男の來るのを待つてゐるのか？ それともまたある苦悶を抱いてかうして靜かに世離れて日を送つて居るのか？

その婦人がフランス生れで、横濱から毎年遣つて來て、昨年は町の金谷ホテルに二月、此處のレーキサイドホテルに一月、随分いかゞはしい噂を立てられた女であるといふことを番頭から聞いた時には、かれは新しいある好奇心の起るのを禁ずることが出来なかつた。

『はア、さうかねえ、それは驚いた！』

さも驚いたやうにかれは言つて、『何うも變だと思つた。一人で森の中を歩いて居るのも、可怪いし、あんな處に一人で間借をして居るのも普通ぢやない。何者だらう？ と思つたが……さうかな？』

『ちや、まア淫賣だね？』

番頭は笑つて、『さうなんで御座いませう。去年なども随分喧しい騒ぎが起つたやうでした。イギリスの海軍の武官と貴族の息子とが其女のこと、決闘をするなんて言ふ騒ぎで、中禪寺の駐在所でも大變眼をつけて居ました。何でも男に餘程多く關係をつけた様な話でした……』

『フム、さうかねえ。』

『何でも埒いだ金も餘程の高だつて言ふ評判でした。えらい女があるもんですな。こんな山の中にも來て、そんなことをしないたつてよささうなものですな。』

『でも商賣なら爲方がない。』

かれは笑ひながらかう言つたが、『矢張西洋人ばかりを相手にして居るのかね？ ……つまり相手を拵へて、此方から先の泊つて居る所へ出張するつて言ふ譯だね？』

『まア、さうですな、其處らの別荘なども泊つて歩くやうでした。』

外國のさびしい山の中に來て、湖水に面した一間に、さうした夏を送つて行く女が一層鮮やかに印象されて來るやうな氣がした。女の服の裾にまつはる可愛い小さい犬は、更に一層その周圍を繪のやうにして見せるやうな氣もした。

その女が遣つて來るのには今年はまだ少し節が早かつたなどといふことを番頭はやがて話して聞かせた。湖畔にある別荘がすっかりふさがらる頃には、それは随分賑かなもので、月の明るい夜など、其處にも此處にも二人づれの群が手を組合せて、蜜のやうな會話を取交すさうである。

『さうですな、八月の中頃でせう。年に因つて、丸で西洋人が來ないこともあります、雨さへ長續きがしなければ、大抵遣つてまゐります。その頃は町からも、宇都宮からも、東京からも女が随分上つ

て來ますから……それは賑やかなものです。』

『そして一體名は何と言ふんだえ……知らないかねえ？』

不意にかれは思ひ附いたやうにかう番頭に訊ねた。

『あの女の名ですか……さう、確かヘンリツタと言つたと思つて居ます。』

『ヘンリツタさん、好い名だな。』

かれはかう言つて笑つた、番頭もにやにや笑つた。番頭は聞きもしないのに、猶ほ種々のことを話した。中禪寺に近い別荘は、誰も女の素生を知つて居て貸さないの、止むを得ず、あんな處の漁師の家の間を借りたのだなどとも言つた。

それと知らない前と後とは同じロマンチックな感じでも、著しく違つて居るのをかれは思つた。かれはさうした女性がこの淋しい湖畔に、自分と同じやうにして居るといふことを考へてひとり微笑した。さういふ女を卑んだり罵つたりする時代をかれはもうずつと以前に通り越して居た、さういふ種類の女には、かれはいつも一種の好奇心を以て相對するのを常として居た。

そ 女は派手な紅いバラソルをさして居ることもあつた。水色の服を長く引摺るやうにして歩いて行くことものつた。帽子に挿した紅い薔薇はいつも遠くから見えた。

「まへ、ヘンリツタさんが通つて行つた。』

此頃では大分馴れて言葉をかけられても顔を赧くするやうなこともなくなつた女中は、ある時縁側の隅に立つて、こんなことを言つて、其方を見送つて居た。

『一體、何處へ行くんだね。』

かれがかう訊くと、

『ホテルでせう。』

『ホテルに誰かあの女の世話をする人でも居るのかね。』

『手代さん見たやうな人に頼みに行くんでせう。』

女中はこんなことを言つて笑つた。

『旦那さんを見つけ置いてから、出かけてくれば好いにな……。』

戲談らしく言ふと、

『だつて、さうは行きません。』

『何故？』

『何故つて、さうは出來ないんでせう。』

女中はかう言つて笑つた。

かれは日を経るに従つて、いくらか其心が軽くなつて行くのを覺えた。勿論、それが以前よりも烈しい力で全身を壓すやうに迫つて來ることはないでもない。時には自分から何うすることも出來ないのに呆れて、ほんやりと一日を暮して了ふことなどもあつた。しかし此頃では、本を讀んだり新聞を見たりする餘裕が少しは出來て來た。

東京のことも知り度い、友達の情報も聞き度い——其女の近況が殊に知り度かつた。かれは段々東京から來る郵便を待つやうになつた。

このかくれ家に、郵便脚夫が初めて郵便を配達して來たのは、二三日前の午頃であつた。その前にもかれは配達の間を女中に聞いた。

『一體此處では一日に幾度配達するのかね。』

『三度でせう屹度、朝と午と晩と。』

其時女中はかう答へた。

女から手紙の來よう筈がなかつた。それに此處の宿所も知らせてなかつた。それでもかれは一束にして配達して來た手紙の中にそれを期待して居た。もしや交つて居やしないかと思つて、逸早くそれを引くりかへして見た。雑誌が一冊、新聞二枚、手紙が三通、それが別に讀みたいと思ふやうなものでなかつたのを發見した時には、かれは尠からず失望した。

それからかれは新聞を三種程取つて、女の顔の挿入されてある六號活字のところを熱心に讀んだ。其處にはさういふ社會の女のお消息が短かく面白く書いてあつた。其處からでもかれは女のお消息を知り度いと思つた。

六

『貴郎は私を信用して下さらない?』

其時、女は笑を含んで、かれの方を見た。その眼は今でもはつきりと思ひ出された。

『お前の心の全部を寄越せと言ふのではない。一部で好い——唯ほんの一部で好い。お前の心の何處かに僕が居さへすれば好いんだ。それだけは解つたね?』

『私は皆な上げるわ。此頃では一日だつて貴郎の事を思はないことはないやうになつたんですもの。』
男の言つた言葉も、女の言つた言葉も、兩方とも半分は虚偽であつたといふことを考へて、かれは今讀みかけて居た水淺黄の表紙の洋書を下に置いた。

虚偽? 虚偽と言ふ譯でもない。虚偽と斷定して了ふ譯には行かない。かうすぐかれは考へ直した。尠くとも其時かれの言つた言葉は、彼に取つては眞面目なものであつた。眞情を吐露したものであつた。しかし其の要求した一部は、一部ではなく全部であるといふことが段々解つて來た。髪も、眼も、心もす

べて自分のものにしなければ満足されないものであつた。

ある時はこんなことも言つた。

『もうお互ひに随分長く一緒になつて居た。もう別れても好い時分だ。……どうだ、きよ淨く別れようぢやないか。』

『え、別れませう。貴郎がお厭なら、いつでも別れてあげてよ。』

二人は眞面目な顔付をして居た。さてさう言つて置いて、二人は少時黙つて顔を見合はして居た。女は口にした敷島の吸口をさも口惜しさうに嚙んで居たが『別れられるなら、別れて御覽なさい。本當に貴郎は人の心も知らないで……』かう言つて、その吸殻を靜かに灰吹の中に落した。ジーと音がした。

其時、その音と同じやうな佗しさを覺えたことをかれは今でも記憶して居た。

何うせ一度は別れなければならぬ。それが何時何んな形式を以て現れて来るだらう？ かれはこれまでにもさうしたことを幾度も思つて見た。時にはそれを想像して、其處にロマンチックな感じを味つて見ることもあつた。年月を経てからの再會、そんなことまでも想像した。

かれは再び洋書を手に取つて讀み續けた。かれは昨日これを讀み始めてから、少からず心を引寄せられたといふ風で、散歩にも出かけずに、熱心に讀み耽つて居た。すぐれた作家の筆に成つた心の閱歷には、底まで人を引かなければやまないやうな魅力があつた。其處には紅い血潮のしたたるやうな心もあ

れば、暗い佗しい如何ともすることの出来ないやうな苦悶もあつた。作中に出て来る男と女との活劇は、矢張かれと其女との活劇であつた。かれは時々其洋書を下に置いて、重い苦しい長太息を吐いた。顔の上に眼を大きく明いてぢつと物を考へて居るやうな恰好をして、さてまた熱心に讀み始めた。鍵を女の手握られて、出ることも入ることも出来ないやうになつた男の心が殊に深くかれの同情を惹いた。かれは女性に對する男性の復讐などといふことを考へ乍ら、また長大息を吐いた。

洋書の背皮には、*Notre Coeur. by Guy De maupassant* としてあつた。

その小説をかれは一日懸つて讀んだ。

それはかれの苦痛を眼の前に描いて見せたやうなものであつた。思ひ當る所がある度毎に、かれは頭を左右に振つた。かれは最後の頁を翻すまで、それを手離すことが出来なかつた。

讀終つて、かれはホツとして、その書を傍に置いた。

頭は熱して居た。胸は押しつけられるやうな感じがした。最後の解決が不満足であり乍ら、而も佗しい心細い感情をかれの心の底に渦のやうに捲き起させた。

知るといふことゝ、判断を促されたといふことゝは、覺めるといふことに就いて、多くの影響を持つて居なかつた。不思議にも女の幻影が第一に鮮かに浮んで通つた。

癒え懸けた創傷に更に鋭利な刃を当てられたやうな氣もした。

『一度、肉の關係をつけたものは、何うしたつて離れられるものではない。』かう言つて、その作者は、皮肉な笑を洩して居るやうにも思はれた。更に一步進めて、『ざまを見ろ！ 好い氣味だ！』かうも言つて居るやうにも思はれた。

此處に來てから、もう一週間も過ぎ去つた。其間、かれは僧侶のやうな生活を送つて居た。夜半に眼を覺ますと、洋燈が暗く其の傍に點いて居て、徒らに湖水の波の音がさびしく聞えて來るばかりであつた。傍には誰も居なかつた。

それは夜ばかりではなかつた。晝間でもさういふ状態の氣分に置かれて居る時が度々あつた。髪やら眉やらが常にかれの眼の前にあつた。

さういふ時には、かうして此山の中に遣つて來たといふ意味が、かれ自身にも解らなくなつて居た。

『いつそ、歸つて了はうか。』かう自分で口へ出して言つて見ることもあつた。

一週間逢はずに居ると、嫉妬も不安も男の意氣地も何も彼も忘れて了つて、唯その髪と眉とに向つて屹度引づられて行つた心、それがまた今烈しい力で繰返されて來た。アスハルトの敷き詰めた兩側の路、其處を駒下駄を引摺り乍ら歩いて居て、ふと俄かに逢ひたくなつて出懸けて行つた時の町の灯や、何處かへ行つて居ないところに電話をかけて、失望して、三日も懊惱して暮して、それから一緒に伴れ立つ

て歩いた楽しい夕暮の徜徉や、さうしたあらゆるものが新しい幻影となつて、かれの前を生きて通つた。

かれはかの女を自由にした。解放した。かの女は何處へ行つてももう好い身になつてゐる。誰を情人にしても差支へない身になつてゐる。一日と言はず、半日と言はず、一時間と言はず、誰かの持物となつて、もう再びと指をさすことも出來なくなつて居るかも知れなかつた。それからまた女の身として、あの手紙を見て、かれのことはもう駄目だと失望して、あきらめて、他の人に身を寄せるやうになつたかも知れなかつた。

それを思ふと、居ても立つても居られないやうな焦燥をかれは感じた。

此方の心持の離れて行く度数は、向うの心持の離れて行く度数である。かういふ考へが此時、突如として、頭を衝いて來た。女とかれとの間には、人知れない不可思議な大きな力が開いたり閉ぢたり離れたり即いたりして居た。

動搖、疲勞、不定——さうしたものから遁れようとして來たかれは、いつの間にか再びその巴渦の中に心を投じて居た。離れない爲には、何んな犠牲を敢てしても差支へないといふ心になつて居た。

手紙を書かうと思つて、かれは藤椅子の上から下りた。机は室の一隅に置いてあつた。其處からは硝子障子を隔て、湖水の一角と、深い碧の上に半孕んだ白い帆と、徐に其影を水に涵して居る山と雲とが見

えた。此頃で稀に見るといふ靜かな夕暮であつた。滅多に筆など執つたことがないので、硯は全く乾いてカラカラになつて居た。水入れにも水が一滴も入つて居なかつた。かれは手紙を書かうとする思ひ立ちの前兆が凶であつたやうに、其儘水入を下に置いて、兩手を頬にあて、久しい間深い思ひに沈んだ。漲つて来る力を辛うじて押へやうとする人のやうにも見えた。

暫くして彼は身を起した。手には水入れを持つて居た。筧から綺麗な水のちよろちよろと落ちるところには、さつき女中が裏の山から取つて来た大きな山百合が無造作にさしてあつた。ポチャンと音して水の底に沈んだ水入からは、小さい泡がブク／＼と湧くやうにあがつて、やがてそれがばつたりと止つた。瀬戸の藍の濃い色がくつきりと水の中に見えて居た。

机の前に戻つて来たかれは、兎に角水入から水を硯に落して、そして靜かに墨を磨り始めた。

墨が濃くなつても、かれは磨る手を留めなかつた。引張つて行く力と押へて居る力とは、其處でも争鬭を續けて居た。しかし矢張引張る力には敵はないと言つたやうに、かれは鞆の中から巻紙と封筒を出して、そして筆を執つた。

書きかけては、幾度となく丸めて捨てた。今の氣分にはまつたやうな文句が何うしても出て来なかつた。前に書いてやつた手紙が思ひ切つて絶望的であつたので、それと今の氣分との間に、大きな間隔が出来て居るのをかれは發見した。

一度筆を捨てたかれは、暫くの間、仰向けに倒れて、兩手を後腦のところ組合せて、ぢつと天井を見て居た。朝雲暮雨と書いた横額の長押にかゝつて居るのに今始めて氣が附いたやうにかれは無心にそれに見入つた。

ふと氣が附くと、自分といふものゝ意氣地なさといふことよりも、男の意氣地なさといふことが考へられて居た。女の勝利——それが腹立しかつた。

それでもかれは筆を執つた。

始めに出来た手紙は、いかにも調子が弱かつた。『何うしても別れられない。』こんな文句も書いてあつた。『此間遣つた手紙はあれは破つて棄て、呉れ……今ではもうあんな心持ではないから。』かうした言葉も書いてあつた。湖畔の別荘の涼しいことだの、若い女中と一人で世を離れて日を送つて居ることだの、山百合の澤山咲いて居る事だの、其他種々な事を書いた。最後に、『この手紙を見たら、来て呉れ、……屹度来て呉れるね、』と書いた。

名宛を書き終つて、さて讀返して見た。『こんな手紙が出せるか。』かれはいきなり自分でかう言つて、さも腹立しさうにそれを破つて捨てた。

次に書いたのは、今少し軽い洒脱な調子を持つて居た。苦悶を出来るだけ包みかくして、靜かに一人

此處に避暑に来て居るやうな風に書いた。『何うです、お暇なら出かけて来て呉れませんか……此間の仲直りもしたいから。』かうした風な文句が其處にも此處にもあつた。昨年の春時分、心がまだかう突詰めて居ない頃には、よくかういふ風な手紙の遣り取りをして、洒落を言つたり、からかつたり、わざと皮肉なことを書いて女を怒らせて見たりした。其頃のことになつかしかつた。今一度其時分の心持にならないと思つた。

男が幾人あらうが、何ういふ生活をして居ようが、そんなことは、其頃にはまだ眼中に置いてなかつた。其頃では、女がみだれた姿をして室から出て來ようが、氣障な男と伴立つて一緒に歩いて居ようが、或はもつとひどい處を見せつけられようが、別にわるい氣分を感じるやうなこともなかつた。かれは書いた手紙を読み返ししながら、其時の記憶を頭に繰返した。『まアこんな手紙でも遣つて見るか。』かう口に出して言つて、封筒に入れて、番地と宛名とを書いて、それを机の傍に置いた。で、やゝ暫く頬杖をして、湖水の方を見て居た。しかしいつの間にかその心が變つて居るのをかれは發見した。そんな軽い心持では居られなかつた。

暫し心を落附けようと思つて、かれは縁側から下駄を突掛けて庭に出た。かれの姿はやゝ少時庭やら裏の林の中やらに見えて居た。

三十分の後には、それでもかれは矢張机の前に来て坐つて居た。今度は茶代の返しに宿屋から貰つた中

禪寺湖の繪葉書を取り出して、そこから一番よく湖水の氣分の出で居るのを一枚選び出した。

……此頃は何うして暮らして居ますか、それが知りたい。忘れやうとしても忘れることが出來ない……唯かう書いたきりで筆を捨てた。此方の宿所は表面に詳しく書いた。

兎に角女のことを聞かないでは、氣がすまなかつた。苦悶を免がれるにも女の力を借りなければならなかつた。水で消されるか、火で燃やされるか、何方にかしなければならなかつた。燻つて居るつらさをかれは此處に來てつくづく知つた。

夕暮の散歩には、かれは町の方へと出かけて行つた。懷中にはその繪葉書が入れられてあつた。

まだかれはそれを出すやうな氣分になれなかつた。餘りに動搖し易い自己の臍甲斐なさが絶えず頭を苦しめた。一度ならず二度までも破つて捨て、了はうかとも思つて懷中から出して見た。

宿屋の別室には球臺が備へ付けてあつた。其處には、客が三四人頻りに球をついて居た。赤い白い玉が、青い臺の上を滑かに轉がつて通つた。へこ帯に金鎖を絡ませた紳士らしい八字髻の男は、瘦せた背の低い男と笑ひながら頻りに何か批評してゐた。

かれは番頭の居る傍に腰をかけて、袂から敷島を一本出して、マッチをすつて火をつけて、スバスパとそれを吸つた。烟は緩かに軽く室の中に漂つて行つた。

一勝負済むのを待つて、かれは瘦せた男を相手にして始めて見た。何うした加減か、今日は球が思つたやうに動かなかつた。いつもならば、容易く走つて轉がつて行く球も、思ひもかけない方へ向つて滑つて行つた。かれは一勝負すまして、不機嫌な顔をして其處を出た。

日増に暑くなつて行く此頃では、客ももうかなり多く集つて来て居た。庇髪に結つた若い女學生風の女だの、子供を連れた丸髻の細君だの、新婚の夫婦らしい二人づれだのが、旅籠屋を出て、涼しい湖畔へとぞろ／＼歩いて行つた。繪葉書を賣る店、FINE ARTS と書いたペンキ塗の大きな看板を掲げた店、それからステッキを並べた店、羔羹を並べた店などが兩側に續いた。片側町になつたあたりからは、薄暮の湖水が繪のやうに展げられて見えた。

岸に打寄せる漣の音は、何となくかれの頭に舊恨と哀愁とを齎すやうなやさしい調子を立て、居た。湖水の落口に架つてゐる橋の向うには、レーキサイドホテルの白い洋館が、樹の間からチラチラと見え、橋の袂にはボートがタブ／＼と波に搖られて居た。町の出口から橋までの間の平坦な路——その路をかれは行つたり來たりした。

険しい山路に勞れたといふやうな遊覽者は、幾組となく向うから遣つて來た。『やつとついた！』などと言つてくたびれた足を引摺つて行くものもあつた。旅籠屋の前では、番頭や女中が店頭に出て喧しい聲を立て、客を呼んで居た。

薄暮のやはらかな空気は、かれの心を次第にやさしい甘い悲哀の中へつれて行つた。かれは久しく味つたことのない情味の染々と胸に溢れて來るのを覺えた。

ポストは町の中頃の大きな旅籠屋の前にあつた。かれが其處に來た時には、日はもうとつぷり暮れて、電燈が店と店につゝいた厨とを明るく照らして居た。忙しさに働いて居る板番の男の顔は、物を煮る大鍋の湯氣の白い中にくつきりと見えた。其處に、ガヤガヤと一組の客が著いて、山駕籠が三挺まで並んで下された。『入らつしやい。』『おつかれさま。』と迎へに出る番頭や女中の聲を聞きながら、かれは繪葉書をポストの中にそつと落した。

七

かれは女から來る返事を期待しつゝ、日を送つた。返事位は呉れるだらう。かう思ふ度毎に、かれは繪葉書に書いた文句の餘りに素氣なかつたのを惜しんだり、引く力の薄かつたのを悔いたりした。男性の矜恃に捉へられて思ふ心を傳へることの出來なかつたのを後悔した。

あの葉書では、無論女の心を動かすことは出來ないに相違なかつた。女は、その葉書を鳥渡手に取つて見て、すぐそれを傍に置いて、其儘忘れて了つたかも知れなかつた。強く出るにしても弱く出るにしても、今少し色の濃い言葉を用ゆればよかつた。こんなことを思ふほどかれの心は女の方に偏つて居た。

それから二三日は雨が降り続いた。灰色の雲が深く湖水を鎖して、周囲の山も見えないやうな日が多かつた。梅の大きな幹からは、風につれた雨滴がをりく、屋根の上にバラバラと音を立てた。かれは散歩にも出られずに終日臥たり起きたりして居た。藤椅子の上に身を横へて、晝寢をしてゐる顔は青白かつた。

雲が古綿の様にちぎれて飛ぶ日は殊に佗しかつた。山嶺から湖上に渡る風は凄じい音をして、岸の樹立やら草藪を鳴らした。それに山の上は氣候が驚かる、程違つてゐた。袷を着たい位に肌が冷々した。

返事は待つても待つても來なかつた。いつも合羽を着た郵便脚夫が降頻る雨を衝いて、ぬれた熊笹の中をガサガサと音を立て、入つて來た。その度毎にかれは胸を躍らした。しかし多くの手紙の中にも、かれはそれを見出すことが出來なかつた。

天氣に似た佗しい氣分を抱きながら、かれは一日一日と暮らした。湖畔の一間に住んで居るヘンリツタの姿も此頃では減多に見る様なこともなかつた。蛇の目傘をさして、三度々々食事を運んで來る女中の姿が、唯灰色な單調を破る計りであつた。

雨は猶ほ降續いた。

ある日の午後、かれは例のごとく藤椅子に横はつて、向うの山に懸つては晴れかゝつては晴れする雲を見て居た。湖水は鐵色をなして前に展けられて居た。雨がまた一しきりザアと降つて來た。かれは湖水の上に細かい斑紋をつくつて繁く落ちて來る雨をちつと見て居たが、ふとある物の音を耳にして、それとなく眼を其方に移した。

見覚えある女中の紺蛇の目の傘について、深く幌をかけた車が一臺、饅頭笠をかぶつた車夫に曳かれながら、泥濘の深い雨の路を此方へ此方へと遣つて來るのが見えた。聞えたのはその車の轍の石にきしる音であつた。かれの胸は俄かに躍つた。もしやと思つたが、此雨にそんなことがありやう筈がないと思つて、すぐそれを打消して了つた。蛇目傘と車とは、絡れるやうにして、次第に此方へと近づいて來たが、やがて門の前に來たと思ふと、車夫は梶棒を下して、猫脊になつた後姿を此方に見せて、前の雨被ひを外づしにかゝつた。勝色の蝙蝠傘と白い手が見えて、續いて大きな丸髻が見えた。はッと思ふ暇もなかつた。其處にくつきりと現はれた女の姿は、女中のさし翳す傘にさゝへられるやうにして、露の深い熊笹の間の路を此方へと來た。

八

『まア大變な處に居るのね。』かう言つて、女は縁側の踏石から座敷に上つた。

餘りの不意に驚いたといふやうに、男は唯そはそはとして居た。急には言葉も出なかつた。

暫くしてから、

『一 何うして来たんだ。』

『何うして来たは随分な御挨拶ね。』女はあざやかな笑を顔に見せて、『これでも一生懸命で来たんですよ。橋が落ちてたり何かして、それは随分大變でしたよ。』

『今朝發つて来たのか？』

『え……今朝、上野から、』また笑つて見せて、『この雨ぢやとても行かないなんて、皆ながおどかさんですもの。でも、何時この雨が歇むか解りませんからね……中禪寺に来てまアうれしやと思つて安心すると、まだ先だつて言ふんでせう。私、何うしやうかと思つた？』

男の方を見て、

『よくこんな處に居るのね。』

それは男の心をすつかり讀んで了ふといふやうな眼付であつた。私に逢つてうれしいでせう、かうして私を見て居たら、満足でせう。かうその眼やら顔やらが言つて居るやうにも思はれた。

『橋の落ちた處は、それや大變でしたよ。見て居ると、石がドンドン流れるんですもの。妾、怖くなつて車の上で、戦へながらこゝんで通つて来たのよ。』

女はこんなことを餘念なく話してきかせた。で、羽織を脱いで、女中の持つて来た衣紋竹にそれをかけて、再び柱の處に来て、體を斜に品をして坐つた。敏捷で、そして一刻もちつとしてゐないその眼は、火鉢の傍で茶を煎れる支度をして居る女中の方を見たり、其處に坐つて居る男の方を見たりした。暫く黙つて互ひに顔を見合せて居たが、

『何うして？』

やがて女はかう男に言つた。

『お前こそ何うした？』

『私？』可笑しさを包みかくしたやうな笑ひ方をして、『まア好くつてよ、後で話すわ。』かう言ふ眼付をして、また男の眼をちつと見た。

女中は茶を運んで来て、それを女の前に出した。男は、『羊羹がまだあつたらう？』かう女中に言つた。と、女は急に思ひ付いたやうに、信玄袋の中から、袋に入れた菓子を出して、『彼處で買つて来たのよ、』かう言つて、新橋の壺屋の唐饅頭を出した。

『これは旨いな。』

かう言つて、男はそれを一つ取つて、今度は女中に、『お時さん何うです、旨いお土産がありますよ。』女中は顔を赧くして、烏渡お辭儀をした。女は半紙を帯の間から出して、唐饅頭を五つほど包んで、それを女中の方へ遣つた。女中はまた辭儀をした。

女中は火鉢の傍に坐りながら、知れないやうにして、絶えず二人の方を見て居た。男は女中の眼の中に一種の笑が含まれてゐるのを認めた。

紺蛇の目の傘をさして廳で歸つて行つた女中の後姿を見送つて居た女は、『おとなしさうな女中ね。』かう言つて意味ありさうに男の方を見た。

『貴郎も随分ね。』

『何故？』

『何故もないわ。人の氣を知らないのも程があつてよ。』

『でも爲方がないさ。』

『何故爲方がないの。』かう言つて正面から男を見た女の顔には、稍々眞面目らしい表情があつた。すぐに言葉をついで、『貴郎は私達の間があんな一本の手紙で別れられるやうなものだと思つて？』

『でも、僕は苦しくつて爲方がなかつた。とても僕の力では、世話が出来ないと思つたから、それであの手紙を遣つたんだ。』

『あの手紙を私は破いて捨てて了つてよ。』二人はまた黙つた。

暫くしてから、女は、

『で、こんなところに居て、さびしくはないの？』

『それはさびしかつた。』

『私のことなど思ひも出さない？ すつかり忘れて了つた？』

かれは笑ひながら、

『忘れて了つたよ。』

『さう？ 忘れて了つて？ ぢア、何故あんなはがきなど下すつたの？』

かれは投げるやうに、

『まア、好いさ、そんなことは何うでも……』

『好くないのよ。私の心持が解らなくつては、私だつてつまらないぢやありませんか。それや商賣をしてるんですから、怒られるやうなことはそれや澤山あるでせうけれど。』

『まア好いよ。』

『随分心配してよ、私。あの手紙では、本當に吃驚してよ。貴郎は屹度何處かへ行つて了つたに違ひないし、行つた處は解らないし、申譯をしたいにも爲やうがないし……それは、随分氣を揉んでよ。だからはがきを頂戴した時には、それは本當に嬉しかつたわ……まだ、私を忘れては下さらなかつたんですね。』

かう言つて笑つて、

『それでも逢はれて本當にうれしかつた。貴郎がもし居なかつたら、何うしやうかと思つて、心配しいしい來たのよ。』

『それで家の方は、何ういふ風にして來たんだ？』

『家の方？ 家の方は心配はないんですの、檢番にはちやんと用事をつけて來ましたから……本當に、貴郎、手紙のやうなことを考へて居るの？』

かれは女の方を見て『だつて考へない譯に行かないぢやないか。僕だつて、男の一分が立たないやうなハメには陥りたくないからねえ。』

『そんな風を考へて居るの？』ぢつと男の顔を見て、『だつて、あれほど私の心を言つたぢやありませんか。それぢや貴郎には私の心はまだ解つて居ないのねえ。』

『さう言へばさうかも知れない。殊に女の身ではさうかも知れない。けれど口で言つたことより、眼で見たことの方が確かだからねえ……僕はまた今頃は箱根にでも行つて居たかと思つて居た……まあ然し、よく來て呉れた。』

『またあんなことを。そんな厭味を言ふやうな貴郎ぢやなかつたのに……。此頃は、貴郎も大變質が悪くなつてね。』

『さうかな。』

かれはかう言つて笑つた。

離れて苦しんで居た心がびつたり合つたやうに二人は眼を見合せた。

これまでも逢ふとすぐ心が解けて行つた。

明るい笑顔の前には、疑惑も不安も動搖も何もなかつた。折角思ひ立つた決心もまたこれで水の泡に歸して了つた。こんなことを思ひながら、かれは女の方を見て居た。

しかし一通の端書に引寄せられて、遙々雨を衝いて、この山の中まで女が遣つて來たといふことは、かれをして男性の矜持を保たしむるに十分であつた。

『それでも本當によく來て呉れた。』

かれは今一度かう繰返して言つた。

『よく來て呉れた處ではないのよ。お禮など言つて貰はうと思つて來たんぢやなくつてよ。貴郎にあんな風に思はれては、私は立つ瀬がないから、何も彼も捨て、置いて出て來たのよ。來る間も、それや氣が氣ぢやなかつたわ……わかつてね、わかつて下すつてね。』

女はかう言つて、男の心を引きつけなければ止まないやうな眼付をした。

女は嬉しさうにして居た。少時してから、室の中を其處此處と歩いたり、火鉢の前に坐つて見たり、

勝手元の方へ行つて窺いて見たりした。縁側の處へ行つては、『湖水が見えるわね、好い景色ね。』かう言つてすらりとした後姿を此方に見せて、暫しの間、ちつと立つて見て居た。

『さびしいにはさびしいけど、静かで好いわねえ。』

こんなことも言つて笑つた。

今までの淋しい佗しい林の中の生活は、俄かに派手な色彩で彩られた。女は艶のある聲で、東京の話は何彼と話して聞かせた。汽車の中で、女の一人旅を人々に怪まれた話などもした。

『何うせ素人には見えないでせう。なもんだから、皆なじろく見るんでせう。何うしても田舎ですわねえ……それから町でお中食をつかつて居ても、番頭さへ何方さまへなんて、怪訝な顔をして聞くぢやありませんか。女の一人旅はいやなものですわねえ。』

かれは次第に女の生々した話やら気分やらに引込まれて行くやうに見えた。微笑を顔に湛へて、快活に話して居るさまは、今まで蒼い顔をして、ブラブラと其處此處を散歩して居た人とは思へなかつた。時には女の話につれて聲高く笑つたりなどした。

『一人ではもしものことがあつてはッて、家でも言つたんですけれど……去年と違つて、體が自由になつて居るもんですから、さうやかましくも言ひませんのよ。』

何かの話の次に、女がかう言ふと、

『ぢや、當分此處に居ても好いんだね。』

『それは好いわ。そのつもりで來たんですもの。』

『でも、さびしいだらう？』

『そんなことはないわ。静かで好いわ。本當に人氣離れておく山住ひだわね。』

かう言つて快活な調子で、『たうとう來たわね、日光に？』

女は藤椅子に腰をかけたなりなどして居た。根上りに結つた丸髷には、翡翠の根掛がよく似合つて見えた。細い華奢な指には小さなダイヤの指環が光つて居た。

『これ、此間貰つたのよ。』

こんなことを言つて、それを呉れた客のことを笑つて話して聞かせた。

此處に來てからの生活のさびしかつたことなどを男が話すと、女は片頬を笑ませながら、面白さうにして聞いて居た。ヘンリツタの話は殊に深い興味を惹いたらしく見えた。『さうですかね。こんな處まで來て、そんな眞似をしないたつてよさうなものですにねえ。』

かう言つて考へて、

『まだ此處よりも奥なんですか、其家は？ 西洋の人は矢張えらいわねえ。この雨に、そんな山の中

に、一人で居るなんて、私などにはとても出来ないわ。』
やがて女中の話が出ると、

『好い容色ね。』

かう女は言つた。

『容色はよくないけれど、鳥渡可愛い顔をして居るだらう？ それに罪がなくつて好い。本當の戀なんて言ふものは、あゝいふ娘でなくつては出来ないんだ。』

『初めつから貴郎の世話をしてゐて？』

かれは笑つて點頭いて見せた。

『貴郎に惚れて居るのよ、屹度、平氣な顔でこんなことを言つて、『だつて、すぐ赧い顔をするんですもの……私が来て、お氣の毒見たやうね……』女は笑つて居た。

いつも男の經驗するそゝられるやうな氣分が續いた。嬉しいやうな佻しいやうな楽しいやうな心持が男の體を動搖させた。女が持つて居る力に引摺られて行く佻しさが強く意識に上つて來た。

『でも、本當は、私のことなんか何うでも好いんでせう。淋しかつたなんて、實は嘘よ。氣まぐれに端書を呉れたのよ……』

『そんなことはないよ。』

女はそれには構はず、『屹度嘘よ……さうよ。それなのに、私遣つて來たのよ。私も随分馬鹿だわねえ。でなけりや、此處に來るのに、私と一緒に伴れて下さらない譯はないんですもの。別れるの何んにつて、あんな水臭い手紙をよこしたのは、さういふ心持なのよ。』

『そんなことはないよ、何故そんなことを言ふんだえ？』

『だつて貴郎も餘り好い氣だわ。可愛い顔をしてるの、本當の戀はあゝいふ娘でなくつちや出来ないのなんのつて……私の心だつて少しは考へて見て下さいよ。』

『なんだ？ そんなことを言つてゐるのか。』

『だつて何だか解りやしないわ。さつきだつて、あの女中は厭に人の顔をじろじろ見て笑つて居るんですもの。』

『馬鹿なことを言つてるね、お前は？』

『何うせ馬鹿よ。』かう言つて、『本當につまらない！ 怖い厭な思ひをして、こんな處まで遣つて來て……お邪魔なら、來なけりや好かつた。』

こんなことを言ふかと思ふと、女はすぐ笑つて話をして居た。急須に湯をさして持つて來て、『もう奥さんが來たから、浮氣は駄目よ。』など、言つた。

夕方から烈しい風雨になった。

樹の鳴り草のさわぐ音に雑つて、ゴーと吼ゆる風の音は、山から山へ凄じく傳つて行つた。雨は瀧津瀬のやうに白く光つて軒から落ちた。

左程大きくなかつた雷も段々その響を加へて來た。電光は梭のやうに行き違つて、確を廻すやうな音が絶えず湖水に響き渡つた。『雷さまは私好きよ、』などと言つて、縁側の柱の處に立つて、面白さうに降り頻る雨を見て居た女も、後には、『随分ひどいのね。』かう言ひながら座敷の方に入つて來た。

『さう？ 雷さまが此處の名物？ いやな名物ねえ。』

こんなことも言つた。

『貴郎何んだか氣味がわるくなつて來てよ。戸を閉めませうよ。』暫くしてから女はかう言つて立上つて、一生懸命に前の雨戸を引きはじめた。もう日は暮れかゝつて居た。

片時も止まずに雨は降頻つた。

雨戸はそれでもところどころ細目に明けて置いた。そこからは、洋燈の光が濡れた草の葉やら、おしろい草やら、棒のやうに漲り落ちる雨の脚やらにチラチラと揺いで映つて光つた。

雷は段々強くなつて行つた。耳を掩ふやうな凄じい音がすぐ頭の上でした。『大丈夫だよ。此處の雷は、音はひどくつても、滅多に落ちるやうなことはないんだから、』かれはかう女に言つて聞かせた。

『でもひどいわねえ。』

女は眞面目な顔をしてぢつとして坐つて居た。電光と雷聲とは絶え間もなく絡れ合つて、墨の様な闇の中に、濡れた草藪と灌木の林と湖水とを青白く見せた。また光つたと思ふと、凄じい音が殷々として長く長く轟き渡つた。

雷の鳴つて居たのは、それでもさう長い間でもなかつた。一時間ばかりして、段々其音は遠く遠くなつて行つた。雨も小降りになつて來た。『もうあがつた。雨戸を明けよう。』かう言つてかれは立つて行つた。

『雷が鳴つたから、これ雨がすつかり上がるかも知れない。』つゞいてこんなことを言つたかれは、下駄を突かけて、戸外に出て見た。

雨は降つたり止んだりして居た。時々強く降つて來ては、またばつたりと晴れて行つた。山際に段々遠くなつて行つた雷の音に耳を傾けながら、女は漸く心が落附いたといふ風で、『随分怖かつたわねえ……山の中でこんな雨に逢つたら、それこそ大變ね……早く來てよかつた！』

二人は猶暫く縁側の處に坐つて何か話して居た。ランプの灯のかけに動く女の丸髻と白い顔とは、暗

い闇の中にはつきりと見えた。楽しさうに笑ふ聲もした。

林の中の別荘の雨戸が再び閉められる頃には、雨はまた音を立て、降つて来た。

十

朝はあざやかに晴れて居た。湖は鏡のやうに滑かに碧を湛へて、水禽の掠めて行つた後は、一痕長く水の上に白い線を引いて見られた。山はくつきりとその輪廓を青い空に見せてゐた。

樹の梢からは、残つた雨滴がをりく／＼と熊笹の上に着ちた。空気が澄んで、光つて、凄じかつた昨夜の雨や雲は何處へ行つたかと思はれた。

かれが雨戸を明けた時には、朝日は既に湖の半面を照して居た。『好い天氣だ！ 好い天氣だ！』かう連呼して、彼はいぎたなく勞れて眠つて居る女を呼び起した。しかし女は眼を覺さうともしなかつた。

『もすこし寝かして置いて下さいよ。』

さも眠さうな、甘えるやうな聲で言つて、そのまゝ寝反りを打つて、向うむきになつて了つた。

かれは止むを得ず、前の方の雨戸を三枚だけ明けて置いて、ひとり戸外へと出て行つた。で、少時の間、かれの姿は、湖に臨んだ丘の上に見えたり、漣の靜かに寄する汀の畔に見えたり、朝日の斜にさし透つた林の中に見えたりした。路が一方湖水になつて居る處では、かれは傍にある石に腰を懸けて、

久しい間、朝日の影の次第に湖水を占領して來るのを見詰めて居た。

かれは今まで湖水に向つて起したさまさまの感情を今の感情に引比べて考へて見ない譯に行かなかつた。空の晴れたやうに矢張かれの心も晴れて居た。光と歡喜とにかゝりわたり居た。朝日も湖水も何も彼も皆なかれと歡樂を同うして居るやうに思はれた。

少くとも一時間位はかれは彼方此方と歩いて居た。子規の啼聲が常に増して冴やかに鈴のやうに聞き取られた。靜かな波の上には、舟が一隻二隻通つて行つて、段々高くなつた朝日は、今や殆んど湖の全面に輝き渡らうとしてゐた。此方の岸の草藪の露もキラ／＼と七色に光つて見えた。

流石に女ももう目覺めて居るだらうと思つて踵を旋したかれは、まだ雨戸が三枚明けたまゝになつて居るのを見た。『もう起きないか、縁側の處からかれはかう呼び起した。』

女はまだ眠さうにして居た。起き上つて、傍にあつた小形の金時計を取つて見て、『貴郎は、いつも早いわねえ、まだ八時ぢやありませんか……え？ もう散歩していらしやつたの？ ぢや爲方がない起きるわ。』で、はだけた寢衣を掻き合せて、縁側にだらしなく坐つて、其處に散らばつて居る懷鏡を手を取つた。鏡には亂れた丸鬚と白粉のはけた顔とが映つた。

『眠さうな顔ねえ！』

かう自分で言つて笑つて、『昨夜はよく寝たわ。矢張勞れて居たのね。』

やがて髪に挿した蒔繪の櫛を取つて、鬢の後れ毛をかいたり、前髪の曲つたのを直したりした。空の晴れたのに、今始めて氣附いたらしく、『マア、好いお天氣ねえ、眩しいやうだわ。』女は櫛の手を留めて湖水の方を見たりなどした。

男は縁側に腰をかけて居た。

信玄袋の中には、新形旅行用の化粧道具が入つて居た。鏡だの、毛筋だの、刷毛だの、石鹼だの、白粉だのが何處に何う入つて居るかと思はれるやうに、その小さい革製の箱の中から出て來た。

『これは松島に行く時、買ったのよ。覚えて居て?』女はこんなことを言ひながら、毛筋を長く兩方の鬢に挿して、鬢かきで鬚の亂れを丁寧に梳き始めた。傍には眞鍮の金盥に湯が汲んであつた。

『此處はお湯は何うするの? 宿屋まで行かなくつては入れないの?』

『いや、其處に湯殿があるよ。いつでも立てられるやうになつて居るよ。』

『さう?』

熱心に鬢をかきながら、『では、今日は立て、貰ひたいわね。お湯に入らないと何だか氣持がわるいわ……貴郎は今まで何うして居て?』

『一人で立てるのも面倒だから、僕は宿屋まで出かけて行つたがね……立てるのは譯はないよ。樋さへ

かければ、山から水が來るやうになつて居るから。』

『さう?』

見る見る女の髪は綺麗に成つて行つた。毛筋を取つて、二三度梳ると、鬢はふつくりと結立のやうに水々しいふくらみを出して來た。毛筋で撫でた鬢には、新して筋がくつきりと鮮かに立つて見えた。

白粉下をつけて、白粉を塗つて、さて小刷毛でそれを撫でると、顔は見違へるやうに柔かな落附いた色を帯びて來た。女は今一度合せ鏡をして、後の鬚の具合を見て、是で好いと言つたやうに、バタバタと鏡臺を疊みにかゝつた。襟をかき合せた派手な中形が殊に其姿を艶に見せた。

『お綺麗になつたでせう?』

わざとこんなことを言つて、男の方を見て笑つた。

今日に限らず、男はかうした場合には、いつも女の媚に對して、一種の軽い憎惡を覺ゆるのが常であつた。それは自分の力で女の總てを占有することの出來ないのを憎むやうな心持でもあれば、其力に捉られるのを自ら腹立しく思ふ様な心持でもあつた。他の男に對する嫉妬に似た情も交つて居た。男に捉へられない女の自由を憎むといふ様な心も交つて居た。

『いくら綺麗になつたつて駄目だ。僕のものには何うせならないんだから。』氣が付くと男はかう言つて居た。

『さう？ 貴郎のものぢやなくつて？ 貴郎の私ぢやなくつて？』男の顔をぢつと見て、『まだあんなことを言つてるんだもの。私、本當に厭になつて了ふわ。こんなに迄しても、私の心は解らないのかしら。』かれは別にそれを辯解しやうともしなかつた。女が立つて鏡臺や化粧道具を片附けるを見ながら、別れの手紙を出した時の心持などを考へて居た、しかしそれも僅かの間であつた。二人はやがて睦しさうに伴れ立つて湖水の方へ出懸けた。

十一

女は絶えず異つた態度と表情とを見せて居た。着物や化粧の具合で、肩がほつそりと柔かに見えたり、顔が蒼くヒステリックに見えたり、姿が生々と快活な風に見えたりした。眼の周圍に濃い影の生ずる時には、其心が相手の心にぢつと浸み込まなければ止まないやうな一種の潤ひを持つて居た。

時にはまた非常に醜く見えることもあつた。思ひ屈してつかれ果てたといふやうな表情をする時には、口が際立つて大きく見えた。髪の毛の濃いのを誇りにして居る女とは思はれないほど艶のない衰へた氣分を起させることもあつた。

心の明暗がこれほどその態度に影響を見せる女も滅多になかつた。潮のやうな心の干満——其處に單純でない見透かされない捕促すべからざるエキस्पレーションが働いて居た。

形はどちらかと言へば、好い方ではなかつた。すらりとはして居たが、やゝほつそりし過ぎて居た。唯襟筋の長いのと髪の見事なのが僅かにそれを償つて居た。

中でも一番特色を持つて居るのは、その黒瞳勝の眼であつた。それは日の光に由つて絶えず其色を改める海の波のやうに時によつて明るくもなれば暗くもなつた。心持の好い時には、滑かでやさしく何の波濤を起しさうにも見えないが、不機嫌の時には暗く皮肉な愁ひを帯びて、容易に料り知られないやうな深い祕密を包んで居た。かれはいつも其處に影と日向との巧に織込まれて居るのを認めた。

密樹の蔭で見る女は、中でも際立つて美しかつた。柔らかな、薄暗い空氣の中に見る輪廓は、明るい湖畔などで見るものとは全く趣を異にして居た。男が水色のハンモックを樺の林の中に吊つて、書など見て居ると、女はいつも其處に遣つて來て、楽しさうに笑つて話し懸けた。

その時は屹度林の間を洩れて、美しい日影が濃淡の縞を織り出して居た。涼しい風が浴衣の袖を吹いて通つた。

『それは何です？』

かう言つて、男の手から洋書を取つて、わざと頁を翻へして見たりなどした。

ある書の挿畫には、男と女とが抱き合つて居るものなどもあつた。ぢつとそれに見入つて居た女は、『これは小説？』かう言つて男の方を見て、『何うして居るの？ これは？』などと訊ねた。

『貴郎、本などを見て居るのはおよしなさいよ。』

かう口に出してこそ言はないが、眼は常にさうした意味を語つた。かうした山の中に来て、獨りで放つて置かれるのが女には殊につまらなさうに見えた。

『貴郎、瀧でも見に行きませうよ。』

時にはかう言つて男を伴れ出して行つた。

十二

都會の明るい灯や、響や、音楽や、さういふ空氣の中に朝夕を送つて居た女に取つては、林の中の生活は、やがて單調に退屈に思はれるやうになつて來た。湖水も、山も、靜かな天然も、一日二日經つ中には、始めのやうな色彩を其眼に與へなくなつて了つた。

それに、女は普通の女のやうに、落附いた靜かな單純なところがなかつた。聰かしげに覗いた青空のやうに美しく晴れたかと思ふと、すぐ後から鬱陶しい雲が襲つて來た。『何うして、私は、かう氣分が變り易いんでせう。』かう女は常に口癖のやうに言つて居た。

『本當に自分ながら、自分の心が解らなくなるのよ。一體、私の星が悪るいんだわね。三碧といふ星は誰も皆なかうなんですって……厭になつて了ふわ。』男はかうした言葉をよく耳にした。

かれが見て居ても、可哀相に思はれるほど鬱ぎ込んで居る時もあつた。その時は機嫌を取つても効がなかつた。黙つて、蒼い顔をして、碌々口も利かずに居た。これが何うしてあのやうな快活な明るい調子を出すことが出来るかと不思議に思はれるほどであつた。

寧ろその複雑した對照が、女の眼を美しくし、女の心を美しくし、女のスタイルを美しくして居た。始めは男はそれを唯變つた不思議な心の姿とばかり思つて居たが、今ではもうさう簡單には思はれなくなつて居た。その明るい暗い心が、びつたりと男の心に絡み著くやうになつて居た。

さうした社會によく見る女のやうなうは氣な移り氣な處はあつても、一方には何處か眞面目な眞率なところがあつて、それが女の心を一層複雑にして見せた。

女は以前にもその幼い生立を話して聞かせた。何不足ない町娘で育つて、藥師の夜の縁日には、近所の若者の評判にも立てられ、踊の師匠への行きに歸りに、その派手な姿は行きかふ人の眼をも惹いた。

『今でも、其處を通ると、昔の藏がちやんと残つて居るのよ。』その話をする時は、女はいつも聲を曇らせた。

一日一日とさびしい湖畔の生活はつづいた。夏は段々暑くなつて行つた。昨日は少し先きの別荘に西洋人が一家族遣つて來て、閉め切つた門は明け放され、窓には白いカーテンや簾がかけられ、子供が二三人、物めづらしさうに門の處に出て此方を見て居た。夕方には十八九になる娘の弾くピアノの音が靜か

に水を渡つて聞えた。

『西洋人が来たのね……それは可愛い子が居るのよ。私がさつき其處を通ると、にこにこして立つて居ますから、此方からも笑つてそばに寄ると、小さい方がね……さうね、五歳位の子よ、女の子よ、それが、私の方に飛びついて来るんでせう。私本當に可愛ゆくなつて了つて、すぐ抱いて遣つて、いろいろあやしたり何かしてゐると、ぢき、その門の中に母さんらしい人が見て居て、私の方に來て何か言ふんですけれども、ちつともわからないのねえ……本當に西洋人の子供は可愛いわねえ。』散歩から歸つて來た女は、かう言つて、『私、子供が欲しいわ。』

『さうかね、お前などでも子供が欲しいことがあるかね？』

『それはあるわ。』女は片頬を笑ませて、

『可愛い子供を見ると、私にもあんな子供があつたら、と思つて、考へるわ。そりや商賣をして居る中は、出來ては困るけれど、一生子供はないのかと思ふと、心細くなることがあつてよ。』

『さうかな、僕はまた子供など欲しくはないと思つて居た。』

『女はさうは行きませんよ。』

『さうかな、して見ると女は矢張子供が一番大切なんだね。子が無くつては、生きて居る効がない様

な氣がするんだね？』

『さうかも知れませんが。』

男は考へるやうな眼付をして、女の顔を見つめて居た。

暫くしてから、

『とてもお前には子供は出來ないね。』

『さうでなくつてよ。かういふ商賣をして居ても出來て爲方がない人さへ随分あるのよ。』

『しかしお前には出來さうもない。』

『何故なの？』

『男に捉へられないやうな處がある女には、子供が出來ない。』

と、女は男の心を讀む様にして笑つて、

『ぢや、私はうは氣だと言ふのね？』

『さうぢやないけれど、お前の心持には、何處かかう男に底を見透されまいといふやうな氣分がある。何處までも自由に居たいつていふ様な處がある。さういふ風な女には子供は出來ない様だね。』

『そんなことはありませんよ。』

『ないことはない。僕はいつもさう思ふよ。女は男にすっかり心と體との全部を任せて了ふやうでな

くつては、子供は出来ない。』

『さう？』

かう言つて女は黙つて考へて居た。

『その證據には、お前は心と體とをすつかり男にまかせて了つたやうなことはあるまい？』

女はまだ黙つて居た。やがて、

『ぢや、まア、私は心から惚れた人がないといふ譯ね？』わざとらしい笑ひ方をして、『さうかしら？』

……さうね……さう言はれれば、さうかも知れないわねえ。貴郎にだつて、心から惚れて居るつて言ふ

譯ぢやないかも知れないわね。『眞面目なやうな戲談なやうな眼付をして、』

『何故私はかうでせう？ 疑ひ深いんですかねえ。』

『疑ひ深いのは違ふよ。……随分熱心にはなるんだよ。しかし何處かかう氣が定まらないやうな處があるね。』

『さうですかね。性分ですかね。』かう言つた女の顔には一種苦しやうな表情が歴々と見えて居た。すぐ、『何うして、こんな性分に親が生みつけて呉れたんでせう？ 詰らない！ 詰らない！ いくらひとが惚れて居てもさう思はれるんだもの。私の顔や心持がさう出来て居るんだから。』投げるやうに、『子供なんか要らないわ。男なんか頼りにならない！ 私は一生ひとりで商賣して暮らすわ。』

互ひに心を合せようとするやうな努力が常にかれ等の間に働いて居た。黙つて顔を見合せて居る時間を二人は成たけ避けるやうにした。

それは猜疑と不安との時間であつた。觸れ合ふ眼と眼とは、互ひに其心の底を讀まうとして居た。然し幾ら打割つて見せても、まだ觸れ得ない心が底に残つて居た。

二人の戀は普通に見るやうな簡単な熱い烈しい戀ではなかつた。

『何うして、さう貴方は薄情でせう？』

かう言つた女の言葉は男に對する女の要求をまだ十分に言ひ現はしては居なかつた。

男はまた男で、さも心のさびしさに堪へ兼ねたやうに黙つて、『捨て、行くやうなことはもうないね？ もうそんな間柄ではないね？』かう言つて、女の手を握つたりなどした。然し矢張心の底では、まださういふ風に女を信じては居なかつた。

ある時、男が、

『かうして居てもつまらないだらう？』

かう訊くと、

『何うして？』

『何うして言ふ譯もないけれど……何だかつまらなさうだから……』

『つまらなさうに見えて？』

かれは笑つて點頭いて見せた。

『そんなことはないわ。』

かう言つたが、女は矢張りつまらなさうに、退屈さうにしてゐた。

倦怠、疲勞——そこから戀のにけて行くのをかれ等は恐れた。

強い抱擁、烈しい接吻、それでなければ、二人は満足を得難かつた。その瞬間に於いてのみ、二人は底に觸れたやうな氣がした。

はなやかな賑やかな町の灯、人の心を耽溺の底に引張つて行くやうな音樂の調子、自由な、派手な、放蕩な生活、さういふものが、女の黙つてさびしさうに物思はしけにして居る顔や態度の背景をつくつて居た。そしてその背景は、常に女をかれから奪ひ去つて行く大きな力の一つであるやうに男には思はれた。

別れの手紙を書いた時の氣分を、男は時々繰返した。女が此處に来てからも、尠くとも二三度は男はそれを言ひ出した。しかしそれを言ひ出す時は、氣分の爽かな軽い心持の時に限つて居た。その言葉も半は戯談、半は皮肉と言つたやうな淺く軽い調子を帯びて居た。それに引替へて、互ひに黙つて居る時に

は、強くそれが男の胸に響いて來た。女がそれを思つて居ない時でも、さう思はれて爲方がなかつた。

しかし女もこのことを思ひ出さないでもなかつた。さうした經驗を多く持つて居る女に取つては、一人の男から他の男に移つて行くことは、さう大して問題とするに足らなかつた。寧ろ一つの男の心よりも無數の男の心を占領することを女性の矜恃としてゐた。女は、湖水のほとりを歩きながら、さうしたことを一人で考へて居ることなどでもないではなかつた。

男の心と女の心とは、絡み合つて、纏れ合つて、そして常に離れようとして跳いて居た。

靜かな林の私語が二人の周圍にあつた。

十三

瀧壺の見える處へと二人は下りて行つた。落つる瀧の音は人語を辨ぜぬほどに凄しく四邊に反響して聞えた。

路の盡きた處には、危険を拒ぐための柵が嚴重に結び廻してあつた。二人はそれに凭りかゝつて瀧壺を覗いた。

飛沫と霧との底に碧い淵が恐ろしい口を開いて居た。

二人は何も言はなかつた。女の手はいつか男の手を堅く握つて居た。死——今まで起したことの無い

死といふ恐ろしい念が同時に二人の胸に上つて来た。

二人は顔を見合せるのを恐れた。

『もう行きませうよ。』

暫くして女はかう男を促した。

男は黙つて立つて居た。死でなければ完全に女の愛の全部を占領することが出来ないといふことを考へて、かれはぞつとした。無数の性を呑んで猶平然として落ちてゐる瀧は、更にこの離れ難ない一致し難い二つの體を呑むべく用意してゐるやうに見えた。

『もう行きませうよ、貴郎。』

女は再び繰返して言つた。顔には神経の顫動が歴々と見えて居た。

男はそれでもまだ黙つて瀧壺を覗いて居た。飛沫は上つては晴れ上つては晴れた。昨日も男が此方の女中を手招きして勢好く飛び込んだといふ落口の柵が黒くかれの眼に映つた。

『後生ですから、行きませう。』

女は泣きさうにして言つた。

坂を登る時、女の脚はぶるぶると顫へた。男は先に立つて手を引いて遣つた。瀧の上の休茶屋に来て、女は猶その恐怖の念を捨てなかつた。『御覽なさい、ほら、こんな動悸。』早鐘を撞くやうな其の胸に男

の手を當てさせて、

『ひどい動悸でせう？』

かう言つて女は男の顔を見た。

『何も、そんなに怖がることはないぢやないか。』

『だつて、怖いわ。』

『何うして、今日はそんなに怖いんだらう！ 此間はそんなことはなかつたぢやないか。』

『さうねえ、此間は怖いなんて言はなかつたわねえ。』

女の顔は白く且つ蒼かつた。唇も色を失つて居た。男は四五日前に女と初めて此處に遣つて来た時、

『此處から一緒に落ちて死にませうか。』と快活に言つた女の言葉を思ひ出して、それを今の状態に引較べて考へた。

女中の運んで来た茶は温かつた。女は氣になるやうに、女中を捉へて、昨日飛込んだ男の話詳しく訊いた。『いやだわねえ、そんな處を見てゐて、姐さんは氣味がわるくなくつて？』

『もう度々見つけてをりますから。』

『だつて氣味がわるいねえ……』間を置いて、『何だつて、手招きなんて、そんな真似をするんでせう？でなくつてさへ、後を引くものだつて言ふぢやありませんか。厭なことねえ？』女は不氣味さうに美し

い眉を蹙めた。

『もう歸りませうよ。』

女はかう男を促し立て、急いで恐ろしい瀧の畔を去つた。林の中から明るい湖水の見えるあたりに來るまで、女は男の手を離さなかつた。

十四

男は藤椅子に凭りかゝつて、凝と女の方を見て居た。

女は湯上りの艶な姿を、夕暮近い庭に見せて、靜かに歩いて居た。涼しい風が灌木の林を絶えず吹いて通つた。

何うすることも出来ないと言ふやうな考が男の頭腦を頻りに往來した。女が此處に來てから、もうかれこれ十日にもなる。しかし状態は依然として元のまゝである。同じ不安、同じ不満足、同じ動搖――。

何ういふ風に結末をつけてゆくか。何う云ふ風に新しい路が開けてゆくか、かれにはそれが解らなかつた。解らないのが、かれには辛かつた。

『商賣などをやめて、早く一緒にになりたいねえ。……始終中、鬻に結つて居たら、うれいいでせうねえ。』女は此處に來ない前にも度々かうしたことを言つた。女からかれによこした手紙にも、『何時一緒に

なれるでせうね。私の心をすつかり貴郎に見せる時は何時來るでせうね。早く、早く其時が來れば好い。』などと書いてあつた。かれ自からに取つても、何うかして、完全に女の體と心とを自分のものにしたかつた。競争者から安全な地位に移して、朝に夕に其眼、其眉、其髪を見て居たかつた。――それが出來ない位なら、寧ろこの二人の間を破壊して、全く路頭の人になりたいとまで思つた。

十日間――尠くとも其十日間はかれは女を獨占することが出來た。其眼、其眉、其髪を常に自己のものとして眺めることが出來た。しかしそれが何であつたらうか。それがいかなる効果を齎らして來たであらうか。またそれが何んな新しい路をかれ等の前に開いたであらうか。

ある希望を滿たし得た刹那の歡喜以上に何等の意味ある發展を來したであらうか。

依然として女の心は女の心、男の心は男の心、女の體は女の體、男の體は男の體ではなかつたらうか。心はずぐに離れることが出來るではないか。いかなることを考へる自由をも有してゐるではないか。女はずぐ他の男を思ひ浮べることが出來るではないか。

こんな風に思つて居るかれの眼の前には、女を崖から突落した男だの女の横腹に鋭利な出刃庖丁を突き刺した男だのが歴々と浮んで通つた。昨日、瀑壺を覗いた時の女の恐怖も點頭かれた。

一方ではまたかうした力に縛られて、何うすることも出來ない其身が繰返して考へられた。『もう駄目よ、そんなことを言つたつて駄目よ。』かう言つた女の言葉も思ひ出された。

其處に蹲踞んで花を探つてゐる女の方をかれは再びちつと見た。

女は男がさうしたことを考へて居るとは夢にも知らず、やさしい美しい笑を顔に湛へながら、折り取つたおいらん草の紅と白とを組み合せて、それを黙つて物を考へて居る男の胸のところに挿した。半ば捲くられた女の腕は白かつた。

『何を考へて居るの？』

『何にも考へて居ない。』

『嘘！ 考へて居てよ。』男の顔をちつと見て、『そら、考へて居るぢやありませんか。』

『……………』

『ちやんと解つてよ。』

男は猶黙つて女の方を見て居た。

『つまりなことを考へるのは、およしなさいよ。』おいらん草の束ねたのを襟の處に骨折つて挿して、

『貴郎も随分神経家ね。』

男が猶黙つて居るのを自烈度さうにして、『何處かへ行つて見ませうよ。そんなにして寢てゐたつてつまらないわ。』

女は丸髻が壊れてから、自分で器用に庇髪に結つた。それが一層女を素人にして見せた。都會に居る

間は、滅多にそれは結つたことはなかつた。庇髪は、下町の座敷には伴はなかつた。

『今日は旨く結へたでせう？』

女はわざと男の氣分を引立たせるやうにして、後を向いて髪を見せた。

何故か今日は男は深い沈思から急に浮び上がることが出来なかつた。女に強ひて誘はれて散歩に出て、快活に笑つて話をする氣分になれなかつた。

心も體も疲れて居た。あらゆる束縛から離れたといふやうな佻しい心持と飽まで歡樂を追求しようといふやうな熱した心持とが一緒になつてしつこく絡みついて居た。男は唯女の話しかける言葉を點頭いて歩いて居た。

歡樂の満足と慾求の満足とは、男に取つてまだ十分な満足ではなかつた。其處に猶ほ何か深いまことの意味が要求された。眼、眉、髪、肌、それに其身の總てが占領されて了つた時の心は、暗くもあり、重苦しくあり、佻しくもあつた。世界が丸で別の世界のやうにも見えた。それに引かへて、女は心も體もすべて男にまかせ切つた時に於てのみ唯幸福であるといふやうに見えた。

其時に於ける女の笑ひ——その笑ひを男は時々思ひ出した。それは黄いやうな感じのする笑ひであつた。その笑ひの底には、恐ろしい影がひそんで居た。他界から微かにさして來たやうな影がひそんで居た。それは死に近い影であつた。

「歡樂の國」といふ名畫を曾てかれは見たことがあつた。背景をつくつて居る光線には、一味の深い悲哀と暗い幽鬱とが藏されてあつた。満たすべからざる歡樂の不滿が常にかれを根柢から惱した。女が物思ひに沈んだやうな顔をして居る時には、男は常に同情を持つた心持になつて居た。それと反對に、男が疲れ切つた不安な顔をして居る時には、女はそれを慰藉する様なやさしい態度を取つた。

十五

女は時々都會の夜の灯を思ひ出した。『今頃は東京は賑やかでせうね……』かう言つてはいつもさびしさうな顔をした。湖畔の町へは、それでもよく出懸けて行つた。晝飯などを食ひにも行つた。旅館の室は多くは湖水に臨むやうにつくられてあつた。其處には卓が据ゑられて大きな花瓶に山の草花が一杯に投げ込まれたやうにしてあつた。

西洋人が二人づれで睦しさうに湖水を指して何か語り合つて居ることなどもあつた。ある日行つた時には、貴族の息子でもあらうと思はれるハイカラな若い男が、新婚らしい庇髪に結つた細君を伴れて來て居た。眼の綺麗な色の白い頬の豊かな女であつた。卓に凭りかゝつてペンで頻りに繪葉書を書いて居た。

『私も繪端書が書きたいわ。』

女は甘えるやうにして言つた。

『何處へ出すんだ？』

『好いところよ。』

やがて繪端書は取寄せられた。それには、町の家並だの、瀧だの、歌が濱から見た男體山だの、中宮祠の前から見た湖水だのがあつた。女は其處に置いてあるペンを取つて、わざと品をして、綺麗な横顔を向うの二人に見せるやうにして、繪端書を書いた。

それは多くは簡単な暑中見舞であつた。『私、此處に來てますのよ。さびしい處ですの。』などと書いたのもあつた。平生最眞になる客に充てたのもあつた。男は一枚々々それを翻して宛名を見た。

最後の一片は、手に取つて、見えないやうにして書いた。書きながら、時々此方を見て笑つた。で、宛名を書き終ると、すぐそれを自分の懐に入れて了つた。

『お見せ。』

それを見て居た男は、笑ひながら手を出した。

『い、のよ。』

女は初めは笑つて言ふことを聞かなかつた。

『見せたつて好いちやないか。』

『ぢや見せるわ。』

女は懐からそれを出して、澤山繪端書の重ねてある處に置いた。——番地——様と表面にしてあつて、『御機嫌よう御座いますか、お體を大切に。』と書いてあつた。女は笑つて男の顔を見た。男も笑つて居た。

『よくつて？ 出しても？』

『わるくつたつて、爲方がない。』

男は別に機嫌がわるいといふ風にも見えなかつた。

『貴郎も何處かへお出しなさいよ。』

『僕は何處にも出す處がない。』かう言つたが、その端書を取つて、『僕も此處に署名してやらうか。』

『え。』

女は笑つて居た。

『本當に好いか。』

『いゝわ。』

『まあ氣の毒だからよして置かう。』

『いゝのよ、本當にいゝのよ構ひはしないわ。』

男は自分の名でない名を其處に書いた。女は呼鈴を鳴らして女中を呼んで、それを一まとめにして出させた。

新婚の二人は此方を見て居た。

『ちよいと來て御覽なさい。』

食事を濟まして、欄干に凭り懸つて、湖水を見て居た女は、かう言つて男の方を振返つた。

其處には、湖水を遊覽する一隻の舟が今出ようとして居た。一番最後に遣つて來た派手なつくりをした女が慌て、それに乗ると、舟はゆるやかに雁木から離れた。駛したやうに滑らかな碧い湖水には、船頭の漕ぐ櫂の痕がぶたぶと日影に光つて見えた。

男が三人、女が二人、それに十歳位になる女の兒が乗つて居た。麥酒の罎や菓物や茶道具などが載せてあつた。舳尾の方に置かれてある七輪の鐵瓶の中には、徳利が小さく見えて居た。

流石に日ざしが暑いと見えて、男の一人は新しい手拭で頬かぶりなどをした。面白さうに楽しさうに笑つて話をして居るさまが、手に取るやうに此方から見えた。舟が少し出た處で、最後に乗つた女は、目の覺めるやうなお納戸色の蝙蝠傘をぱつと開いた。

旅館の二階三階からはそれを見て居る人が多かつた。新婚の二人も矢張欄干に凭りかゝつて見て居た。

『面白さうね。』女は男に云つた。『向うに見物するやうな所があるんでせうか？』

『それはあるさ。歌が濱だの、合瀉だの、上野島だの……』

『島があるの？』

『島つて言ふほどではないが、此山を開いた人の墓のある處がある。』

『此山を開いた人つて……矢張坊さん？』

『それはさうさ。勝道上人つていふ。』

『行つて見たわねえ。』

『ぢき舟に酔ふ癖に……』

『いゝえ、私は舟は大丈夫よ。小さい時分に、神戸から父さんや母さんと汽船で横濱に來たことがあつたけれど、ちつとも酔ひはしなかつたわ。今でも覚えてるわ。』靜かに湖上を漕いで行く舟の方を見て、

『行つて見ませうよ。ね、貴郎？』

『此處の湖水は深いよ、落ちると、大變だよ。』

『大丈夫よ。』

『ぢや落ちて死んでも知らんよ……。それでも好いかえ！』

戲談らしく男が言ふと、

『いゝわ、死んでも、貴郎と一緒になら。』かう言つて女は笑つた。

見ると、舟はもうかなり沖に出て居た。派手な蝙蝠傘は晴れた水の光に映つて丸で繪か何ぞのやうに見えた。其の向うには、斜に帆を揚げたボートが一隻通つて行つた。對岸の森の中の西洋人の別荘だの、寺の屋根だのが分明と指さされた。

湖に臨んだ家々の雁木は棧橋のやうに長く湖水に突き出して居た。旅館から其處に行くには、大きな厨の傍を通つたり、炭や薪の置いてある物置の側を通つたりしなければならなかつた。雁木の上では襪がけになつた女中がせつせと物を洗つて居た。湖水は透徹るやうに澄んで、日影のチラチラする底に小石が碧く數へられた。暫くしてから、二人は其處に下りて行つた。

花萼を敷いた新しい荷足が一隻、準備を整へて其處に待つて居た。

二人を乗せた船はやがて出た。

樓上樓下の容は皆それを見送つた。笑つて何か噂し合つて居る人達もあつた。欄干に凭つて此方を見て居る新婚の二人の姿は、沖に出るまで小さくなつて見えて居た。

女は楽しさうにして居た。白い腕を惜しけもなく見せて、舟縁に凭るやうにして、綺麗な水を弄んだりなどして居た。をりをり寄せて來る波に驚いては、『まア、ひどい、』などと笑つた。

碧い水の堆積は、湖水のいかに深いかを思はせるに十分であつた。『この湖水は深いんですね？』かう言つた女の言葉につれて、中年の眇目の船頭は、いろいろなことを話して聞かせた。無数の埋木が底に沈んで横はつて居る事だの、大きな山椒魚が澤山住んで居る事だの、昔から深さを量つたものがないといふことだのを話した。

『だから、此處で死んだものゝ、死骸の上つたためしがありませんヤ。』

船頭は軽く櫓を押し乍ら、續いて昨年溺死した西洋人の話をして聞かせた。

『怖いわね。』

女は水に浸した腕の半をハンケチで拭きながら、『それで、たうとう死骸が上らなかつたの？』

『西洋人ですから、随分お錢をかけたんですけれど……』船頭はかう言つて、『その時は、それは騒ぎでしたぜ、中禪寺の舟は皆な出拂つて了つた位でしたぜ……それでもたうとう解りませんヤ。』

船頭は少し来たところで、柱を立て、帆を揚げた。それはつぎはぎの眼に立つて見える汚い帆布であつた。涼しい風が人々の袂に吹いた。

舟は岸を遠く離れない處を通つて行つた。朝に夕に散歩したところも、舟から見ると趣が全く變つて居た。西洋人の別荘は密樹の間から、椅子や卓を置いた居間だの、ピアノの置いてある二階だのを水彩畫のやうにして見せた。乳母車に子供を乗せた西洋婦人が長い裾を引きながら通つて行くのが緑葉の間

に見えたり隠れたりした。

ボートを岸の繁つた樹の間に埋れるやうに繋いで、ひとり静かに書を読んで居る若い婦人などもあつた。

暫く来た處で、

『そら私達の家が見えてよ。』

かう女が男に指した。

成程樹の間から、二人の小さい別荘が見えた。誰も居ない六疊の座敷には、午後の日が明るくさし透つて居た。籐椅子の上に置かれた讀みさしの洋書の頁が風に翻つて居るのも見えた。

其處で過した二人の生活は丸で別人の生活か何ぞのやうに男には思はれた。半月の生活が取あつめて考へられるやうにも思はれた。女にも同時にそれと同じやうな思ひが上つたと見えて、

『此處から家を見ると、不思議な氣がしてね。』

『さうだね、彼處に雨の降る日にお前が来たとは思はれないやうな氣がするね。』

『私はまた何だか貴郎が彼處で本を讀んで居るやうな氣がして爲方がないわ。』

こんなことを言つて居ると留守居をして居た女中が、やがて縁側の處に其姿を見せた。女は俄かに、『お時さん！』と聲を張上げて呼んだ。ハンケチを振つて見せた。

『ほら、解つたでせう。此方を見て居る。笑つて居る?』
見ると、女中もハンケチを振つて居た。

五六間ほど離れた處を一隻の端艇が漕いで行つた。

『あの人がやなくて?』

女の眼は逸早くそれに乗つて居る西洋婦人を認めた。成程それはヘンリツタであつた。まだ年の若い派手なネクタイをした西洋人が一緒にそれに乗つて居た、權を水の上にあけた舟は、緩やかに波に漂つて居た。

樂しげに笑ふ聲が水に響いて聞えた。やがてヘンリツタは何か歌らしいものを聲張り上げて唄ひ始めた。それは冴えた幅のある好い聲であつた。戯れ合つた二つの影は、碧い澄んだ水に捺したやうに明かに映つて居た。

『到頭好いお客を捉へたと見えるね。』

此方からそれを見て居たかれは、かう言つて笑つた。

『さうね。』女も笑つて、『中々好い男ぢやありませんか。』

『さうだね、鳥渡好い男だ。女よりも若いやうだな?』

『さうね。』

女はちつと其方を見て居た。ヘンリツタが唄ひ終ると、今度は一緒に乗つてゐる男が大きな聲を立ててSomeらしいものを吟じ始めた。水に映つた影は纏れたり解れたりして居た。

すれ違つた時には、距離が二間位しかなかつた。彼方からも此方を見た。何か囁し立てるやうな聲をかけた。ヘンリツタは綺麗な笑顔を此方に見せた。

『西洋人は暢氣ねえ。』

すれ違つて少し來た頃、女は笑つてかう男に言つた。

『あの女唐は、あれで、中々食へた女ぢやありませんや。』船頭は客がそれと知つて居るとは知らずに、ヘンリツタの事を何彼と話し出した。

『あの向うの家を借りて居る女だらう?』

かう遮つて男が言ふと、

『旦那はもう御存じですか。』思ひもかけないといふ調子で言つて、『あんな綺麗な虫も殺さないやうな顔をしてゐて、あれで大變なんですからな。昨年なんぞ千兩も稼いで行つたさうですからな……それであつて、吝嗇しほいと言つたら……。私達の仲間の家を借りて居るんですけど、間代ましろきりで、心附けなんぞ忘れてもしやしないといふこつてす。』

『此方の言葉はそれでも話せるのかね？』

『から、駄目だつて言ふこつてす。ペラ、ペラ、ペラ、何のことアない、豆がらに火がつくやうだつて言ひますが、本當ですな、異人のしやべくるのは。』後を振返つて見て、『異人でも、矢張男は女に甘いもんだと見えますな。』船頭はこんなことを言つて笑つた。二人も笑はずには居られなかつた。

湖の水は餘り冷たい方ではなかつた。それでも浸さぬよりはと言つて、載せて來た麥酒の罎を紐に結へて、女はさつきそれを湖水の中に入れた。紐の末を女はしつかりと持つて居た。

『中々重いわ、貴郎少し持つて頂戴。』

で男は代つて持つて遣つた。ふと氣が附くと、船は此方から彼方に行かうとして居た。湖水は今が一番深い處で、四方からさし込んだ日の光線は、稜角をなして底に七色の色彩を描いて居た。

樹の影の少い石の多い上野島には長く留まつて居なかつた。女は石に躓いて幾度か轉びさうにした。容易に遣つて來ないのを何うしたのかと男が戻つて行つて見ると、下駄の桁をかけた女は足袋跳足になつて困つて其處に立つて居た。

『しやうがないわ。』

でも、下駄は役に立たないほどでもなかつた。日影の暑い凸凹した路を、船を繋いだ方へと、女を男

が保護するやうにして、やがて靜かに下りて行くのが見えた。

船は葛の蔓の下つたり、荆棘の花の白く咲いたりする岸を縫ふやうにして漕いで行つた。密樹の間を洩る、日影は、女の肩から男の膝のあたりに絶えず濃淡の縞を織つてチラチラして居た。二つのコップにつがれた麥酒、古新聞に包んで持つて來られた干葡萄——それを女は氣味よく音を立て、嚙んだ。

五大尊のある岸に船が著いた時には、女はもう上がらないと言つて居た。でも、男が船頭を案内に立て、岸から續いて居る樹影深い涼しさうな路を彼方へ行かうとすると、後から聲を立て、呼んだ。

『私も行くわ。』

で、女は船頭の藁草履を結び附けにして穿いて出懸けた。『私、こんな草履を穿くのは、生れて始めてよ。』行く行く女はこんなことを言つて笑つた。二杯飲んだビールの酔ひが發したといふ風で、わざと駈けて先へ行つて見たりなどした。島とは違つて、此處には涼しい蔭が多かつた。男は灌木の林の中に入つて、細い枝を切つてステッキにした。

段々路は細くなつて、熊笹が深く兩側に繁るやうになつて來た。二町位と船頭が言つた路はかなり遠いやうに二人には思はれた。廳て一と處樹の切開かれた處があつて、其處に荒廢した堂宇が見えた。

全く人氣の絶えた堂宇の中に、寂然として立つて居る古びた佛像の姿は、二人の胸に一種不思議な思ひを起させるに十分であつた。女は男に凭り添ふやうにして、黙つて其の佛像の前に立つた。

一つの佛像は、ギョロリとした怖い恐ろしい眼をして居た。一つは暗い影の中に影のやうになつて立つて居た。他の一つは凄い笑を顔に湛へて居た。

『此處には、平生、誰も居ないの？』

女は聲を低くして訊いた。その低い聲でさへ、堂内に凄く響き渡るやうに女には氣味悪く思はれた。何うした機會か、男の胸にも此時神祕な不可思議な氣分が起つて來た。かうして黙つて立つて居る佛像——雨が降らうが風が吹かうが、乃至はいかなる悲惨なことが此の世の中に起らうが、この深山の中の人氣のない堂宇の中に黙つて寂として立つて居る佛像のこの冷靜とこの Indifference、それが自分の熱したり悶えたりする動搖した心にある暗示を與へなければ止まないやうにかれには思はれた。また、それと同時にその冷靜とその Indifference とが自己のこの苦悶を救つて呉れるやうにも思はれた。

かれは女と自己との關係を考へてぢつとして其處に立ち盡した。

其處等を見て廻つた船頭は、『山の奴等ア、矢張賭博打ちに來ると見える。』こんなことを言つて、棚の上に残つて居る蠟燭やマッチの殻などを指し示した。

『夜こんな處に來る人があるの？』

女が驚いたやうにして訊くと、

『え、此の山の中に、木を伐り出しに來てる奴が澤山あるんでござア……。』かう言つた船頭はやがて

得意になつて山に居る一種の住民のことを種々と話して聞かせた。それは山の奥から山の奥へと木を伐つて暮して行く人達であつた。谷合の深い處に、人知れず小屋掛をして、木材のあるうちは其處に住んで居てなくなると、山から山へと移つて行くのが、其人達の生活であつた。

『まア、そんな暮しをして居る人があるの？』女は一層驚いたやうな顔をして、『それでお上さんも子供もあるんですか？』

『それはさうですとも。』

船頭はかう言つて笑つた。

『まア、ねえ、貴郎、』と向うに立つて居る男の方を見て、『まだこの先の山の奥に暮して居る人があるんですつて？ 厭ねえ、よく怖くはないわねえ。』

男はそれでも考へたまゝ、黙つて立つて居た。

何うした聯想か、男の頭には此時兼ねて聞いて知つて居る冬嶺行者の話が歴々と浮んで通つた。苦行に苦行を重ねて、それでもまだ心の解脱を得ることの出來ない行者達は、冬の雪の中を侵して、この大きな山脈を、峰から峰へと修行をして歩くのが例であつた。手一合などといふ苦行を敢へてしたものもあれば、蕎麥粉を雪に交ぜて食つて、この山の中に冬三月を過したといふ名高い僧侶もあつた。昔は峰から峰へ行者小屋が出來て居て、毎年一人や二人この冬嶺行者に出かけて行かないものはなかつたとい

ふ。煩惱、執者、それから解脱する爲めには、人間のあらゆる束縛から逃れ、世間のあらゆる歡樂から離れ、肉體を毀損してまでも、猶苦行を怠らなかつた人達の生活——それがかれの生活に意味あるコントラストをなして考へられた。

今日に限らず、さうした心持になることはこれまでも度々あつた。盲目な満し難い本能の力に相對する時は、殊にその感が深かつた。歡樂に向つて熱心に進んで行く心と、努力に向つて勇猛に進んで行く心と、其處に全く異つた二つの道があるのをかれは常に明かに知つて居た。

『煩惱と執着と嫉妬と愛慾とに悩まされた自分の生活と、平和と信仰と無邪氣と敬虔とに和らげられたその人達の生活と、……其の距離は？』

かれは其處まで考へて來て、思はず知らず頭を振つた。

十六

旅館の長い廊下から階梯を下りやうとして、女は思はず聲を立てた。

『まア。』

『まア、めづらしい！』

丸鬚には結つて居ても一目でそれとわかる意氣な女は、矢張驚いたやうに、かう聲をかけて立留つた。

何年にも逢つたことのない昔の友達は、急に言葉も出ないといふ風で、暫しは黙つて其處に立つて居た。

『まア、本當にめづらしい！』

『まア、こんな處で逢はうとは、夢にも思ひかけなかつたわねえ。』

二人は涙を滴さぬばかり、手を握らぬばかりにして居た。

『何時來て？』

『今來たばかりよ。』

『まア、本當によかつたわねえ……私が此處に御飯を食べに來なければ、同じ處に居ても、逢はれなかつたわねえ。』

『あなたは前から來て居て？』

『ちき其處の別荘に居るのよ。』

『旦那様と一緒に？』笑つて見せて、『好いわねえ。』

『貴方は？』

鬚の女は、頷で向うの方をश्यकつて見せた。

『さう？』女は點頭いて見せて『今、何處？ 矢張あそこ？』

『今は檜物町に居るのよ……あれからの話をするよ、それは大變よ。』

『一度引いたことがあつたわねえ。』

『それが大變なのよ。』かう言つて『あゝじれつたい。緩くり話がしたいわねえ。』

『別荘に來なくつて。』

『でも……』

『今日歸るの？』

『え……ことに由ると、一晚泊るかも知れないけれど。』

『泊つたらいらつしやいよ。』

『でもねえ。』

二人の話して居る傍を、宿屋の女中や番頭がじろく見乍ら通つて行つた。容易に盡きない話を二人は早く手短かに話した。其時分一緒に居た女達の話も出た。

男が厠に行かうとして、階梯を下りて行つた時にも、まだ其處に立つたまゝで女は熱心に何か話をつづけて居た。厠から出て來た時には、女は笑を含んで此方を見て居た。鬚の女も烏渡振返つて白い綺麗な顔を此方に見せた。

やがて二階に上つて來た女の顔には、涙の痕がそれとなく見えて居た。男の訊くのを待たず『私の仲好だつたのよ、あの人は？ まだ私が向うの土地に居る時分よ。一緒によく抱きつこして寢たのよ。』

……本當に緩くり話しがしたいわ。』

『何んて言ふんだえ？』

『名前？……元は君子、今は檜物町の春村の奴つて言ふんだつて。』

『烏渡好い藝者だねえ。』

『可哀相なのよ。約束した人とは何うしても一緒になれなくつて、一度引かされて、それも駄目で、また今年の春出たんですつて……稼業はもうつくづく厭だつて言つてたわ。』少時考へて、『一時間でも好いから、何うか出來ないかしら？ 話がしたいわ。』

『すれば好いぢやないか。』

『だつて向うに都合があるんですもの……今日歸るか知れないつて言ふんですもの。』かう言ひかけてすぐ立つて下に下りて行つたが、間もなく歸つて來て、『矢張駄目よ。今日歸るんですつて。』

女は萎れた顔をして居た。暫くしてから、

『私も東京に歸らうかしら。』

十七

六根清淨、お山繁昌……白衣を著て金剛杖をついた道者の鈴の音は、亮かに谷間谷間に響き渡つた。

舊曆の七月一日から七日間の山開き、殊にその最初の日は賑かであつた。お山の日の出を拜まうとする人達は、前の日から湖水に臨んだ町へと群を成して押寄せて來た。社務所の軒には注連が飾られ、白装束をした神官達は其處等を忙しうに往つたり來たりした。日の暮れない中に早くも一杯になつて了つた禪頂小屋の外には、白衣の道者が其處此處に固つて集つて居るのが見えた。鈴の音は後から後へと聞えて來た。

夜になつてからの湖水は、美しく灯にかゝやいて居た。蟹氣樓のやうに俄かに現はれた夜の縁日、あの険しい山路を何うしてこの商人達は登つて來たらうと思はれるほど數多い露店が道の兩側に出來て、喧しい呼聲が山の空氣に夥しく響いて聞えた。覗き機關かみくらがあつたり大蛇の見世物があつたりした。賑かな人々の聲は波の寄せるやうに二人の世離れた別荘にも聞えて來た。其處から見た空は、火事でもあるかのやうに明るく美しく輝いて見えた。

湖水には流燈があつた。それは土地の有志の人達の催しをしたものであつた。二人は大勢の人の中に交つて旅館の二階の欄干からそれを見て居た。岸からも船からも無数の燈が水の上を流れて行つた。大きいのもあれば小さいのものもある。すぐ水に沈んで消えて了ふのもあれば、ゆらゆらと長い間水上に漾つて居るものもある。遠く一つ離れて漾つて居るものなどもあつた。

燈火を流す舟には、酸漿提灯が一面について居た。灯を流す度に、喝采の聲が樓上から起つた。

『あの向うに遠く離れて居るのが、一つあるでせう？ 私見たいね。』

こんなことを女は言つた。

男は笑つて居た。

『私の心に丁度よく似てるわ。』

女はぢつとそれを見て居た。成程それは多くの灯から離れて一つさびしうに水に漂つて居た。湖水は黒く光つた。

女はいつか男の手を握つて居た。二三日前から、女はヒステリックな氣分になつて居た。黙つて眼を赤くして居ることなどもあつた。

『さびしいんだらう？ もう東京に歸らうか。』かう男が言ふと、『東京に歸つて商賣したつてつまらないわ。』かう言つて一層さびしさうな顔をした。

遠く離れた一箇の流燈は、それでも沈みもせず、長い間水の上をゆらゆらと漂つて居た。誰もそんな方には眼をつけて居るものもなかつた。喝采がまた起つた。見ると青い赤い灯がまた無數に岸に近い水の上に流されてゐた。

『たうとう沈んだわ。』

かう言はれて、男が其方を見た時には、もう其處には其灯はなかつた。女は男の手を一層堅く握り占

めた。男も黯然として暗い湖水を見た。

女の白い顔に涙の流れるのが夜目にもそれとはつきり見えた。表ではまた道者が著いたと見えて、鈴の音が町の喧騒に雑つて賑かに聞えた。

十八

『私が素人だつたら、貴郎はこんなにしては呉れませんわねえ。』

『何故？』

『何故つて……』女は笑つて、『さうよ、それに違ひないわ。私が商賣をして居なければ、貴郎は振向いても見ないわ。』

『そんなことはない。』

『ぢや、私商賣をやめても好くつて？ それでも貴郎は世話をして下さつて？』男の心を讀むやうな眼付をして、『それ御覽なさい。矢張駄目だわ。』

『駄目なことはない。』

『さう？ ぢや世話して下さるのね。此間のやうなことは言はなくつてね？』

『此間のことつて何だらう？ そんなことを何か言つたことがあつたかね？』

『一緒になつたつて駄目だつて言つたぢやありませんか。一緒になつて毎日顔をつき合せてゐては、戀も何もなくなつて了ふつて言つたぢやありませんか。』

『そのことか。』男は思ひ出したやうに言つて、

『だけど、それは本當だから仕方がない。實際、お前だつて商賣をやめた人達が何んな風になつて行くかを平生よく見て知つてゐるぢやないか。』

『それはさうね。』

女は考へるやうな眼付をして下唇を噛んだ。

『それはさうだわ。』すぐ繰返して、『貴郎だつて、ぢき飽きて了ふわねえ……男はそれだから頼りにならない！』

『いや、さういふ譯ぢやない。』

『いゝえ、さうよ。男つて言ふものは皆なさうよ。』

『そんなことはない。女に言はせると、男が身を投出して來なければ、頼りにならないといふやうな氣がするかも知れないけれど、それはとても出來ないことだからねえ。女が出來ないと同じやうに、男にも出來ないことだからねえ。』

『女は出來てよ。』

『女には平氣でさう言はれるけれど、男には出来ない。出来ないのがよく分つて居て、出来るとは男には言へないからねえ。』

『矢張情が薄いんだわ。』

男は黙つて居た。

八月の末にはもう山には秋が立つて居た。朝晩は山の空氣が肌に冷々した。二人はもう都に歸る準備に取掛つて居た。昨日、東京から電話がかゝつて來たので、降り頻る雨を紺蛇の目の傘に衝いて出掛けに行つたが、其處から歸つて來た女は、もうちゃんと山を下ることに心を決めて居た。『貴郎も一緒に歸るわねえ……私、一人で歸るのはさびしいから。』など、甘えるやうな調子で言つた。

山に來た時の方が新たに彼の頭に繰返された。容易に別れられない、二人の間柄を考へてかれは黯然とした。

十九

二人が山を下りた日はよく晴れて居た。深い谷底に聞える水の音は段々近くなつて、絶壁に臨んで居る茶屋からは、兩方から落合つて流れて行く谷川がそれと明かに指さされた。白い雲が流るゝやうに連なる山の上に靡いた。

二臺の車は、草鞋の下けられた家の傍を通つたり、高く架つた吊橋の上を轆つたり、泡立つ谷川の縁を走つて行つたりした。麓にある瀟洒な一軒の茶屋の二階からは、林を透した水の音が淅々として聞えて來た。

白金巾をかけた卓の上には、野から探つて來た花が大きい青磁の花瓶に一杯になつてさゝれてあつた。女は疲れた様に椅子に腰をかけてゐるが、やがて其處にかけてある長い鏡の前に行つて立つた。

機嫌のよい時でなくては見られないやうな明るい顔がそれに映つて見えた。

『東京に歸つてもつまらないから、何處かもう少し遊んで行かうかな。』

こんなことを男が言ふと、

『まだあんなことを言つてるのね。』

かう言つて女はその傍に來て腰をかけた。男の沈んだ顔付をして居るのに比べて、女は何處となく生々として居た。女の心は明るい灯や賑やかな町の方へ行つて居た。

男の頭には種々なことが往來した。かれは依然として元のまゝのかれであつた。二ヶ月以上の月日、それがかれの身の上に何の變化をも齎しては來なかつた。賑やかな町を背景にした女をかれは矢張頭に描いて居た。『また多くの男の中にこの女を見なくつてはならないのだ。』氣が附くと、かれはこんなことを考へて居た。

谷に沿つて、山は段々開けて行つた。崖の下のやうな處をも通つて行つた。遊覽の客は草鞋をつけたり車に乗つたり駕籠に揺られたりして遣つて來た。路は俄かに林の中に入つて行つた。其處にある電車の發着所の前には、幾臺ともなく並べて置かれた車が、一時間毎に到着する電車からの客を待つて居た。

待合室の一方は茶店になつて居た。二人は其處で電車の來るのを久しい間待つた。

新に開かれた電車は、新建の家屋の多い新開地のやうな處を通つたり、大きな觀音の堂宇の見える處を通つたりして、次第に山を離れて行つた。

大きな谷川に架けた鐵橋の上からは、潤い高原が展けて見られた。空は碧く高かつた。野原には蟋蟀が鳴いて居た。

橋を渡つた處の停留場では、電車が兩方から摺れ違ふ様に出來て居た。長く待つてゐる間、男は車を下りて、其處等を彼方此方と歩いて居たが、終には待ちくたびれて、傍にある葦洲を張つた小さな茶店に入つて行た。ちよろちよろと寛の落ちる綺麗な水の中には心太が旨さうに浸けてあつた。女もやがて下りて來た。『何うしたんでせう？ 遅いのねえ。』かう言つて眉を蹙めながら、矢張男の傍に來て腰をかけた。店で爺と話して居た近所の者らしい男は、じろくくと絶えず二人の方を見て居た。

長いレールに晴れた日が照つた。

二十

これで東京に歸つて了ふのは飽氣ない、何處か一晚途中で泊つて行かう。かう男が言出した。しかし女はそれに應じなかつた。久しく留守にした東京のことが氣に懸るから、何うしても今日は歸ると言つた。男はまた男で、昨日東京から女の許に掛つて來た電話に疑惑を抱いて居た。その電話を聞いて歸つて來てから、女の狀態が急に生々した調子を帯び出した。東京に歸るのが何處となく嬉しさうに見えた。

『貴郎も随分解らないのね。』男の疑惑に對して、女は二三度もかう言つて笑つた。『私はそんなぢやないのよ。』

町の停留場前の茶店で一時間ほど汽車を待つて居る間、男は詰らなさうな佻しさうな顔をして居た。

歡樂の後の悲哀が犇々とその身の周圍に押寄せて來るといふやうに頻りに手酌で盃を空けてゐた。やがて手を鳴らして女中を呼んで、銚子の代りを命ずると、

『貴郎、まだあがるの。』

『……………』

男は黙つて居た。

後には女も顔を曇らせて了つた。女中の持つて來た酒の酌をしてやらうともしなかつた。男ばかり獨

りでグイグイ飲んでゐた。

女はそれを見て居たが、やがて、

『私にも頂戴!』

かう言つて、盃を取つて、矢張手酌で、二三杯つづけて飲んだ。

男の顔は赤く濁つた佗しさうな色を帯びて來た。女の顔は蒼かつた。

『何うしても歸る?』

『え、。』

女の答はキツパリしてゐた。

また二人は黙つて了つた。

女中が切符を買ふ爲めに其處に入つて來た時には二本目の徳利がもう空になつて居た。

『貴郎、何方まで?』女はキツとした顔で男の方を見て、『矢張、上野で好いの?』

『僕は何處でも好い。』

『何處でも好いつて、それぢや困るわ。何處か途中で遊んでいらつしやるなら、さうしていらつしやいな。』

『いや、遊んで行かんでも好い。』

『ぢア、矢張上野で好いのね。』

男は黙つて點頭いて見せた。

女は自分の財布から五圓紙幣を一枚出して、『ぢや、二等の上野を二枚買つて來て下さいね。』かう言つて女中に渡した。

女中が切符を買つたり、荷物をチツキに代へたりして來る間二人は矢張黙つて相對して坐つて居た。

『もうお支度をなすつても宜しう御座いますから。』かう女中が其處に來て言ふ時分になつても、矢張口を噤んで何も言はなかつた。二人は黙つて勘定をすませて其處を出た。

停車場では、殆ど待つ間もなかつた。人々は改札口からもうぞろぞろとプラットフォームに押寄せて行つた。二人の入つた二等室には、西洋人の夫婦だの、切下けの上品のお婆さんだの、官吏らしい髭の生えた男だのが乗つて居た。二人は筋違ひに腰をかけた。

町を掠めたり野を横ぎつたりして汽車は動いて行つた。二人は矢張黙つたまゝ一言をも交さなかつた。二人の胸には種々のことが往來した。

『己はこれほど思つて居る……』かう男は、自分の腹をつかみ出してそのまゝ女に見せてやりたかつた。女はこれまでに別れて來た多くの男のことを考へて居た。

ある停車場では、薪が一杯に積み重ねられてあつた。ある停車場では、大きな時計の針が間違つた時

を指し示して居た。綺麗な水は處々に小さい瀬をつくつて流れた。

女も段々酔が發して來たらしかつた。赤い顔をして體を持餘したやうにして居た。下駄を脱いで腰掛の上に坐つたりなどした。後には向うむきになつて、前髪を窓の下に當てた。歎歎けてでも居るかのやうに髪が揺いた。

男は久しい間、大きく出た帯の松の模様と行儀わるく坐つた白足袋の裏とを眼にしながら、この一箇の小さい體の自己に及ぼす關係を考へてぢつとして居た。

暫くして、再び此方を向いた女の眼には、歴々と涙の痕が認められた。しかしまだ心が解けないと言つたやうに、女は絶えず男の眼を避けて居た。ある停車場で、隣の客が二人下りると、其儘上の網から信玄袋を下して、空氣枕をふくらませて、體を小さくして横になつた。矢張向うむきになつて居た。

をり／＼長大息を吐くのが帯の上の顫動に見えた。

男は無益の考から離れようとして、幾度か努力した。しかしそれはいつも徒勞に歸した。窓の方を向いて、移り變る景色を見ても、何の甲斐がなかつた。二人の不機嫌は矢張二人の不機嫌であり、二人の苦悶は矢張二人の苦悶であつた。

線路の交叉してゐる停車場では、旅客がドヤドヤと入つて來た。もう女は横になつて居ることが出来なかつた。急に起き上つた女は、兩方から壓迫せられるやうに、小さくなつて腰をかけなければならな

かつた。

もう二人は全く酔から醒めて居た。搔上げて搔上げて、女の鬢の毛は蒼い頬に垂れて來た。男は眞面目な難かしさうな顔をして、常に一處を見詰めて居た。

男の隣に絞附の羽織を着た一人の紳士が乗つてゐた。それが賑やかな停車場で下りた。暫くすると、女はもう堪らなくなつたといふやうに、いきなり男の傍に遣つて來た。そして下駄を脱いで、膝を摺付るやうにして其處に坐つた。

『何處かで下りて遊んで行きませうか。』

かう小聲で言つた女の顔には、やさしい笑が湛へられてあつた。

『何うでも好い、歸つても好いよ、僕は。』

『遊んで行きませうよ、ね?』

『でも……切符を買つたからと男が言はうとすると、』

『好いわ、切符なんか無駄になつたつて。ね? 遊んで行きませうね?』かう言つて『這麼風にして別れるのは、私いや?』

『でも無理にさうしなくつても好いよ。』

『好いのよ。』

髪

汽車はをりからの大河の鐵橋を轟々と音を立て、駛つて來た。

二十一

一緒に來た時の満足、離れなければならぬ不満足、それが纏れ合つて、しつこく男の心に食ひ入つて居た。『さつき、貴郎は怒つてゐらしてね。』氣が附くと、女は笑を顔に湛へ乍ら男の方を見て居た。

それは池に臨んだかけ離れた六疊の間であつた。二人は停車場から車で其處に遣つて來た。暗い杉並木の奥に古い名高い社があつて、綺麗な芝生の上には、大きな石碑などが立つて居た。その奥の家では銀杏返に結つて意氣な女中が出て迎へた。

『お前も怒つて居たぢやないか。』

『だつて餘りですもの。』

『男の心は女には矢張解らないんだねえ。』

女はそれに答へようとはせず、

『貴郎と一緒にになると、屹度あゝして酷められるのね？』

男は長い汽車の間の佗しい沈黙を思出さずには居られなかつた。其の時の心の暗闘——夫れは丁度難敵のやうな心持であつた。

寧ろそれ以上であつた。向うむきになつて身を横へた女の小さい體を見た時には、かうまでに此身を自由にせむ悪魔をすだすだに斫りさいなんで遣りたいとまで思つた。何うとも勝手にしろ、もう二度と口も利かない。かう思つた。かと思ふと今度は、此儘別れては腹が醫えない、一度は此方から甘い言葉で、女を引張つて置いて、いざと言ふ時に、ウンと外して前に踏らせて呉れなければ男の意地が立たない。こんな事をも頭に描いて見た。併し女が自分の傍に寄つて來て坐つた時には、さうした種々の考はずぐ消えて了つて、抑へられない歡喜が胸に溢れた。

其處では、二人の物語をさまたける何物もなかつた。電鈴を押さなければ、女中は決して其處に遣つて來なかつた。もう夜になつてからかなり時間が経つた。あたりはしんとして居た。

池には母屋の電燈がチラチラと綺麗に映つて居た。石の燈籠には灯が入れてあつた。蟲の聲は雨のやうに其處にも此處にも聞えた。

『明日からもうお前は僕一人の自由にならない體になるんだねえ。』

『もうそんなことは言はないで頂戴よ。』

かうした會話もをり／＼聞かれた。

『心？ 心だつて分けられないことはないぢやないか。女の心は幾つにも分けられるぢやないか。』
男の強い聲はかう言つた。

髪

女は自分の身上話をしたりなどした。

『是ほど言つても貴郎にはまだ私の心はわからない？』さうした女の言葉——この言葉を男はこれまでにも何度聞いたか知れなかつた。しかし幾度聞いても、それは矢張空しい言葉であつた。かれはいつまでも同じことを繰返して居る二人の間を思はない譯に行かなかつた。

かれは疲れて居た。悶えて居た。かれに取つては、女は蛇のやうであつた。

二十二

翌日の夕方まで其處で遊んで、上野に著いた時は、もう全く夜になつて居た。荷物と女とを乗せた一臺の俵は、やがて電燈や瓦斯の明るい町の灯の中に見えなくなつて行つた。

『左様なら、御機嫌よう。』

車上から後を振返つて言つた訝えた其聲は、はつきりと男の耳に残つて聞かれた。町にももう何處となく秋の氣分が行きわたつて、星は晴れた空に聴かしげに瞬いて居た。

男はこれまでも一週間と女に逢はずには居られなかつた。女の居る家には電話がかゝつて居た。かれはいつも女を電話口に呼出して長い電話をかけた。

歸つてから三日目にかけた電話には、其家の女中が出て來た。

『今日は留守なんですがね……』

『お座敷に出てるの？』

『屹度宅に行つたんでせうと思ふんですけど……昨日から用事をつけて出たつきりなんです。』

『それぢや今日歸つて來るか何うか解らんねえ？』

『もう歸るでせうと思ふんですけど……』

『それぢやまた……』

かう言つてかれは電話を切つた。電話の前に立つ時には、かれはいつも胸を躍らした。其處で聞く女の聲は、殊に一種の微かな顫動をかれに與へた。女の居間は二階にあつた。『鳥渡お待ち下さい——』かう言つて女中はいつも取次いで呉れた。『もし、もし、貴郎ですか。』さう言つて話し出す女の聲は、男の心をそよるやうにした。

かれはそれまでに電話をかける處を彼方此方と選擇した。人の聞いて居ないところ、長く話して居ても差支ないところ、忙しくないところ……かれが昨年以來選んで置いたのは、大きな建物の隅にある靜かなかけ離れた電話で、其處には滅多に人も遣つて來なかつた。小さい電話室の戸を閉切つてさへ了ふと、何を話しても外から聞かれるやうな憂はなかつた。其處からは、硝子戸を隔て、だからだりになりなつた綺麗な敷石と、暢氣な顔をして立つて居る交番の巡査と、大きな赤煉瓦の建物とが見えた。受

話器を耳にしたかれは、それを見ながら、いつもそはそはする心持で相手の出て来るのを待つて居た。小さい狭い電話室、それほどかれの一喜一憂を支配したものではなかつた。その中で、かれは悶えたり苦んだり、喜んだり絶望したりした。電話を切つてから、ぶるぶると身を震はせて、三四分黙つて立盡して居たこともあつた。蒼い痙攣した顔をして其處から出て来たことなどもあつた。時にはまた、晴々した嬉しさうな顔に無限の喜びを湛へて出て来た。

夜遅くかけに行く時には、建物の中はヒツソリとして、一隅に一箇點いてゐる電氣ランプの下で、卓に凭りかゝつて若い宿直の男が雑誌などを讀んで居た。轉寢などをして居ることもあつた。

四日目にかれは其處からまた電話をかけた。其時は女は出て来た。

座敷で見た女は、山で見た女とは餘程調子が變つて居た。言葉でも、態度でも、何處となく生々したところがあつた。長く裾を引いた緇御召の姿は、別な人かと思はれるやうに艶に見えた。『留守にした間そりや随分忙しかつたんですつて。』かう言つて、敷島を指と指との間に挟んでスバスバと吸つて見せて、『宅に行くと、母さんにすつかり小言を言はれて了つてよ。本當に子供ぢやあるまいし、いくら體が自由だからつて、慾がないにも程があるつて、かうなんでせう……私、腹が立つたから、喧嘩して遣つたわ。』無邪氣な、何も苦勞もないといふやうな快活な調子で、言葉を續いで、『人間つて勝手なものね、散々

人に世話をさせて置いて……。』

肥つた女將や、其處に聘ばれて來た藝妓などに向つては、山の話を得意になつて話して聞かせた。怖かつた瀑の話、面白かつた舟遊山の話などは、人々を羨ましがらせた。ヘンリツタの話をしては、『それは綺麗な若い西洋人よ。』などと言つた。女將は貰つた土産の禮を繰返して言つた。

久し振で聞いた三味線の音は、男の心にさまざまの追懷を齎して來た。『残る暑さ』や『萩桔梗』などを女達は弾いた。三味線を傍に置いて、

『暫く弾かないと變ね。』

女はかう言つて、『糸だこが、ほら、こんなに小さくなつてよ。』

ダイヤの指環をはめた細い華奢な指を男に見せた。

其夜遅く、女は男が送つて、細い靜かな通りを歩いて來た。

『もう逢つた？』

突如にかう男が訊くと、

『逢つたつて、誰に？』

『言はないでも解つてるぢやないか。』

女は笑つて、

髪

『あの人？ 逢つてよ。』

すぐ男の手を握つて、『逢つても好くつてね。』

『悪くつたつて爲方がないさ。』

暫く黙つて歩きながら、

『本當を言へば、うそよ。あんな人になど逢ひたくないわ。あんなやきもちやきなんか。』

『隠さなくつたつて好いよ。ちゃんと知つて居るんだから。』

『だつてうそですもの。此間歸つて、宅に昨日まで行つて居たんですから、逢ふ間などないぢやありませんか。』

『そんならそれで好いさ。』

『厭よ、此頃は貴郎は本當に邪推深くなつたんですもの。すぐ怒つたり何かするんですもの。』

『怒つてやしないよ。』

『さう？ 怒りやしなくつて？ ぢや好いけども……、』

二人はその細い通りを抜けて、濠端に出て、其處から大きな公園へと入つて行つた。二人に取つては、この公園は記念の多い場所であつた。其處には、電燈が青白くボプラの葉裏に照つてゐた。いつもの門の處まで行つて、別れを告げて、其處から男は電車に乗つた。

二十三

疑惑は絶える間がなかつた。かれは依然として山に行かない以前の重荷と苦悶とに惱される人であつた。唯一の味方と信じて居た時タイムも、容易にかれのために解決を與へるやうな機會をつくつては呉れなかつた。

因が因を成して行つた。追憶を生んで行つた。嬉しかつたこと、喜ばしかつたことばかりではなかつた。腹を立てたことも、不愉快な思ひをしたことも、矢張かれ等の間の色彩を濃くする有力な材料となつた。

重荷に堪へないで、別れようとして遣つたことは、却つて二人の間の關係を深くする一幕に過ぎなかつた。

『私が商賣をして居なければ、貴郎はこんなにはして呉れない。』かう女の言つた言葉は、女の言つた意味以外に、深い一種の意味を持つて居ることを男は發見した。男から疑はれるやうな境遇に身を置いて居るといふことは、女に取つて此上ない強味である。其處にかくれて、女は常に男を引張つた。

何うかすると女はこれまで關係した男のことを話して聞かせるとがあつた。女は少くとも二度や三度は旦那にひかされたことがあつたらしかつた。田舎に行つて大きな屋敷に召使に侍づかれて生活して居

たこともあつたらしかつた。海に臨んだ高臺の邸にも一年位は居たらしかつた。其處の庭には雞頭の花が澤山咲いて居て、四目垣の向うに、晴れた碧い海が繪のやうに見えた。女はさびしいのに堪へかねて、いつもその四目垣に凭りかゝつて海を見て居た。『其の頃は世の中や男のことはまたよく知らないころでせう。大きな家に老婢と居るのがさびしかつたわ。』こんなことを女は言つて聞かせた。『それは皆な話すと面白いわ。私これで随分苦勞をして來たんですからね。』かうした話をする時には、女は昔を追憶するといふやうなつかしい眼付をするのが常である。

『でも、少しは時々思出すやうな男があるだらうね？』

かう男が訊くと、

『それはあるわ。悲しくつて、別れてから半月位稼業を休んで居たことなどもあるわ。』

『變なもんだね。』

『でも、忘れて行くから不思議ね。段々傷痍が治つて行くんだわねえ。』

さういふ話をする時には、かれはその多くの男の中の一人として自分を考へて見ぬ譯に行かなかつた。一人々々過ぎ去つて行つた戀と慾、燃えて、熱して、冷めて、そしていつとなく路頭の人になつて行く順序は、歴々と彼の眼の前を通つて行く様にすら思はれた。其背景には時の影が寂然として立つて居た。

『こんなことを言つて居る中に、時が経つて、お前が老婆さんになつて、何處かの角でひよつくり邂

逅して、マア貴郎！ ツて言ふやうなことがあつたら、面白いだらうな。』

『本當にねえ。』

かう言つて互ひに笑つたこともあつた。

しかしこんな話をしたのも、もう以前のことである。此頃では、さうした氣分にはなれなかつた。

逢ひさへすれば好いのであつた。顔を見さへすれば、兎に角それで満足が出来るのであつた。別れる時には、二人はいつも此つぎに逢ふ時と日とを約束した。『それでは御機嫌よう。』女の聲は常に男の後に聞えた。

不思議に思はれるほど、其の幻影は常に男の眼の前を離れなかつた。それにのみ唯心が向いて居た。それでも逢つた一日二日は、甘い言葉や柔しい態度やなつかしい表情などの名残の影が、濃く深く身の周圍に残つて居て、『自分の女』といふ觀念が強く男の心を宥めたり慰めたりして居るが、それも、風が吹き、雨が降り、日が照つて居る間に段々薄くなつて行つて、あとからは疑惑と不安とが常に新しい絶えざる力を以て頭を擡げて來た。

始めは半月位は何でもなかつた。それがこの頃では十日になり、一週間になり、五日になるのを男は見た。女の影の段々薄くなつて行く時のさびしさも此頃では殊に痛切に感ずるやうになつて來た。雨の

降る庭などをほんやりと見ながら、終日女のことを考へて暮らして居ることなどもあつた。

山から歸つて来てからは、一層さうした思ひに暮らすやうな日が多かつた。女の周圍に夜となく晝となく集つて来る男——其の男の中には、何ういふ男が居るか解らない。時の間に巧に女の心を奪ひ去つて了ふものがあるかも知れない。氣の合ふといふことは、時間の問題でもなく、義理人情の問題でもなく、世話をした態度の問題でもなく、單に眼と眼、心と心、體と體との刹那の投合にあるのであるだけそれだけ、男はちつとして居られないやうな氣がした。

女の口からちよいちよい洩れる他の男の話もあるが、それよりも突然ある第三者が起つて来て、今まで長い間かゝつて漸く作り上げた甘いイリュージョンを時の間に粉微塵に碎いて行つて了ひはせぬかといふ様な氣がして爲方がなかつた。

それでも時にはわざと逢ふ時日を長く延して置いて見ることなどがないでもなかつた。さういふ時には、かれは苦悶を押へて、一日一日と女から来る音信を待つた。大抵電話が懸つて來たり、手紙がソツと朝の郵便箱に入れられてあつたりする。しかし何うかすると、五日も六日も消息なしに過ぎて行くことがないでもなかつた。その時にはさもなく絶望した人のやうに、蒼く澤つやのない顔をして町の通りを歩いて行つた。

其時の意味のない焦燥をかれはこれまでも幾度となく經驗して居た。かれは自分ながら自分の體の

自由にならないのに常に業を煮やして居た。

女に逢つた夜でも、女に用事があつて、いつもの處まで送つて來られないことがあつたり、前に約束の座敷があつて、長く待たせた揚句に、酒に酔つて長い裾を引摺るやうにして入つて來たりすることなどがあると、男はいつも不快な思ひをせずには居られなかつた。それほどかれの心は女に偏つて居た。

靜かな生活——讀書と散歩と旅行とのみ心を開いてゐた靜かな生活、それは今高い空の上になつて了つた。垣にさし透る秋の日影を見ても、もう昔のやうに心を動かさなかつた。

電燈の青白い公園の門の處で、二人はそれから幾度か別れた。晝のやうに月の明るい夜もあつた。

二十四

一夜女は容易に遣つて來なかつた。

其處の女將や女中は、いろ／＼にして電話をかけて呉れた。

『居ない譯がないんですけれど。』かう言つて女中が出たり入つたりした。席を賑かにする爲めに聘んだいつもの女達の三味線もつひに歡びを成さなかつた。

『本當に何處へ行つたんでせうね。七時頃ですって、初め行つた處はちやんと分つて居るんですけれど……いゝえお茶屋ぢやないんですよ。ぢき近所の唯の家なんですがね、其處に一時間ほど居て、それか

ら出かけた後が解らないんですよ。十一時も過ぎましたね。本當に困つて了ふよ。』如才のない女將は其處に入つて来た女中の方を向いて、『お前、宅の方へも電報をかけるやうに檢番に頼んだかえ？』

『え、さつきさう申しました。もう返事が参る頃でせう。』

『ことに寄ると、宅に行つたのかも知れないよ。あの妓は氣まぐれな子だから。』かう言つて女將は銚子を手にして見て、『これは駄目だよ、お前。熱いのを持つてお出で。』

女中は聽て爛をした徳利を運んで来た。『まだ何とも返事がないかえ……困つたねえ、家に居ると言ふから、さつきのお電話にかうしてお出になるやうに申上げたのに……本當に困つて了ふよ……も一度聞いて見ませう。』かう言つて笑ひながら女將は出て行つた。

男は悪く酔つて居た。三時間も前から押へに押へて飲んで居た酒は、決して少い量ではなかつた。疑惑も盛んに出た。行方を飽までも突詰めて見よう、といふ意地もかなり強かつた。何んなに遅くなつても、逢つて話を聞かなければ満足が出来ないやうな氣もした。男は歸るといふことを口から出さなかつた。

女將や女中の言ふことを信用すれば勿論、信用しないでも、十二時過までには何とか返事があるに相違ない。かう思つてかれは酒を飲んだ。

『宅にも歸つて居りませんさうで……。』女中がかう言つて氣の毒さうな顔をして入つて来た時には、

かれは立つて歩くことも出来ないほどに酔つて居た。

歸るにももう電車はなかつた。それにかう酔つて居ては車では危なかつた。で女將と女中とは、寄つて、たかつて、男を別室の寢床の中へつれて行つた。

男は久しい間眼を見開いて居た。平生の温順しいのに似もつかないやうに、『おい何うした？』を連呼した。

女は何うして居るか知れたものでなかつた。かう考へると、男は居ても立つても居られないやうな焦燥を心感じた。一人でこんな處にこんなにして居たツて仕方がない。かうも思つた。しかし矢つ張り女には逢ひたかつた。歸るといふ氣分には何うしてもなれない。『まア貴郎——』かう言つて女が入つて來さうに思はれて爲方がなかつた。

悶えたり、焦れたり、考へたりして過して行く一夜は、男には此上なく辛かつた。眠るとすぐ悪夢に襲はれた。

『兎に角今夜の七時までには居たんだ。行方が知れないと言つても、朝までにはそれが分らないといふことはない——』うつらうつらしてゐる中にも、かれはそれを思つて居た。

Before Dawn! いつの間にか其處に女が來て居る喜びを男は想像した。

あくる朝もかれは自分を一人さびしく寢床の上に見出した。女は遂に Before Dawn の喜びをかれに

與へなかつた。宿醉の醒めない頭はガンガン鳴つて、起上つては、すぐまた額を枕に當てた。

兩戸を明ける音だの、裏町を通る人の氣勢だの、納豆賣の聲だのを聞き乍ら、かれは長い間大きな眼を明けて天井を見て居た。階梯を昇つて来る足音は、幾度となく外れて別の室に入つて行つた。心の底では、かれはまだ女の来るのを待つて居た。

女中が入つて來ても、かれは容易に起きるやうな気分にはなれなかつた。床を離れるのが残り惜しいやうな氣もした。『昨夜は飲んだと見えて、頭が痛くつて爲方がない。』平氣を糺つて言つた男の聲には、一種空虚なところがあつた。

女中は昨夜の申譯を何彼として聞かせた。『今朝も、眼が覺めると、すぐかけたんですけども、まだ分らないですよ。本當に何うしたんですか、不思議なこともあるもんですねえ。』

『好いよ、好いよ、もう放つて置けさ。』

『でもねえ、餘り不思議ですから。』

『もう何時だえ？』

男はわざと話頭を變へた。

『九時少し前位でせう。』

『もうそんなになるかね……』少し考へるやうにして頭を押へて、『もう少しねかして置いて貰つても

好いだらう。頭が痛くつて爲方がないから。』

『え、え、御緩り。』

かう言つて女中は出て行つた。最後の望も絶えたといふやうに、男は長大息をついて、ごろりと仰向になつて天井を見詰めた。胸につかえて居る大きな塊が絶えず體を動搖させた。かうした思ひをさせる女を憎む念は心の底から強く強く起つて來た。

男が起きた時はもうかれこれ十一時に近かつた。飯を食ふやうな氣がしなかつたが、それでもかれは箸を執つた。女將や女中の辯解を聞くのももう煩さくなつた。ゆくりなくかうした事情の下に置かれて、かうした男の未練を女達に見られるのも腹立しかつた。『好いよ、好いよ、時にはさういふ事だつてあるさ、爲方がないさ。』彼はかう言つて、其處を出かけた。『ではわかりましたらすぐお知らせしますから。』上り端まで送つて出て來た女將の言葉は、かれの頭にいつまでも残つて居た。かれの重い足は行くともなくいつもの公園に入つて行つた。芙蓉は今が盛りで紅い白い花が晴れた午前の日影に明るく照されて居た。乳母車に子供を乗せた子守だの、若い綺麗な細君を伴れた洋服姿のハイカラな男だの、紫の袴を裾長に穿いた女學生だのが見事に咲いたその前を往つたり來たりして居た。公園の中の道には、西洋婦人を乗せた二頭立の馬車が威勢よく轆つて行つた。

噴水の傍らには子供達が多く集つて居た。かれは其處を通つて、樹の繁つてゐる人の居ない靜かな處

をあちこちとさがして、其處にあるベンチに腰をかけた。

二十五

ある日、女から電話が掛かつて来た。

『私、四五日留守にしても好う御座んすか。』かうその電話は言つた。『また此間のやうな行違ひがあるといけないから……好う御座んすわねえ、行つても？』

『何處へ行くんだえ？』

『彼處よ。此間話して置いたでせう。』その聲は一種の笑を含んで居た。

『何時行くんだえ？』

『よければ今夜行かうと思ふの……好いわねえ。ぢき歸つて來ますよ。』

此方の返事を聞かうともせず、『ぢや御機嫌よう。お土産を持つて來てよ。』

男が何か言はうとする中に、その電話は逸早く切れて了つた。

此間逢つた時、女は其話をして居た。『貴郎がいけないって言へば、私、よすわ……』男の顔を見て、『でも好いでせう。私、まだ彼方は見たことがないから……大丈夫よ。そんな氣で行くんぢやないのよ。』其時女は嬌笑を顔に湛へて居た。男は『好いとも好いとも、行つて來る方が好い。さう言ふ時でなくつ

ては上方見物は出來やしない。』かう言つて機嫌よく笑つた。男の身にしては、かう打明けて相談されるのが嬉しかつた。

でも、電話が掛かつて來て、いざ行くとなると、流石に心が躍らない譯に行かなかつた。今少し詳しく内容を聞きたいやうな氣もした。餘り早く切つて了つた電話も惜しかつた。

男は其客のことをかなり詳しく知つて居た。餘所ながら見たこともある。色の白い、丈の高い、意氣な、役者のやうな男。『女にはあゝした男が好いんだね、』こんなことをわざと言つて見たこともあつた。

かれは女の口から聞く其客の話と女の其客に對する態度とから、其の關係の如何なる程度にあるかを常に判断して、決して恐るべき競争者でないことを知つて居た——でも矢張安んじて女を其手に任かすことが出來なかつた。かれは二時間ほどしてから、改めて電話を女の家にかけて見た。女はもう家には居なかつた。

山に出かけた時には、男の方から女に離れて見ようとした。今度は——事情は違ふにしても——女の方から男に離れて行つた形になつた。女の行つた處には、男の本宅もあれば、女を誘惑する凡らゆる有力なものがある。かれは山に行つた時の自己の孤獨を思ひ出した。

やがてかれは東海道の長い汽車に乗つて居る女を想像する人であつた。一等室の寢臺車や、白く垂れたカーテンや、亂れた髪を直す爲に明方に女の入つて行く化粧室や、汽車の旅に疲れ切つた女の顔や、さ

うしたものが、海だの、山だの、町だのと一緒に絶えずかれの想像を往つたり來たりした。つとめて軽い心持で居ようとしても、それは駄目であつた。

『兎に角、己に相談して呉れた。』其處が彼に取つての唯一の隠れ場所であつた。苦しくなると、かれはいつも其處に通れた。はかない憐むべきかくれ場所であることを自覺しながらも、かれは其處にかくれるより他に爲方がなかつた。

かれの住んで居る都會の町、其處に女が居ない。電話をかけても居ない、訪ねて行つても居ない。さうした事實は男に受つては大きな事實であることが段々解つて來た。後にはこの事實が永久に續きはしないかとさへ疑はれた。

一日二日と經つて行つた。秋雨が蕭々と續いて降つた。かれの想像は一刻も女の傍を離れなかつた。蛇の目傘をさして、男に伴れられて東山あたりの大きな寺の石段を登つて行く女が見えたり、河に臨んだ瀟洒な料理屋の欄干に、だらしない風をして酔つた身を凭せかけて居る艶な姿が見えたりした。常に其身に與へて呉れる體質から來る快樂、それを矢張惜し氣もなく他の男に與へて居るといふことがかれには堪らなく苦しかつた。

雨の中を微かに匂つて來る木犀のかをりも、何處か女の匂ひに似て居た。一種言ふに言はれないなつかしい匂ひ、それを偲ぶために、かれは雨を侵して一枝折つて來て、藍の模様の白く出てるる一輪挿にさして、それを机の上に置いた。

うたたねなぞをして居ると、微かにそれが夢の中に匂つて來た。其處に女が居た。なつかしい匂ひを持つた女が居た。かれは苦痛と快樂との纏れ合つた思ひに心を悩ましながらかうじて日を送つて行つた。

町で見る多くの女、それも總てかれを刺戟した。藍蛇の目の傘を見てもかれの體は震へた。派手な襟、紅い綺麗な袖口、房々した髪、それが皆なかれに取つては女を思ひ出させる材料となつた。

かれはせめて女から來る繪葉書を待つて居た。『繪葉書位それはよこすわ……お土産も買つて來るわ。何かあつちから送りませうか、貴郎の好きな物?』女はかう言つて居た。しかしかれは徒らにその消息の來るのを待つ身であつた。

雨は猶續いて降つた。縁側の硝子戸から覗いて見る門の郵便箱はいつも空であつた。たまたま手紙が白く見えて居ることがあつて、雨を衝いてわざわざ行つて見ても、それは多くはつまらない用事のない手紙であつた。

一日、ある電車の停留場から藍蛇の目の傘を持つて乗つて來た女があつた。それは意氣なコートを着た髪の綺麗な十八九位の女であつた。鬢はふつくりと出て居た。何ういふ境遇の女であるかは一目見て

すぐ分つた。

其女は發車しかけた電車によろけながら、人々に見られるのを恥かしさうに顔を赤くして、やがてかれの席の筋違ひのところに来て腰をかけた。矢張眼と眼の間の遠い女であつた。かれはその女の境遇と心持と感情とをすぐ知ることが出來た。其の停留場の附近には、かれの曾つて往來した狹斜があつた。またこの先には、さうした女がよく出かけて行く小芝居があつた。

かれは絶えず其女の方を見て居た。さういふ社會に入つてからまだいくらも月日を経て居ないといふことは、恥かしさうにして居るその態度で解つた。客の席に出ても、姐さんの前を憚つたり、きまつた旦那のある若い綺麗な妓の前に小さくなつたりして、三味線も碌に弾かないといふやうな女である。かれは今までも既にさういふ女の多くを知つて居る。もし女が東京に居たなら、一顧の價值もなかつたに相違ない。しかし其日は不思議にも其女が眼についた。

下りる停留場で、ウツカリしてゐて運轉手がもう車臺を動かさうとしてゐる頃に、其女は立上つた。女が重い戸を明けた時には、車掌の笛は鳴つて電車は動き出して居た。女は恥かしさうにしてまた元の席に戻つた。悪すれのしない無邪氣なさまをかれはちつと見て居た。

女の傘には赤い漆で名が書いてあつた——友子

電話はいつも、『まだ戻つて参りません、』と言つた。四日が五日になり六日になつた。女からの消息もなかつた。

家に居る時は、男は絶えず苦しさうな長大息を吐いて居た。戸外では、町の賑かなのも、人々の楽しさうなもの、電車の通るのも何も、眼にも頭にも入らないといふやうに、首を俛れてほんやりして歩いた。顔には暗い影が歴々と見えてゐた。

人と話をしながらも、それは聞かずに、女のことをのみ思つて居て、トンチンカンな挨拶をすることなども度々あつた。大勢人の居るところでは、隅の方に小さくなつて、椅子に凭り掛つて、額に手を當てたりなどして居た。

『何うかしましたか、君？』

かういふ質問を受けたことも一度や二度ではなかつた。かれはその度毎に痛い傷痕に觸られるやうな氣がした。

一週間目の午後、小さいいつもの電話室は、またかれの姿を其中に入れた。折悪しく混線した電話は、容易にその番號をさへ出さなかつた。かれは焦れに焦れて電話器の壊れるほどベルを鳴らした。漸く出た女中は知らない女で、『いつお歸りになりますかわかりません……出先のことですから、』など、言つた。かれは念を押す爲めに、更に其處の檢番の番號をさがして、電話をかけて見た。

『遠出がつけてあります。』

かう其電話は素氣なく言つて切れた。

歸つて来て居りながら歸らぬ振をしてゐるのではないかといふ疑念は、兎に角これで晴れた。かれはそれで満足しなければならなかつた。女の手紙が今日こそは来て居る！ かう思ひながら、かれはいつも家の方に歸つて行つた。

かれは其頃かなりの金を懐ろにして居た。しかし其金も女が居なくつては何の効もなかつた。金が何んなにあつても、山ほど積んであつても、女が居なくつては駄目だ。かれは女の爲めには、其財布の中のあらゆる金を捨て、も惜しくないと思つた。生きて居る意味の對象がその女である以上、その女を失つては、かれの爲めに生存の意味の破滅と言はなければならなかつた。かれは女の爲めに家を亡ぼした人達のことなどを考へながら、電車の停留場へと歩いて行つた。

十日経つても、何等の便りを受取ることの出来なかつたかれは、もうぢつとしては居られなかつた。一週間に受けた侮辱に懲りて、今度は向うからかけて来るまで、二度と電話口の前に立つまいと決心したかれも、今はベルを鳴らさずには居られなかつた。しかし其電話も矢張失望に終つた。女はまだ歸つて居なかつた。

日が暮れてから二時間ほど経つて、かれは停留場に近い狭い賑かな通りに其の姿を見せた。かれは酔

つて居た。久しく行つたことのない家の女中は、威勢よく格子戸の開いたのを耳にして、硝子障子の中から顔を半分出して見て居たが、『まア、貴郎ですか——本當におめづらしい！』かう言いて、かれを後から押すやうにして奥の間へつれて行つた。

かれは室の中央にある茶湯臺の傍に長く身を横へた。かなり深く酔つて居るかれには、時間といふ觀念はもうなかつた。ふと、氣が附くと、いつか其處に二三人の藝妓が来て居て、何か頻りに饒舌つて居た。皆な知つて居る顔であつた。

『友子といふのが此土地に居るだらう。』不意にかれは思ひ出したやうに言つた。

夜は更けてもその一間の騒ぎは容易に止まなかつた。梧桐と松とを前にした室の障子には、女の姿や三味線の影が映つたり消えたりした。『まア賑かねえ！』女將はかう言つて入つて來た。

女達も酔つて居た。『お女將さん！』など、黄い聲を立て、裾もあらはに、其傍に踏るやうにして寄つて行くものもあつた。一人の女は、『好いわねえ、貴郎、今日は酔つても、』かう言つて、ゲイゲイ酒を飲んだ。

姐さんのあばれるのを酌達は傍に離れて見て居た。酔つた男の前には、紅だの、紫だの、白だの、色彩がチラチラした。黄い塵が眼の前を舞つて通つた。

『おい、もつと三味線を弾け。もう少し騒がうぢやないか。』かういふ男の聲につれて、三味線はまた盛んに鳴り出した。お酌達は賑かにかつほれを踊つた。

男にはこの騒ぎの静まるのが堪へられない苦痛のやうに見えた。旅へ行つた女の姿が絶えずかれの頭の中にあつた。『もつと飲んで騒がうぢやないか。』かれは徳利を押しつけるやうにして、女達の盃に酒をついだ。

『貴郎、今日は何うかしましたね!』

さつきからその状態を見て居た女中は、男の顔を見い見い言つた。こんなに騒いだり飲んだりすることとは、かれに取つてはこれまでについぞためしのなかつたことである。

廁へ行かうとして立上つた男の脚は、それでも流石にフラフラして居た。『危なう御座んすよ、』かう言ひながら、女中は後から跟いて行つた。

『貴郎何うかしてね?』

『何故?』

『でも、こんなことは珍らしいから。』

女中は押すやうにして、男を廁の中へ入れた。男が出て來た時には、其處に電車の中で見た女が立つて居た。

其女は一時間ほど前に遣つて來た。室に入るや否、『君は何處かで僕を見たことがあるだらう?』かう無遠慮に男は言つた。女はぢつと男の方を見て居たが、少し考へるやうにして、

『さうね……何處かで御目にかつたやうですけど……。』傍に姐さん達の居るのを見て、きまりが悪るさうに其處に小さくなつて坐つた。三味線も弾かなかつた。唄もうたはなかつた。『一つやつたら好いぢやないか?』かう言はれても、『駄目よ、私なんか、』かう言つて黙つて坐つて居た。

男が廁から奥の一間に戻つて來た時には、姐さん達ももう其處に居なかつた。『何だ、もう片附けるのか?』かう女中に言ふと、『でももう時間過ぎよ、貴郎。』

『あゝあゝ。』

長大息をつきながら男は横に倒れた。

やがて氣が附くと、女は傍に來て坐つて居た。

『何處でお目にかつたの? 私?』

『此間、電車を一つ乗越したぢやないか?』

『まア、厭だ。あの時見てゐらしたの? 随分お人が悪いわねえ。』かう言つて賑やかに笑つて、『私、

随分、あの時はきまりがわるかつてよ、何うしやうかと思つたわ。』

『芝居に行つたんだらう?』

『よく御存じねえ。』

夜中に眼を開いたかれの上には、五燭の電燈が暗くついて居た。かれは第一に烈しい渴を覚えて、手を延して、枕元の藥罐の水を飲んだ。

スヤスヤと心持好く眠入つて居る女を起さぬやうに、靜かに再び仰向に寝たかれの心は、會て經驗したことの無いほどに暗い佗しいものであつた。體が底の底に陥ちて行くやうにさへ思はれた。かれはちつと電燈の細い赤い線を見て居た。

赤い線は丸い電球の中に影をつくつて三筋にも四筋にもなつて見えた。あたりはしんとして居た。その靜かな夜が却つてかれの心を動搖させた。

悔むといふ念、其でも言ひ足りない。憎むといふ念、それでも言ひ足りない。はかなむといふ念、それでも言ひ盡せなかつた。複雑した種々な思ひが、彼方からも此方からも襲つて來た。

昨夜聞いた其女の生立やら、境遇やら、まだ深くさうした社會の泥に染まない無邪氣な心やら、それが浮んで來るかと思ふと、一方からは男を引着ける巧みな女の心やら、それに絡み付いてひきずられて行く男の心やらが際限なく思ひ出された、一度陥つては、手も足も抜くことの出來ない泥沼——さういふことも深く考へられた。

かと思ふと、旅に行つた女のまほろしが、其暗い佗しい心の中に明るく際立つて見えて居た。依然としてかれは其女の濃い情を忘れる事が出來ない人であつた。

あさましい人間の醜い心、醜い形、醜い姿、それが恐ろしいまでに歷々と見えるやうに思はれてかれは戰慄した。自分で入つて行つた暗い底は何處まで續いて行くか知れないやうな氣もした。

かれの前には震へた神經の世界が展けられてあつた。普通の人間は何とも思はず、平氣に快活に通つて行くライフから、かれは今底の知らない恐怖と神祕とを發見して、かうして落附いて寢ては居られないやうに思はれて來た。暗い夜の一問の中にほつり點いて居る電燈、それがかれに大きな破壊を齎らして來はしないか？ 一塊肉の如く自分の傍に横つて居る生物、それが俄然としてかれの一生にある驚くべき變化を齎らして來はしないか？……電燈は急に暗くなつたり明るくなつたりした。

水を打つたやうな夜の沈黙、其處には何の物音もない。何の動搖もない。生息して居る總てのもの、何等の音信もない。沈黙……不意に電燈はほつと消えた。

かれは俄かに氣味の悪い溫味を自分の體に覺えた。
やがてまた電燈が點いた。

サツといふ音が聞えたと思つたが、それは雨の音であるといふことがやがて解つた。『雨だ！』かうひとりで言つたかれは、もう恐ろしい夜の思ひからいくらか離れて居た。『傘も下駄もない、明日は何うし

て歸つたら好いだらう?』暫くすると、かれはこんなことを考へてゐた。

かれの冴えた頭は容易に靜まらなかつた。段々強くなつて來る雨の音に耳を傾けながら、かれは長い間下駄と傘とのことを考へて大きな眼をあいて居た。

女はスヤスヤ眠つてゐた。

二十六

旅に行つた女はやがて歸つて來た。『つい、落附いて見物して居たもんだから……え、奈良にも、宇治にも行つて見たわ。文樂には毎日のやうに行つたわ、』快活な調子で、面白かつた旅の話をして聞かせた。楽しさうな明るい女の顔を見ることは、兎に角男には嬉しかつた。男は長い間の重い壓迫から僅かに遁れ得た人のやうに晴々した顔をして居た。女の居ない間の苦悶は、男は始めは少しも顔にあらはさないやうにして居た。つとめて平氣な顔をして、客と一緒に歩いた旅の話を女から聞いて居た。

『奈良は好いわねえ。すぐ傍まで鹿が來るのねえ。可愛いものねえ。』かう言ふかと思ふと、すぐ川に臨んだ景色の好い宇治の旅舎の話をした。

流石に客については女は餘り多くを言はなかつた。むしろそれを言はないやうにして居た。しかし、その話の中には、いつもその好い男の客がついて廻つて居た。其處にも此處にもその客の姿が見えた。

それが男の心を曇らせた。

『もう別れやうか。』

突然男はかう言ひ出した。

その調子がいつものやうに輕くないので、女はぢつと男の顔を見た。

『何うしたの?』

『だって、僕だつてつまらないからな。』

女は暫く黙つて男の顔を見て居た。

やがて、

『貴郎、何うかしたのね?』

『もう、随分長く一緒に居た。何うせ別れなければならぬのだ。僕のやうなものに、いつまでも關係をつけて居ては、お前だつて、損だから。今が丁度好い機會だ。』

『何故そんなことを言ふの?』

『いや別に意味はないんだ。かう言ふ幕はもう飽きるほど打つて來たからね。何時まで經つたつて同じことだ。』

女は常に似ず眞面目な顔をして居た。男の言ふことが丸で思ひ懸けないといふやうな顔の表情をして、

黙つていつまでも男の顔を見て居た。

『それぢや私の行つたのがわるかつたのねえ？』

『何うせ、女には男の心は解りやしない。』

『ぢや、勘忍して下さい、私はいくらでも謝るわ。私はそんな氣で行つたんぢやないんですから。』かう言つて間を置いて、『今更、貴郎にそんなことを言はれては、私は何うして好いか解らなくなるわ。これほど貴郎に世話になつて置いて、そんなことが出来ますか、私に？ それや手紙をよこさなかつたのはわるかつたわ。しかし、私は安心してたのよ。貴郎が承知して下さいだかと思つて安心してたのよ。』

『しかしもう澤山だ。』

『何が澤山なの？』女は口惜しさうにして、『別れるなら、それは別れても好いわ……これでも私はいろいろ貴郎のことを考へて居たのよ。ぢや……』と男の方を見て、『何故、あの時好いッて言つたの？』男の黙つて居るのを見て、

『貴郎がそんな風に考へて居るなら、見物になど行きやしなかつたわ……京都なんぞ見たくもなかつたわ。』

男は何か謂はうとしたが、胸にのほつて来る言葉が、皆な嫉妬になつたり愚痴になつたりするので、

黙つて女の顔を見て居た。

『何かおつしやいよ。』

『だって、僕だって辛かつた。』

『だって爲方がないぢやありませんか。』女はかう言つて間を置いて、『貴郎も此頃は本當に解らなくなつてね。』

いつもならば、誰がさういふ解らない男にしたとか何とか言つて、笑つて済まして了ふのだが、今日は男は何うしてもさういふ氣分になれなかつた。かれは難かしい打ち解けない顔をして居た。

『何うせ駄目なんだ。』

暫くしてから獨り語のやうに男が言つた。

『何が駄目なの？』

かう言つたが、すぐ追ひかけて、

『何が駄目なの？ え？ 仰有いよ。私の悪いところはどんなにも謝るわ。だから仰有いよ。何が駄目なの？』

『言つたッて解りやしない。』

『解らないことはないわ。私だって、随分いろんなことを考へて居たわ。手紙だって、何うかして書

髪

いて出したいと思つただけでも、何うしても書くやうな間がなかつたのですもの。それに、私は手紙など上げなくたって、貴郎がそんなことを考へて居るとは思はなかつたわ。貴郎は何うしても私を信用して下さらないのね？」

口惜しさうな表情をして、

『別れないなら別れて上げるわ？』

かうした幕をこれまでも二人は幾度打つたか知れなかつた。其處に行つて、二人はいつも突當つた。男に取つては、それは暗い佗しい壁であつた。それから先には一步も出ることの出来ないやうな厚い厚い壁であつた。

男は黙つて居た。

繰返しても繰返しても爲方がないといふやうなことを男は考へて居た。商賣をやめさせて——いつも考へは其處まで進んで行つた。商賣をやめさせるといふことは親譲りの財産のあるかれに取つてはさう大して難かしいことではなかつたけれども、しかし商賣をやめさせての後には？ それから後は？ それから後は？

両手を後頭部に組合せて、仰向けになつて、天井を見詰めたかれには、女と自分との長い關係が、一幅の繪巻物のやうになつて見えた。

それは色彩の複雑した繪巻物であつた。晴れた日もあれば、曇つた夜もある。時雨の通つて行くところもあれば、小春日ののどかにさして居るところもある。野が見えたり、川が見えたり、賑かな町の通りが見えたりする。殆ど破れやうとして僅かにつゞいて居るところなどもある。

丁度ライフが續いて行く様に、矢張二人の繪巻物は、何處までも續いて行かなければならなかつた。氣が附くと、女は泣いて居た。

男はそれでもまだ黙つて居た。沈黙——そこから互ひの理解が生れて來た。居なかつた間の男の熱情は、やがて漲るやうに女の方へ灑がれて行つた。

濕つた女の心は、柔かな海綿のやうであつた。男の嫉妬も不満もいつかそれに吸はれて行つて了つた。反動から起つて來るやさしい氣分を男は總身に覺えた。

別れようと言ひ出した自分が却つて別れることの出来ない身であることをかれは深く自覺した。

女は長い間眼を半巾で押へて居た。男が身を起したのをわざと知らないやうな風をして居た。

やがてふいと立つて、裾を曳いたまゝ、欄干のところへ歩いて行つた。半巾を帶の間に挿んだのが此方からもそれと見えた。で、稍暫く電燈の光線の廣がつた中に女はすらりとしたその後姿を見せて居たが、やがて靜かに欄干に身を凭せかけて、組合せた手の上に額を載せた。

銀杏返しに結つた髪が、長い間暗い夜の闇の中に見えて居た。

再び身を起して、座敷に入つて來た女の眼は赤かつた。女は再び手巾を手に持つて居た。崩れるやうに其處に坐つて、

『私、別れても好いわ。』男の顔を見て、

『別れませうね?』

『ウム、別れよう、本當に別れよう。』

言葉とは正反對に、打解けた氣分が二人の間にあつた。『厭よ、あなた。』男が女の手巾を取らうとする、かう言つて女はそれを振放つた。やさしく睨んだ眼付には、男の心を搔きむしらずには置かないといふやうな一種の表情があつた。

二人はやがて以前の二人であつた。女の居ない間の苦悶——決して口には上すまいと思つた苦悶を男はいつか女に話して居た。下駄と傘とを終夜考へて居た話などもした。

『どんな女?』

それを話すと、女はすぐかう言つて聞いた。

『綺麗の女だつた。』

『幾歳位?』

『十八位だつた。』

『名は何つて言ふの?』

『好いぢやないか、そんなことは聞かんでも……』

『好いぢやありませんか、教へたつて。』かう言つて、『だから嫌ひサ、男ツて言ふものは……』

女はそれが氣になると言ふやうに、幾度となくその女の名を聞かうとした。後には、聞かずには置かないといふやうな氣勢をすら示して來た。『友子? いゝわ、今度あつちの人に逢つたら聞いて置くわ……あなたも随分ねえ、そんな真似をしておいて、それで別れるなんて、人をいぢめて。』

『何方がいぢめられたんだか解りやしない。』

『好いわ、さういふ積なら。』

かう言つて、女は男の膝のところをびしやりと打つた。

溢るゝやうな女の愛情、それが今度は男の方へと強く強く壓迫して來た。『あなた——』かう言ふ言葉は絶えず男の體を動搖させた。腕と髪と唇と、それにたはいなく打勝たれて行く佗しさを男は感じた。

『別れるなんて氣の強いことを仰有い。ちやんと知つてますよ。私から遁れることの出来るあなたですか。』かう女が言つて居るやうに男には見えた。

町を離れて、瀟洒な旅館がところどころにあつた。樹立の中から二階の欄干の見える家では、奥に瀧が落ちて居て、何だか山にでも来たやうに思はれた。崖に凭るやうにつくられてある大きな家からは、汽車の通る野を隔て、遙かに晴れた海が眺められた。

中には茶室が、つた意気な小さな板葺の家を廣い庭の彼方此方につくつて置く家などもあつた。綺麗に打水をした敷石を傳つて来る女の後齒の下駄の音は艶に聞えた。

人達はゴム輪の車を輾らせたり、自動車のかた、ましい音を立てたりして、さうした旅館へと出掛けて行つた。其處に行く路には、場末の暗い町があつたり、河に沿つた長いさびしい土手があつたりした。明るい車の灯は更けた夜の闇を破つて威勢よく光つた。

其處に居る女中達は、多くは意気な銀杏返に結つて、お召の前垂をして、翡翠の簪などを挿して居た。『いらつしやいまし——』かう言つて賑かに客を迎へた。

靜かに世をかけ離れたといふやうな室が多かつた。四疊半、六疊、三疊、茶がけの幅物の下には、その節毎の草花などがあつさりとして生けてあつた。

海の見える高臺の旅館には、屋根のある長い廊下が此方から彼方へと傳つて行くやうに出来て居た。

女中達の居る處は、丁度その真中になつてゐて、其處にかけてある電鈴は、鳴つただけで、其室の番號が知れるやうにしかけてあつた。女中は、長い廊下を通つて、階段を上つて、入口の戸の鍵を外して、そして客をそのかけ離れた室へと案内して行つた。

風呂場は何處の家でも綺麗に廣くつくられてあつた。三和土になつて居るところもあれば、贅澤な檜木で流しを張つて置くところもあつた。板の間には、白粉の匂ひのする大きな鏡臺が置かれてあつて、その鏡には絶えず綺麗な女の顔が映つた。越後者らしい三助は、湯の加減を見たり、客の脊中を流したりした。

川に臨んだ家の月の夜は丁度繪のやうであつた。對岸の家々の灯の影は、長く水に落ちてチラチラして居た。銀のやうな月の光は岸に繁つた樹立の葉を篩して、溶々と流れる水に美しく碎けて見えた。三味線の意気な音締に交つて、女の笑ふ聲が靜かに纏れて聞えた。

たぶたと寄せて来る水の音を、夜中聞いて居るといふやうな水に近い室もあつた。岸に近く潜いで行く船は、をりをり茶湯臺を真中にして、女に三味線を弾かせて、小聲で唄をうたつて居る客を樹立のしけみに見ることなどもあつた。

靜かな處、都會の響の聞えないところ、ちよつと世を離れた心持になることの出来るやうなところ、さういふ處を選んで、人々は出かけて行つた。都から二時間で行ける海岸の停車場、其處にもさうした

旅館が常に客を待つて居た。

二人はさうした旅館によく出かけて行つた。女中達はパナマの帽子を冠つた男と紺縮緬の羽織を着た女とを、いつも離れた一間へと導いた。

滅多に土地の女を聘ぶやうなこともなければ、深酒をして騒ぐやうなこともなかつた。女中が行つて見ると、いつも靜かに何か話し合つて居ることが多かつた。『姐さん、サイドを頂戴な、』女はこんなことを言つた。

秋草の見事に咲いた庭を前にして靜かに半日を過した時には、秋雨が人の心を濡すやうに蕭々と降つて居た。其時何處か遠くで歌澤か何かを爪弾で弾いてゐるのを聞いて、女は急に、『何か弾きませうか。』かう言つて三味線を取寄せて、楽しさうな顔付をして、お得意の端唄をしめやかに弾いた……さういふ時には、柔かい砂にじつと染み込んで行くやうな、一種濕ひを持つたなつかしさが二人の心に歌曲のやうになつて通つて行つた。男は胸の痛くなる様な微かな悲哀のメロヂーを其身に感ぜずには居られなかつた。

昔から傳つて來た歌曲の悲哀、其處には遺瀨ない思ひだの、あきらめてもあきらめられない心だの、言つても盡きない愚痴だの、別れて行く戀の悲みだのが小さい星のやうになつて残つて光つて居た。それ

を唄つて聞かせる女の聲は低かつた。女は時々三味線の手を止めて、『本當に歌の通りね。私、何うかすると、家に居ても三味線が弾きたくなつて、一人で弾いて居ることなどがあつてよ……不思議ねえ、矢張身につまされるんだわねえ。悲しくなつて、涙が出ることももあるわ。』かう言つて女は靜かに笑つて見せた。やさしい心と歌曲と三味線の音と、それにしめやかに降る絲のやうな雨と、それが二人の柔かな心に靜かな濃い影を織り込んで行つた。

時には二人はわざと車を捨て、場末の町を歩いて行くことなどもあつた。乾物屋、八百屋、肴屋、其處には髪を箒のやうにした上さんが、胸をはだけて、子供に乳を飲ませて居たりなどした。『あんなお上さんを見ても、何だか羨しいやうな氣がしてよ……早く人の奥様になりたい。』歩きながら、女はこんなことを言つた。町から裏通に入ると、汚い溝があつたり、大きな塀を取廻した邸があつたりした。田の向うに見える小さい工場の烟突からは、薄い煙が晴れた秋の空にくつきりと見えて、機械の響が手に取るやうに聞えて來た。

『あの時は嬉しかつた。』

男はかう言つて其時の話をした。それは春の初であつた。女はひどい風邪を惹いて長い間床に就いて居た。それが漸く治つて、久し振で逢つた時、女は無造作に髪を櫛卷に丸めて、何う見ても素人しか見えないやうな風をして居た。二人は其時もこの裏道を並んで行つた。いかにも二人は釣合つて見えた。

『かうして歩けば、あなたの奥様としか見えないわね。』女はかう言つて、笑ひながら歩いた。その時のことを男は思ひ出した。

『さう？ まだ忘れずに居るの？』

女は其時お召のコウトを著て、端折つて著た著物の裾の足に纏はるのを氣にしながら歩いて居た。軽い咳嗽が絶えず出た。『大事にしなくつてはいけないぜ。』かう男は幾度も言つた。

其路には矢張元の通りに、下駄の齒入屋があつたり駄菓子を賣る婆さんの店があつたりした。秋の午後の日が二人の前にあつた。

海の見える高臺の旅館に行つた時には、二人は三味線も弾かず遅くまで話した。何うした拍子か、女の稚い時分の話が出て、それが容易に盡きやうともしなかつた。女は話を止めて幾度か溜息をついた。

それは染々と昔が思ひ出されるやうな夜であつた。離れた遠くの室に、客が一組あるばかりで、あとはひつそりとして居た。庭にある瓦斯燈がさびしさうに闇の中に光つて見えた。

『もう夜風は寒いわね。』

かう言つて女は障子を閉めたりなどした。雨のやうに繁く聞える蟲の音を時々二人は黙つて聞いた。

男は女の心の段々此方に寄つて來るのを此頃それとなく感じた。今迄開けなかつた心の何處かがゆく

りなく不意に開けて其處から新しい離れ難ない羈絆が出來て來たやうに思はれた。それは女の話やら態度やらで解つた。

女は今まで話さなかつた話を打明けてするやうになつて來た。『此頃、お座敷に出るのが何だか厭で爲方がない。』こんなことを言つて笑つて見せた。

月が遅く出た。『まア、綺麗なお月さんが出ましたよ。』女はかう言つて縁側に立つて居た。間もなく男も起つて其處へ出て行つた。並んだ二人の影は、長い間縁側から壁に黒く映つて居た。

夜霧は白く地上に沈んで見えた。夜汽車が白い烟を立て、行くのが夜目にもそれと明かに見える。海もその向うに展けられて見えるやうにさへ思はれた。

夜中に男は廁に起きた。『私も一緒に行くわ。』かう言つて、女は枕元に置いてあつた蠟燭にマッチを摩擦つた。

廁はかなり遠かつた。階段を下りて、風呂場の傍を通つて、長い廊下をすつと向うに突當るやうな處にあつた。

派手な長繻絆を著て、裸蠟燭を持つて、素足で女は先に立つた。しんとした長い廊下、一方は崖で、一方は廣い野になつて居た。

女の持つてゐる蠟燭は絶えず夜風にチラチラと瞬いた。

一種不思議な心持に男はなつて居た。昔の物語の挿畫にでもありさうな氣がして、かれは靜かに女の後に跟いて行つた。廊下の板の音が踏む毎に微かに鳴つた。

廊下を曲つたところで、女は慌て、蠟燭の火を袖に蔽つた。夜風が俄かに何處からともなく吹いて來た。

やがて厠から出て來た男は、今度は女の爲めに代つて蠟燭を持つてやつた。蠟燭はをり／＼夜風に消えさうになつた。かれも矢張袖でそれを蔽つて居た。

『險呑ねえ。』

やがて其處から出て來た女はかう言つて、男の手から蠟燭を取つた。その灯影に映つた女の顔は際立つて白く見えた。

月はもう高くなつて居た。地上に沈んだ夜霧は依然として元のまゝであつた。二人は廊下を黙つて歩いて行つた。

階段の處で、『まア、よかつた。消えないで……』かう言つて女は蔽つた袖を蠟燭から離した。

海岸の旅館には、その以前にも一度行つたことがある。旅館の女中は、二人の顔を知つて居て、松の林の中にある一番綺麗な室へと案内した。

旅館の前にある大きなふき井からは、綺麗な水が湧き出して居た。朝早く其處で二人は戲談を言ひながら顔を洗つたことがあつた。男は其時分と今とを較べて歩いて見ないわけに行かなかつた。まだ其頃は何とも思つて居なかつた。好奇心の方が多かつた。女が居ようが居まいが、そんなとは餘り氣にならなかつた。

其時女ははしやいで唄をうたつたり三味線を弾いたりした。裾を端折つて、遠淺の海の中に入つて、さも面白さうにして貝を拾つた。今は其時とは丸で氣分が違つて居た。女は戸外に出て見ようともしなかつた。二人は一間に籠つて靜かな物語に耽つた。

『何うだ、其處等を歩いて見ようぢやないか。』

かう男から誘はれても、

『よませうよ。』

女はいつもかう言つて、さびしさうにして笑つた。其時から見ると、女は顔も體も著しく瘦せて居た。世の中の苦勞を知らない時期は既に通過した。海も、松原も、遠淺も、女にはめづらしくなかつた。

波の音は遠雷のやうに響いて來た。障子を明けると、松の大きな幹が其處に根を張つて居て、海が眩ゆく日に光つて見えた。

二人の間には、過去を追憶するといふやうな話が多かつた。初めて逢つた時の話なども出た。ゆくり

なく相逢つて、言葉を交して、それからかう長く續いて來た間柄が不思議だといふやうな話をした。女は男の青年時代の寫眞を男から貰つて持つて居た。その話などもした。『あなたが十二三の時分ね、私の産れたのは?』か言つて、女は考へ深い目付をした。

何うした加減か、女は此頃染々した話をするのが好きになつて居た。夢中で過して來た今迄の生活が今になつて振返られるといふ風にも見えた。

『随分、私ものんきだつたわねえ。』

話の前後の關係もなく、女は不意にこんなことを言つたりなどした。

午後には、日影が松の細い葉を漉して、暖かに縁側にさし込んで來た。男が散歩から歸つて來ると、女は日の光を背に浴びながら、縁側の柱に身を凭せて、喪心した人のやうに海を見て居た。

海に沿つた道には、秋の機動演習に出た兵隊達がごろごろと通つて行つた。列を離れて、井戸を其處等の家に求めて、渴いた口を釣瓶に當て、ゐる兵士などもある。松原の中には、をりをり演習の銃聲がけた、ましく鳴り響いた。

あくる朝、女中は新聞を枕元に置いて行つた。男が顔を洗つて歸つて來ると、寢卷のまゝで、縁側の處で、それをひろげて見て居た女は、不意に『まア、お師匠さんの娘が心中した……』

胸の動悸を押へることが出來ないといふやうに、走り讀みに急いで讀んで『まア、ねえ、何うしてそ

んな氣に……』

その新聞には藝者と若い男とがある海岸で心中したことが、詳しく書いてあつた。二人は女の伊達巻と扱帯とをつないでぐるぐる體を巻いて居た。男の袂から出た名刺で、『男の素生も段々知れて來た。女はある處でかなり賣れた藝者である。』

菊の家常香——年十九。

その藝者を女はかねてから知つて居た。年を取つた長唄のお師匠さんの一人娘で、長火鉢の側で時々口を利いたことなどもある。沈んだ氣質で、何方かと言へば顔はさびしい方であつた。つい半月ほど前にも逢つたと女は話した。

情死した人達は、海岸の旅館に五日ほど一緒に來て居て、其の日は散歩に出ると言つて出懸けたまゝ、歸つて來なかつた。死體を發見したのは、それから三日ほど経つてからで、其處の岩の陰で鰻を捕つて居た漁師は、波になぶられて居る女の長い髪を見て、吃驚して、それから大騒ぎになつた。

『何んなでしたらうねえ。』

男の新聞を讀み終るのを待つて、かう言つた女の顔には、心の動悸が歴々と見えて居た。

旅館から出て行く時の心持や、暗い闇の中を辿つて歩いて行く心持や、帯を結んで體に巻きつけた時

髪

の心持などがそれと明かに想像されるやうな気がした。岩陰の波に漂つた長い髪——それが二人の胸に同じやうな感動を與へた。

『お師匠さんが何んなに吃驚したでせうと思つて……』

かう女が言つたのは、それから暫く経つてからのことであつた。

情死した男の寫眞を見て、『好い男ねえ。』と言つて、やがて女は微かに笑つた。其處まで深く雙方から押詰めて行つた心、それを二人は長い間黙つて考へて居た。

情死、それは、大抵男の方から誘つて行くものだ。暫くすると二人はこんなことを話して居た。『矢張、男が弱かつたのねえ、やさしかつたのねえ、屹度。』女の眼には同情の涙が滲み出して居た。

それは尠なからず女の心を動かしたやうに見えた。何ぞと言つては、すぐ話を其方に持つて行つた。最終に女に逢つた時の話などもして聞かせた。其時、女は髪を銀杏返にして、鶉お召の羽織を着て居たが、お師匠さんに何か言はれたと見えて、眼の縁を赤くして居た。お稽古が済んで歸らうとすると、『まあ宜しいぢや御座いませんか。』と言つて、茶を淹れて菓子など出して呉れた。女の出で居るところの話などをして、三十分ほど其處に坐つて居た。歸る時にはめづらしく立つて送つて來て呉れた。『孝行で、温順しいので評判な娘さんでしたのねえ。』かう言つて考へるやうにして、『でも、羨しいわ……。好きな男と一緒に死んだんだから……。辛い思ひをして生きて居たつてつまらない。』

岩陰の浪になぶられて漂つた長い髪、それが男の心にも矢張長い間絡みついて居た。女は午飯の時に、『何んだか考へると、御飯も食べたくないわ。』など、言つて居た。

晝過には、男は矢張一人で海岸へと散歩に出かけて行つた。松の間から見える海は、今日は殊に際立つて碧く見える。其處には離れた座敷があつて、今來たらしい若い男女が、縁側に並んで楽しさうに話して居る。男はその傍を通つて、細い路を海岸へと出た。かれは行き詰つて女と情死した男のことを考へて居た。

情死の話は二人の間いつまでもついて廻つて居た。義理やら人情やらの爲めに、其處まで陥つた心持が羨ましいやうな氣もすれば、恐ろしい様な氣もする。普通の心の状態では知ることの出来ない其境に行つて見たい様な氣もした。

Strong as Death 肉體の滅びた後までも離れまいとしつかり體を結び付けた強い執著、其處には普通の人間の知ることの出来ない不可思議な世界が開けて居た。『いかに互ひに相愛したと言つても、いかに互に離れられないと云つても、其處まで行かなければ、互ひの戀の終結ではない。』男はかう思つて長い間海を見て居た。

海は波を寄せてはかへし、寄せてはかへして居た。そんなことは何うでも構はないと言つて居るやう

にも見えた。その同じ無關心な波に漂はされた藻のやうな女の長い髪、それがまたかれの頭を掠めて行つた。

かれの前には二人の戀の行先が明かに展けられて見えた。女は時々ヒステリックな心の状態に身を置くことがあつた。さうした場合に言つた言葉が、今かれの胸に生きたものとして蘇つて來た。『私は一人で死ぬのは厭よ。』女はかうしたことをよく言つた。

一時間ほどして歸つて來た男は、女がさびしさうにして縁側に立つて居るのを見た。『常香さんが眼について爲方がないのよ。』神經の昂つたやうな蒼い顔をして女はこんなことを言つて居た。

『心中する時には、男の方から言ひ出すのね、屹度。私、屹度さうだと思ふわ。男の身が詰つて、何うにも彼うにも行かなくなるんだわねえ。女は男から言はれると、いやだとは言へなくなつて死ぬ氣になるんだわねえ。女は可哀相ねえ。』

女も矢張其身を其場合に置いて居た。

『ほら、御覽なさい、まだこんなに動悸が打つて居るのよ。』かう言つて女は男の手を執つて胸に當てさせた。

心臓の鼓動は高く響いて居た。

情死したその海岸を、かねて二人が知つてゐるだけそれだけ、その印象が強く胸に來たのであつた。

その旅館も二人が會つて行つて泊つたことのある旅館である。手を取つて若い男女が闇に死に赴いた路は、二人が春の日ののどかな光を浴びながら並んで歩いて行つた路である。二人が行つた時には見晴しの好い崖の上に、如才ない婆さんの出した茶店があつて、そこで繪葉書だの貝類だのを買った。土産にする爲の鰻をも其處で購めた。

『あの崖から飛込んだのねえ、屹度。』

二人はいつまでも其話をした。

『私達も死ぬ時は、あそこで死にませうね。』暫く経つと、女はかう言つて笑つた。その時には二人はもう大分其話から離れて來て居た。

夜になつてから、二人は果物を取寄せた。朱塗の盆には五箇ほどの梨の實と鋭利な小刀とが載せてあつた。寝る前に跡を片附けに來た女中は、果物がまだ残つてゐるのを見て、氣をきかせて、そのまゝその盆を其處に置いて行かうとした。と、女は後から慌て、呼留めて、『姐さん、これ持つて行つて頂戴……刃物なんて置いて行つては厭よ。』

二十八

かれはこれまでの自分のライフの上に濃い淡い影を投げて行つた女の數々を思ひ浮べて居た。かれは

ソファの上に身を横へて居た。

長く一緒に居て、別れてから、滅多に思ひ出さないやうな女もあれば、一月ばかりの中に、互ひに心を突詰めて、思ひもかけず其處から覺めて行つたやうな女もあつた。深い關係もなく、たゞ逢つて離れて行つた女でありながら、心と心とが今だに觸れて居て、何處かで不意に邂逅したなら、すぐ燃えて行くであらうと思はれるやうなものもあつた。

旅で逢つて、二日其處に居て、それで別れて來た女は、何故かいつまでも深く頭に残つて居た。長い年月を経た今でも、すぐはつきりと眼の前に浮んで來た。肌の白い、眼付の可愛い、やさしい口の利き方をする女であつた。『あなた、もうほんちがあるだつしやる。』かう言つて微かに笑つた顔は彫りつけられたやうに常に眼の前にあつた。

其女は忘れようとしても忘れられなかつた。いつか出懸けて行つて逢はうと思つて居る中に、年月が経つて行つた。今でもかれは、何うかすると、手蔓を求めて、其處から其處へと探して行つて逢つて見たいと思つて居る。

烈しい戀の爲方をする女もあつた。其女とはよく喧嘩をした。始めはその口説の面白いのに引かれて居たが、後にはそれが煩はしくなつて來た。あれつきりにならうとは思ひもかけないやうな別れ方をして別れて來た。不思議なのは、其後電話もかけて來なければ、手紙も寄越さないことだ。更に不思議なのは

は女がかれの常に往來する處にいまだに出て居て、時々かれと顔を合せては平氣で笑つて居た。

ある女は長い間心を押へるやうに押へるやうにとして居た。何にも言はない方ではあるが、おとなしい、しんみりした、よく涙を滴す女であつた。讀んだ小説の人物を實際にある人の様にして話した。夢の話をするのが好きで、自分が金魚になつて泳いで居た話などをして聞かせた。その女は男の方の戀の覺める時分になつて、始めて漲るやうな心を注いで來た。

後には、其女はよく酒を飲んだ。黙つて蒼い顔をして、さす盃を幾杯でも見事に受けて飲んだ。裾を引いたまゝ、足袋跣足で庭の敷石の上などを平氣で歩いた。

かれはいつの間にか今の女のことを考へて居た。此間逢つた時『女にも忘れられないやうな男が幾人もあるだらうねえ。丁度珠數の球のやうなものだねえ。小さい球を繋いで居る親玉のやうなのが五つや六つはあるだらう?』こんなことをつ言たことをかれは思ひ出して居た。女は其時笑つて種々と男のことを話して聞かせた。

ライフの中の無数の男と女との關係が不思議なやうにかれには思はれて來た。何處まで行つて盡きるのか、それが解らなかつた。逢へば戀人、離れ、ば路傍の人、さういふところがあるかと思へば、切つても切つても切れずに、終には身を亡して了ふやうな烈しい強いところもあつた。それは肉體まで行かなければ解釋の出來ないやうなものであつた。

不思議な人生——かれはぢつと空間を見詰めて居た。

二十九

女は此頃何うかして居た。

検番から掛つて来るお座敷も、少し気分が悪いからとか、用事がありますからとか言つて断ることが多かつた。夜遅く二階で本など読んで居ると、隣の若い藝者達が下駄を鳴らして元氣よく出かけて行くのが手に取るやうに聞えた。

『何うしたの?』

其處等で顔を見合せる友達は、皆なかう言つて不思議にした。

『本當に何うしたの? 此頃ちつとも顔を見せないぢやありませんか。……それやあなたなんぞ商賣しなくつても好いんでせうけれど……』かねて行きつけて居る待合の女中は、軽い調子で女の顔を見い見と言つた。

昨年あたりは毎日四座敷や五座敷はかゝしたことがなかつた。春のお約束の数なども一生懸命に彼方此方と頼み廻つて、検番にかけてある札の順番を競つて見たことなどもある。何んな陰氣なお座敷にも、元氣の好い明るい顔をして居るのが土地の評判になつて『あの妓は如才ない、』と言はれて居た。

日頃最辰にして呉れるある女將からは『何したのさ? お前さん。稼業だけは怠けずにしなくつてはいけませんよ。』かう言われたのももう度々であつた。其度毎に『本當にお上さん、今月からは稼ぐわ……私だつて困るんですけれど……何だか気分が悪かつたり、いろんなことがあるんですもの。』しかしその今月からが二月にも三月にもなつても、女は矢張負け勝に日を送つて居た。

お稽古にも行つたり行かなかつたりして居た。折角始めた常盤津の師匠の稽古にも一月ほど行つて止して了つた。かと思ふと、これから一生懸命になつて、東京中のあらゆる名高い師匠の許に通つて専心藝を磨かうかなど、思ふともあつた。淘宮の上手なお婆さんが赤坂にゐるのを、わざわざ尋ねて行つて、その身の上を見て貰つたことなどもあつた。そのお婆さんは、小綺麗な身装をして、髪を小さい丸髷にして居た。あなたは心配するやうなことは御座いません。此十二月になれば、自然に運が向いて來ます。かう言ふかと思ふと、『矢張あなたは一生定つた夫を持つことが出來ません、』など、言つた。

活動寫眞に入つて、夜を無駄に費して了ふことも尠くなかつた。新派劇を見て、身につまされて、家に歸つてまでも涙が出て爲方がないこともあつた。電車に乗つて、一人で遠くの寄席へも行つた。

看板借になつて居るので、家では別に何も言はなかつたが、それもで、何うかすると『そんなに遊んで居て損ぢやありませんか。今日も彼方此方から掛つて來てよ。』姐さんは笑ひながら言つた。

何も彼もつまらないといふやうな氣が絶えずして居た。稼業の厭なことにも新しく目が覺めて來た。

夜遅くかゝつて来たお座敷に平氣で出て行つた自分が不思議のやうにも考へられた。

夜、蒲團の中で、男の心など、いふことを考へて居る時は、ことにさびしかった。信用の出来ない頼りにならないことばかりで、甘い言葉、優しい言葉、堅く誓つた言葉、それが皆な氷のやうに溶けて流れて、跡も形もなくなつて行くやうなことが多い。若い頃から評判で、ダイアの三つ四つも持つて居た姐さんさへあの人ならばと心を注いで従いて行つた男の無情を今日もつくづく滴して居たことなどを思ひ出した。

今までに遣つて来たことも繰返して考へられた。普通の人が聞いたら吃驚するやうなことを平氣でやつて来た。『だつて稼業だから爲方がないわ。』心の咎めるやうなことに邂逅すと、いつでもかう自分で辯護した。

いつの間に覺えるともなく、男に對する手管といふやうなものを覺えて居た。男はぢき熱して来た。其時女はわざと離れたやうな形をして見せた。すると男は財産も名譽も生命も惜しくないといふやうに打込んで來るのが例だ。

女の知つて居るある姐さんは『まだお前さん、そんなことを考へてゐるのかねえ。……そんなことではまだ駄目よ。』かう言つていろいろなことを教へて呉れた。

引張れるものは引張れる處まで引張らなければいけない。別れるのは何でもない。別れる時には、悲し

い顔をしてさへ居ればそれで好いものだ。かう姐さんは言つた。

女は別れて来た人達のことを時々頭に描いて見た。さういふ人達の記念は、指環だの着物だのになつて残つて居た。それでも女は手紙だけは丁寧に保存して取つて置いた。ある日、箆笥を開けると、其處から種々な人の種々な手紙が出て來た。

幾束かの手紙は別々にわけて絹の紐で縛つてあつた。いつもならば心にも留めないで藏つて了ふのが、常であつたが、其日は何うした加減か、心がそつちの方に向いて居た。女は絹の紐を解いてそれをひろけて見た。

其處にはいろいろな心が燃えたり悶えたりして居た。もう一度是非逢つて呉れと言ふのを、何うしても逢はずに別れた男の手紙が一番多かつた。染々するやうな文句がその中に書いてあつた。こんなに烈しく男から思はれたことがあるかと思つて、女は暫しはそれに讀耽つた。

喧嘩して別れた男の手紙は、細い綺麗な手跡で書いてあつた。この男には女もかなり心を打込んで居た。無理算段をして逢つたことも一度や二度ではなかつた。しかし今考へて見ると、惚れ合つて居たといふよりも、寧ろあたりの騒ぎが大きかつたので、いくらかは見得もあつて、惚れなければならぬやうな事になつて行つたのであつた。その證據には、たとへ喧嘩をして別れたとはいへ、涙一つこぼさず、一月も経つともう其の男のことをはすつかり忘れて居た。そればかりではなかつた。半年ほど経つ

てから、その男は何處かの綺麗な藝者をつれて、女の出てる隣の座敷に来て騒いで居た。しかし女は別に何とも思はなかつた。

女はふと思ひついて、多くの手紙の中を彼方此方とさがし出した。其處には女の爲めに忘れられない手紙が一通ある筈である。何うしたのか、それが見當らない。女は抽斗を残らず抜いて見た。その手紙は手紙と手紙との間にもみくちやになつて挟つて居た。

讀んで居る中、女の眼には涙が滲み出して來た。町の裏通りの綺麗な二階屋に女は其時圍はれて居た。裏には畠を隔て、汽車の線路が見えて居た。その田舎の富豪の若旦那は、其處によく遣つて來た。女中が一人つけてあるばかりで、さびしい退屈な日が多かつた。意氣な中折帽を冠つて、インバネスを着てズツと裏から入つて來た時などは、何とも言へず嬉しかつた。

結びなづけと結婚しなければならなくなつて、其の若旦那とは、泣きの涙で別れて來た。女は其時分のことを考へて茫然して居た。

手紙を彼方此方と讀返して居たが、聽て女は丁寧にそれを元のやうに藏つて抽斗を閉めて長大息をついた。自分ながらうかうかと通つて來た。惚れたとか何とか言つても、自分の方から熱情を注いで行つたやうなことは今までにも餘りなかつた。男の情を手繰り寄せて、頂上まで昇らせると、其處からいつ

も熱が覺めて行つた。早く解決をつけたい時には、わざと烈しい情を寄せて見ることもあつた。長く引張らうと思ふ男には、つとめて情を惜しむやうに、心を見せぬやうにした。

女は自分の住んで居る社會の狀態やら物語やらに熟して居た。榮えた老舗が一朝にして滅びて行つたのをも見た。若い男が病を得て死んで行くのをも見た。ある女に打込んだ男は、詐欺取財といふ罪名の許に、餓に迫る妻子を置いて、暗い處に行くやうな末路に邂逅した。ある男は、會社の金を多分に費ひ込んで、その穴を埋めたいばかりに、經驗もない相場に手を出して、終には何うにも彼うにもならなくなつて、母親と妻とに遺書を残して、姿を何處へか躲して了つた。其男に關係した女は交情の好い友達だつたので、女はよく其席に取巻に聘ばれて行つた。唄の上手な、洒落をよく言ふ、頭の禿けた面白い人であつた。金を湯水のやうに遣つて、五人も六人も藝者を聘んで夜もすがら騒いだ。それと知れた時には、誰も彼も吃驚しないものはなかつた。遺書を手にして、其女は茫然として居た。二三日して刑事が遣つて來て調べたり何かした。『本當にあの人は死んだかも知れないわ……一番後に逢つた時にも變なことを言ふと思つたのよ』其女はかう言つて、毎朝出て來る新聞の三面記事を注意して讀んで居た。

女の方にもさうした悲劇は少くなかつた。肺病を客から受けて海岸に二月ほど行つて、間もなく死んで了つたものもあつた。まだ十六にもならないお酌さんで、眼がつぶれるやうな烈しい病氣に罹つて居るのを見た時には、女も思はずツツとした。思ひのまゝにならない話が此處にもあつた。男に打込んで、

派手な真似をした女は、ちき其土地に居られなくなつて住替へをした。

女は依然として稼業を怠けて居た。何ぞと言つては、用事をつけて、父母の家に出かけて行つた。丸髻に結つて居ることが多かつた。それを男は不思議にして、『何うしたんだえ、此頃は？』かう聞かれることも度々であつた。

『だつて、つくづくお座敷に行くのが厭なんですもの……、此間もある處に行つてゐたら、不意にいやになつて、何うしてもゐるのが厭になつて、お上さんに小言を言はれても何でも歸つて来て了つたのよ。それに何だか此ごろはイヤに気分がふさぐのよ。』かう言つて、女は夜一夜眠られずに考へて居たことなどを話した。かうした社會に居るのがつくづく厭になつたことやら、手紙を出して昔のことを考へたことやら、意味もなしに悲しくなることやら、いろいろなことを打明けて、

『もう、私、素人になるの。』

こんなことを言つては笑つた。手がらもわざとじみな目立たないやうなを選び、髻も餘り大きくないやうなを買つて来て、成だけ素人に見えるやうな髪結び方をした。『よく似合ふでせう？ これなら、外を歩いて、誰も藝者だと思ふ人はいわねえ。』かう言つて、低く結つた丸髻を男に見せた。

三十

ある日こんな話をした。

『私、素人になつても好い？』

『誰れかして呉れる人があるのかえ。』

『それはないこともないわ。』

『ぢや、して貰つたら好いぢやないか。』

男がかう言ふと、女は笑を眼元に湛へて、ちつと男の顔を見て、

『本當？』

男が軽く點頭くを見て、

『本當に好いの？』

繰返して言つて、『ぢやさうしてよ。本當になつてよ。』

ある時はまた次のやうなことも言つた。

『貴郎、本當に私のことを思つて居て下さるわねえ。』

『何うだか解らない。』

髪

『さう、貴郎には解らないの？……でも私が貴郎を思つてゐることは確かね。それだけは確かだわねえ。』

『それも何うだか解らない。』

『でも、私はちやんと思つて居ますもの……さう思つて言ふ本人が言ふんだからたしかだわ。』かう言つて、『思つて居るやうには貴郎には見えなくつて？』

『見えることもあるが、見えないこともあるねえ。』

『さう？』

考へるやうな顔色をして、『ぢや、私、素人になつて何處かに行つて了つても好くつて？……私、もう、稼業をしてゐるのがつくづく厭なんですもの。』

『行かれちや困るけれど、強つて行くと云ふのなら、爲方がないねえ。いくら思つてゐたつて僕の體ぢやないんだから。』

『さう、貴郎の體ぢやなくつて？』

急に調子を高くして、『いくら思つたつて、爲方がないわねえ。奥さんになれるんぢやなし……。』かう言つて女は突伏して了つた。

それは何うしてか話の調子が裏へ裏へと外れて行くやうな日であつた。後には女は蒼い眞面目な顔を

して黙つて居た。

女の態度に何かかくれた意味があるといふことは男にも知れて居た。『そんなに思はせ振をしないで好いぢやないか。』男はつとめて心を平らかにして、絶えず笑顔を見せて、其處から女の祕密を聞かうとした。

『そんな……祕密なんて言ふことはありやしないわ。今更、貴郎にそんなことをする女ぢやないけれど……』

『ぢや、隠さずに、本當の心を話して聞かせたつて好いぢやないか。』

『え、話してよ。』少し間を置いて、『でも、今日は厭……』

『何故だえ？』

『でも、何故か今日は日がわるいやうな氣がしますもの……また其中話すわ……そんなに無理に話せつて言つたつて、女にはそれは出來ないわ。女ツて言ふものは、心の狭いものよ。貴郎。』

こんなことを言ふかと思ふと、『私、黙つて何處かに行つて了つたら、貴郎屹度怒るわねえ。』など、言つた。ある日逢つた時には、『貴郎といふ人に何故私は逢つたんでせうねえ。貴郎さへ居なければ好いに……。貴郎が居るのが口惜しい。』

かう言つて、男の膝に顔を當てたりした。

『私の幸福になることなら貴郎は喜んで聞いて下さるつて言つたわね……今でもさう。』
『今ぢやもうそんなことは誓はない。』

『さう？ ぢや矢張うそだつたのねえ。』

弾き懸けた三味線をやめて、思ひ出したやうにして、女はこんなことを言つた。男は女の顔を見て居た。

『ぢや……あの……』

言ひかけて、男の顔を見て、

『言はうと思つたけど……よすわ。あんな顔をして居るんだもの。』

『ぢや何うすれば好いんだ。』

『本當に聞いて下さらないんだもの。』

『聞いてるよ。』

『本當？』

『本當に聞いてるぢやないか。』

女は躊躇したやうな風を見せて、『でも、怒るから厭よ。』

『怒るか怒らないか、言つて見ないぢや解らない。』

『なら、よすわ……』

かう言つて、女はまた三味線を弾き出した。流るゝやうな滑かな調子は、靜かな夜に際立つて冴えて聞えた。

『私、遠くに行かうと思ふの。』

暫くしてから女は思切つたといふやうに。

『でも、まだきめた譯ぢやないのよ。貴郎が可いつて言へば、行かうかしらとも思つたのよ。』

女はかう附加へて言つた。

男にも段々其話がわかつて來た。いろいろたぐり寄せて聞いた話の中には、此間つれられて行つた男が居た。

『貴郎、怒つて？』

男が黙つて酒を飲んで居るのを見て、女は心配さうに言つた。

『大丈夫だよ。そんなことで怒りやしないよ。』

不思議にも其夜は男には楽しさうに面白さうに見えた。三味線が頻りに鳴つた。女の軽い聲と男の重い聲とが雜り合つて四邊に聞えた。女中はいつになく賑かなのを見て、『まアめづらしいわねえ。何うかしたのねえ。今夜は？』など、言つた。

男と女と伴れ立つて其處を出たのは、もう餘程遅かつた。二人ともかなり酔つて居た。町ではもう戸を閉めて居た。

『馬鹿な奴？』

男はこの言葉を既に幾度となく女に浴せかけた。氣が附くと、二人はいつか樹の影の深く繁つた處に來て居た。電燈が明るく葉裏を透して見せた。

其處にはベンチがあつた。

女は苦しうにして居た。酒の酔に堪へないと言ふやうに、頭を垂れて、手を男の膝に乗せて居た。

『おい何うした？ 馬鹿な奴だなア。これでも男の心が解らないのか。』

かう言つて男はまた女の手を堅く握り緊めた。女はぐたりとして居た。

其夜、女の話聞いて居る中、男は絶えず一種の鼓動を胸に覺えた。しかしそれはいつもの烈しい強いものではなかつた。寧ろ靜かに小刻みに押寄せて來るやうなものであつた。哀愁もそれにつれて起つた。話の中の男の影は、女が言葉を重ねてゆく中に、段々濃く明かに其姿を見せて來た。

日光の山の中に一人で出かけて行つた時のことが思ひ出された。其時、それと知つて悶えた心持は忘れられなかつた。あの時出した端書、それも頭に上つて來た。

『あの端書を出さなければよかつた。』

女の話聞いてゐる中にこんな考へが幾度となく男の頭を通つて行つた。

男は靜かに女の話聞いて居た。時々道理らしく點頭いて見せた。

『ぢや別れようかね。』

心を抑へたやうな眞面目な調子で、暫くしてから男が言つた。

女は頭を振つて、

『その位なら、私、こんなに苦勞なんかしないわ。』

複雑した女の心は容易に言葉で言ひ現はすことが出來ないやうに見えた。女はいろいろにしてその心持を男に傳へやうとした。しかしその言葉は多くはツボにはまらずに、他の方に外れて行つた。女はぢれつたさうに、『兎に角別れるなんて、そんなことはイヤですから。』

『ぢや何うすれば好いんだ？』

『まア好いのよ。そんなに私を醋めないで置いて下さい。もう、そんな話よしませうよ、私、よすわ。』
かう言つて、女は酒をグイグイ飲んだ。男も一緒に杯を重ねた。男は其時、男に惚れることの出來ない女の可哀相なことを話して聞かせた。

『何故、惚れた男に心から惚れることが出來ないんだ。戀しいと思つた男には、ドシドシ惚れて行つ

たら好いぢやないか。顧慮せずに心をそれに注いで行つたら好いぢやないか。惚れた男に、心から思ひを注ぐことの出来ないのは、男が本當に解つて居ないからだ。さういふ女は一生惚れたやうな心持がして居ても、心から男に惚れたんぢやないんだ。』

『それは本當よ。』

かう言つた女の眼からは涙が溢れ出して居た。

『それは本當よ。』女は繰返して言つて、『私などでもよく解るわ。男の情はあとから解つて来るわ……しかし解つた時はいつでももう遅いのよ。解つてから、追ひかけて行つたッてそれは駄目よ。』

『それは無論さ。』

『けどもまたかういふやうな處もあるわねえ。男は女が惚れたやうな素振を見せると、すぐお高くなつて、もうこの女は自分のものだつて言ふやうな気分になるわね。それが見えると、私はすぐ厭になつて了ふわ。さういふ具合で、中途からイヤになつた人はいくらもあるわ。私の性分でねえ、屹度……』

二人はかうしたことを其時盡きずに話した。不思議にも言葉と言葉とに熱があつた。二人は更に一つの戀の障壁を越えたやうな氣がした。『それでも男の心は解らないか。』それを男は酔つて幾度か繰返した。

三十一

とてもかうした女からまことの戀を望むことは出来ない。かう思つてかれは山の中に出懸けた。其處でかれは女を忘れる方法を講じようとした。しかし今では其時のやうな激した單純な心持はもう起らなかつた。二人の關係は其時とは著しく違つて居た。氣分も違つて居た。

自分ながら不思議に思はれるほど靜かな落附いた氣分が續いた。かれは女の悶えて居るのを知つて居た。また自分から容易に離れられなくなつて居るのをも知つて居た。かれはいつの間にか深い束縛の出來たのを顧るやうな人であつた。

女の話——其處からかれは女の細かい心持を汲み取つた。女の日毎に送つて居る生活、女と女の兩親との關係、幼い頃から今までに至る間の物語、其處からかれは女の總ての氣分と性質とを判斷するに十分な材料を得て居た。

女の周圍に居る人々の話や生活や情僞や、さういふものからも段々女が詳しく知れて來た。初めは疑惑と不安の間に包まれて居た女の影も、今でははつきりと鮮かに見え出して來た。

時には自分の愛して居る女を多くの男の中に手放しては置けないやうな氣がしななくてもなかつた。肉體の保護といふことを考へる時は殊にそれが強かつた。しかしそれは以前感じたやうな、女に逢はれな

不安とか疑惑とか言ふやうなものとは全く違つて居た。

『離せるなら離して見ろ。』

こんなことをも考へた。

『長い間に築き上げた心、それを一朝にして破られて堪るものか。肉體は？ 肉體は？ それはいくつにもわけることが出来るかも知れないが、肉體に伴つた快樂の度数は到底わけることの出来ないものではないか。』時にはそんな處まで問題を持つて行つた。

割合に落附いた靜かな心持で居られることを男は喜んだ。

男はつめとて此方から出懸けて行かないやうな方針を取つて居た。

わざと避けるやうにして居た。

いつも電話を借りる建物の前をかれは一日おきに通つた。流石に其處を通る時には、心が動かない譯にゆかなかつた。大きな建物からは、扉を排して人が出たり入つたりした。肥つた髯の生えた紳士が其處から出て来て待たせて置いたゴム輪の車に乗つて威勢よく出かけて行つたことなどもあつた。

赤斑の可愛い小犬が居た。何處かその近所で飼つて居るらしかつた。いつも其處等をブラブラして居た。大きな犬の通るのを遠く離れて吠えて居たりなどした。朝は日の當つた扉の處に躊躇んで、茶色がかつた可愛い眼で此方を見て居た。雨がその垂れた尾に降つて居る時などもあつた。

男にはこの小犬が何となくなつかしいものゝやうに思はれた。かれは其處に來ると、いつもあたりを見廻した。その居ない時は何となく怪しい辛い心持がした。丁度女でも居ない時のやうに。

三十二

私、此頃加減が悪くつて、あちらでふせつて居たんですけど、他人の處では、十分保養が出来ませんし、それに不便ですから、五六日こつちの家に戻つて休んで居ますの、お目にかゝりたいと思つて居ましたけれど、こんな處には來て下さらないだらうと思つて、今までお手紙も上げないで居たんですの。だけど、今日といふ今日は、寢て居て、しみじみお顔が見たくなつて、何だかさむしくなつて爲方ありませんから、此の手紙を書きました。來て下さいますわねえ。遠方ですけども――

――月――日

――様

封筒の裏には、かねて聞いて居る女の實家の番地が書いてあつた。夜遅く近所のポストに入れに行つたといふことは鮮かな消印の字で知れた。

遠くから來た男が歸つて行つてから、かれは二度ほどいつもの室で女に逢つた。女は『もう遠くに行くのはよしたわ。』などと言つて居た。其時も何處かやつれた元氣のない顔をして居た。

彼はこれまでに女の實家に行つて見たことはなかつた。それはいろいろな話を聞いて知つては居た。其處には人の好い父さんとしつかりした母さんともう徐々年頃にならうとする可愛い妹が居て、父さんが其妹を生命の次ぎ位に可愛がつて居るといふことなども知つて居た。女はよく其人達の話をして聞かせた。父さんが盆栽道樂で、僅かな月給を大方それにつかつて了ふ話などは女から度々聞いて居た。

しかし女から今まで實家に來いなど、言はれたことはついぞなかつた。

男は不思議な氣がした。普通の家庭に置いて見るその女、それを男は想像した。それに、今まで全く別な世界に住んで居て、今女と別れて了へば、永久に知らない人で濟んで了ふ人達に逢ふのも不思議な氣がした。それに好奇心もあつた。

その日は生憎に忙しかつた。彼が仕事を濟して其處へ出掛けたのはもうかれこれ三時過ぎであつた。秋晴の好い日で、蒼い空が洋館の並んだ賑やかな綺麗な町に展げられて居た。アスハルトの敷きつめた人道には柳の枯葉がバラバラと日を受けて散つて居た。

町の中頃に大きな勸工場がある。やがて其處に入つたかれは西洋雜貨商の肆を見い見い歩いて行つた。女の妹の爲めに土産を買つて行かうと思立つた。かれは二階から下に下りようとする處の肆の前に足を停めて、幾筋となく其處に長く下けてあるリボンを見て居た。小さい鬚に結つた愛嬌のある其處の上さへは、やがて傍に寄つて來て、一層幅の廣い流行のリボンの卷いたのを幾箇となく出して客に見せた。

一番幅の廣い色の派手なりボンを買つて、ボール箱の中に入れて貰つて、それをかれは風呂敷に包んだ。

それから町へ出て、見舞の菓子なども買つた。

それは遠い處であつた。電車を幾度も乗り替へて行かなければならないやうな處であつた。電車を下りてからは、汚ない暗い町を通つたり、屋敷町のやうなところを通つて行つたりした。ある塀の角に、白い地に黒くその町の名の書いてある札を見た時には、かれはもうかなり疲れて居た。

番地を追つて、彼は其處等を行つたり來たりした。庭の松が板塀の外に出て居るやうな處もあつた。細い通りには、建具屋の仕事場があつて、其處では若い職人が二三人せつせと板を削つて居た。番地はやがてかれを奥深い巷路へと導いて行つた。

その家の前に行つて、かれは暫し立留つた。

格子戸を開けると、鈴がチリチリンと鳴つた。ハイと挨拶した聲は聞馴れた女の聲であつた。

『まア、貴郎。』

障子を開けて出て來た女は、吃驚したやうに聲を立て、長火鉢の置いてある居間の方を鳥渡見たが、よく來て下すつたわねえ。……こんなに早く來て下さるとは思ひもかけなかつたわ。さア、何うぞ。汚い

處よ。』

八疊の間には、床が敷いてあつて、友禪の赤い搔卷の襟當が室の中に際立つた派手に見えて居た。六疊の居間には、肥つた品の好い四十恰好の女が居た。

やがて静かに立つて來たその女は、座蒲團を男に勧めてから、丁寧な初對面の挨拶をした。

『母さんよ、私の……』

傍から女が引合せた。

『いろ／＼これがお世話になりました、何かからお禮を申してよろしいのか知れませんが……』やさしい静かなしかし何處かにしつかりした處のある調子で母親は話し出した。

『まア、ねえ、これがさぞ我儘を申すことでせうと思ひまして……』かう言つて間を置いて、『それにいつも彼方此方と面白い處を見せて頂いたり何かして、それは平生喜んで居るんで御座いますよ。』

その言葉は想像して居たよりも柔かく快く男の耳に聞えた。

母親が向うに立つて行つた後で、

『若い母さんだね。』

かう男が言ふと、

『だつてまだそんなに年を取つて居ないんですもの、四十よ、まだ、』かう言ひかけて女は笑つて、『私

にすこしも似てないでせう？』

『さうだねえ、さう言はれ、ば似てないね。』

『私、父さん似ですもの。』

すぐ話頭を替へて、

『今も貴郎のこと考へて居たのよ……手紙が今朝著いて、今日、明日は來て下さるだらうと思つて居たわ。』

何處となく寝れの見える女は、銘仙の袷に黒縞子の帯をひっかけに結んで居たが、烏渡引つかけた黒縮緬の羽織は、一層その顔を青白く病人らしく見せた。

それでも襟は派手なのをかけて居た。

『そんなに起きて居て好いのかえ？』

『今まで臥て居たんですけれど、餘り氣がクサク／＼するから、起きて母さんと話でもしようとして居た處よ。』髪に觸つて見て、『こんなに壞れて了つて、本當に氣持がわるい。いつそ解かうかしら？』

さも煩ささうに、垂れて來る鬢の毛を指でかき上げた。

枕元はすぐ縁側になつてゐて、其處には菊の見事に咲いた大きな鉢が置いてあつた。床の傍には、厚い本が讀みかけたまゝになつて伏せてあつた。

男はそれを翻して見た。『己が罪』としてあつた。

『今時分こんな本を讀んでゐるの？』

『いゝえ、前にも讀んだことがあるんですけど……家にあつたからまた讀んで見たのよ。可哀さうね、矢張……』

男は笑つて居た。

室にある箆笥だの、机だの、額だのが段々男の眼に入つて來た。厠の方の縁側には、まだ夕日が微かにさし残つてゐた。其處には楓や柘榴や樺や松などの盆栽が一杯に並べられてあつた。

暫く経つた後には、親しみ易い氣の置けないやうな空氣の中に男は居た。『まアお宜しいでせう、別にお構ひも出來ませんから、此方にいらつしやいませ。』かういふ風に母親からも女からも言はれて、無理に居間の長火鉢の側に連れて行かれた。

綺麗に色の出た鐵瓶や五徳や火箸や藥罐などの置いてあるその側で、女は母親を扶けて、炭を繼いだり水をさしたりした。茶箆笥の上には、小さな水天宮のお宮が祀つてあつて、その傍には茶道具がゴタゴタ置いてあつた。それを女は白い腕を伸ばして取つた。

家庭で見る女の態度は、尠くとも男にはめづらしかつた。口の利きようにも甘えるやうな處がなく、

わさとりらしい處がなく總べてが隠すところなく顯はれて居た。母親の前では、矢張普通の娘に過ぎなかつた。

我儘な打解けた調子で、睦しさうに母親と話して居るのが男の耳には殊に快く聞き取られた。『昨夜は床の中で遅くまで母さんと二人目を覺まして居て、いろんな話をしてよ。私の生れた時の話なんか出たんですもの……もう遅いからお寢ッて母さんが言つても、聞かないで、私が起して居たわねえ。』こんなことを女は言つて笑つた。

まだ茶も淹れない中に、役所から、父親は歸つて來た。話をするにも顔を赤くするやうな人で、成ほど老舗の若旦那であつたらしい面影が、まだ其處等に残つて居た。娘に對する言葉にも、絶えず他人に物を言つてゐるやうなやさしい處がある。やがて立上つて、『ぢや、私は御免を蒙つてお湯に行つて來ますから、』かう言つて出掛けようとするのを母親は追ひかけて言つて、何か御馳走の註文を頼んだ。

『それから父さん、あそこに行つて鰻を頼んで來て下さいよ。』

娘からかう言はれて、

『よし、よし、すぐ持つて來るやうに行つて來る。』

せかせかとして出かけて行つた。

妹といふのは、姉に比べては丸で別な子かと思はれるやうな少女であつた。黙つて上り端から入つて

ソット座敷の方へと行つた。纏て袴を脱ぐ氣勢がした。母親が立つて行つて、何か二言三言小聲で話をしてゐるが、容易に此方に顔を出さうともしなかつた。母親との低い話聲は暫くの間障子のかげで聞えてゐた。

『何してるの？ 此方にお出な、好いお土産を戴いてよ。それは、本當にお前さんの大好きなものよ。』かう言はれて、顔を赧くして出て來たのは、十四位の脊の大きい可愛い少女であつた。髪をお下けにして白いリボンをかけて居た。

丁寧にお辭儀をした。

『ほら、御覽、こんな好いのよ。』姉は其處にあつたボール箱の蓋を明けて見せて、

『お禮を仰しやらないと、上げませんよ。』

『何うも有難う。』

また丁寧にお辭儀をした。

若い娘には、何よりもかうしたものがうれいといふやうに見えた。室の隅の方に小さくなつて坐つて、頻りにその箱をあけては見て居た。『好いでせう、氣に入つたでせう。やたらにかけちや駄目よ。』かう言つて姉はまたそれを手に取つて見て、『色氣が好いわねえ。お前には丁度好い。』母親が傍にあつた菓子を取つてやると、

『此子は學校から歸つて來ると、まだおやつをねだるのよ、貴郎。』
女はこんなことを傍から言つた。妹は顔を赧くして立つて行つた。

茶湯臺には種々なものが載せられた。

『此處等には何うせお口に合ふやうなものは御座いせんから。』母親は爛の出來た徳利を銅壺から抜いた。

誰も酒の相手をするやうな者はなかつた。『私はお酒の匂ひを嗅いだゞけでも酔つて了ふんですよ。』

かう母親は眉を寄せて言つた。湯から歸つて來た父親は、煙草盆を前に置いて、脊を丸くして、頻りに煙草をふかして居た。

『父さんも、そりやお酒は駄目な方よ。……甘い方には眼のない方だけ……父さん、これ上げませうか。』娘は笑ひながら、傍にあつた唐饅頭の菓子鉢を父親の方に押遣つた。父親は莞爾して居た。

遠い昔の話が出た。女の稚い時の話等を母親は飽きずに話した。『父さん、寫眞を出して御覽なさいよ。』寫眞の箱の中には、女が赤坊の時のもの、五歳位のもの、十二三位の時だの、寫眞が幾枚もあつた。

母親が派手なつくりをして、父親と一緒に女を中にして寫したもの、中でも殊にはつきりして居た。『それは大阪で撮つたのよ。其時分、家では大阪に行つて居たのよ。私七歳の時だわねえ。』かう言つてその